

ヒトラーの年代

970
K
55

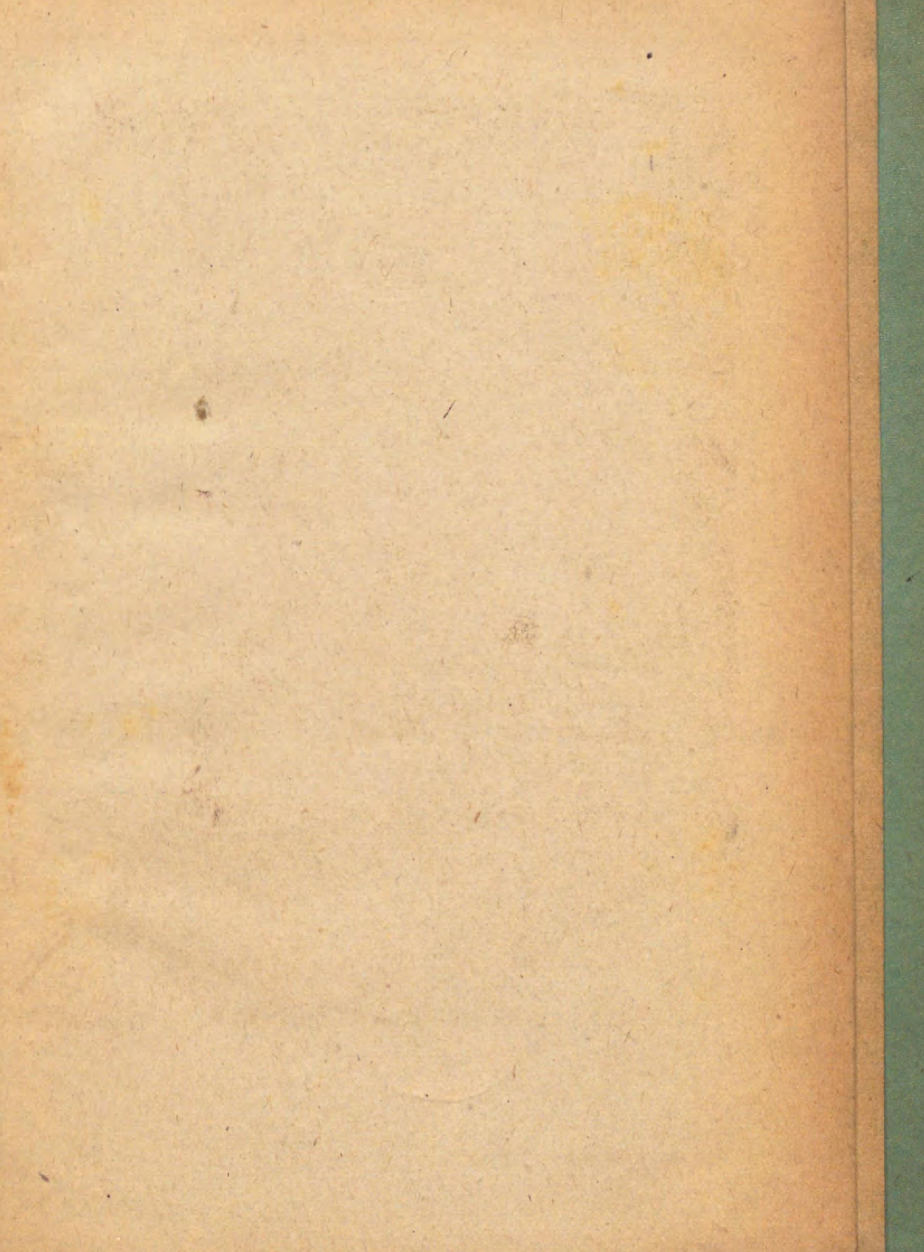


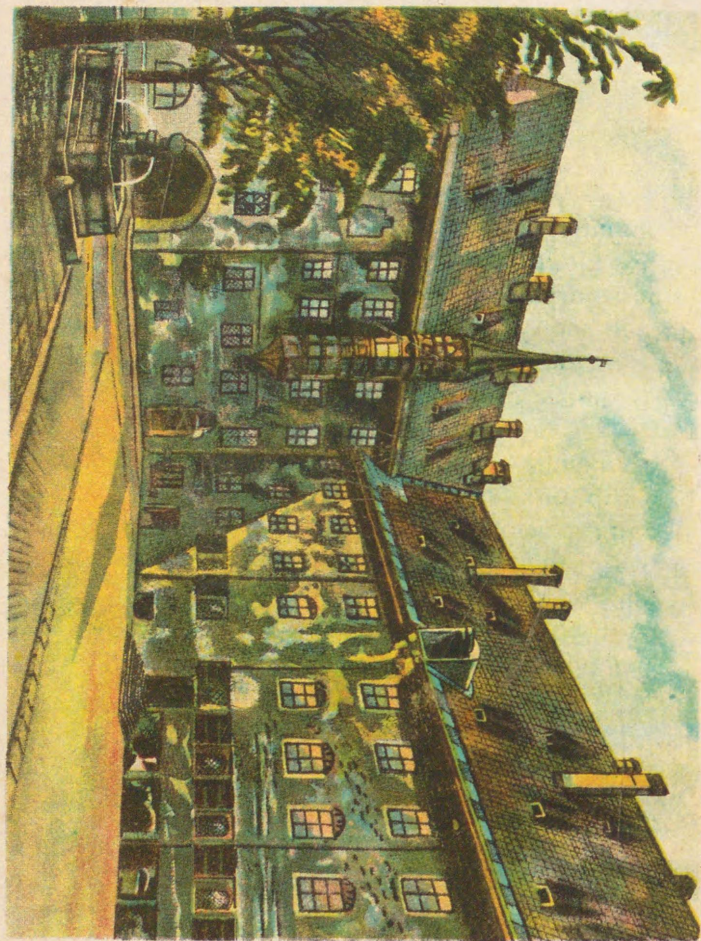
少時年代のヒラタチ

谷丹三著



東亞書院





序

私たちの敵はアメリカとイギリスです。私たちの味方はヨーロッパではドイツとイタリーですが、さて、みなさん、ドイツとイタリーはどうして私たちの味方になつたのでせうか。知つてゐますか？

日獨伊三國同盟があるからだつていひますか。もちろんこの同盟は非常に大切なものですが、それではどうしたわけで、それが出来上つたのでせう。私たちの敵であるアメリカやイギリスは、古い考へをもつた國で、それに新しい時代のことをけなす物の分らない老人のやうな國です。そして、若い、元氣のある日本のやることに、いちいち文句を言つて、つひに大東亞戰をひき起したのですが、同じやうなことがドイツやイタリーにもいはれます。だから、三つの元氣のある國が手を握つて立ち上つたのは全く不思議はないでせう。

そのひとつの國のドイツは、みなさんもよく知つてゐるやうに、ヒトラア總統が

ひきゐてゐます。ドイツはまへの世界大戦で負けて、さんざんな目にあつたのです。が、ヒトラー總統が出てきてドイツを建て直しました。まあ、すぐれた建築家といつたところですよ。じつさい、若いとき、ヒトラー總統は家をつくる建築家にならうとしてゐました。それなのに、なせ、國家をつくる政治家になつたのでせうか。それから、また、新しいドイツを、めちやめちやになつたところから、つくりあげるのは、さぞかし大變であつたらうと思ひます。

それがよく出來たのは、小さいときから、ヒトラー總統が誰よりも國を愛する心と、誰よりも負けじ魂をたくさん持つてゐたからです。この本は、この二つの精神が、どのやうに育てられて、どのくらゐ大きくなつたかを、繪のやうに書いてみたつもりです。私たちの敵アメリカとイギリスを負かすには、せひとも若い私たちがこの二つの精神を大きく持たなくてはならぬと考へますので。

昭和十八年四月

著者しるす

巢を立つまで

目次

ハイル 騒動	五
亡びゆくオーストリ	一六
司教か將軍か	二六
父と子	四二
少年愛國者	五九
日本びいき	六九
ドイツ國民黨	八一

若　　い　　鷺……………九二

人生修業

ウィーソンの現實……………一〇六

社會民主黨のからくり……………一一九

ぶきみなユダヤ人……………一二九

反ユダヤ主義者になる……………一三五

前途の光明……………一四三

民族議會……………一五三

ナチスの先驅者……………一六二

ヨーロッパの火藥庫……………一七一

ミュンヘンにかへる……………一八〇

ヒトラアの出征

世界大戦はじまる……………	一八九
いよいよ開戦だ！……………	一九六
タンネンベルクの大勝利……………	二〇四
強くなるのはわけはない……………	二一四
フランス空中宣傳部……………	二二二
銃後はどうか……………	二三三
宣傳戦に負けたドイツ……………	二四二
ドイツのために立上る……………	二五三
結びの話……………	二六六



巢を立つまで

ハイル騒動

ある日のこと、オーストリのリンツといふ町の國民學校で、頭をつるりと禿げた校長先生が一段と高いところに立つて、全校生徒に話をしてゐた。いつもさうやつて訓話をなさるものだから大きな聲でなかなかうまい。

「こゝにゐる皆さん、皆さんは利巧だから、きつと覺えてゐるにちがひないと、わしは思ふが、いつかお話したコルベ大公殿下が市役所の落成式においでになる日もあと三日となりました。それでコルベ大公殿下をわれわれ國民學校の一同がお出迎へするのに、當日、やりそこなつては大へん申しわけないことである。ついてはこ

れから……」

校長先生がきつと大きな聲をはりあげてゐるからだらう。いつもの血色のいゝ顔がまるでゆで蟹みたいに赤くなつたとき、並んでおとなしく聞いてゐた生徒たちのあひだにがやがやさはぎがもち上つた。何だらう？　校長先生ははつとしたやうに話をやめて、生徒たちの頭を睨みまはしながら、どの子がさはぎはじめたかを見つけようとする風であつた。そのうち、がやがやいふこゑの中から、「小犬が」とか「小便をしてゐます」とか「演臺の下で」とかいつてゐるのが聞える。校長先生がそれに氣がついて、後ろを振り返つたときには、もう、演臺のところで用をすました白い小犬がすたすたと門のはうに駆けてゆくところだつた。子供たちはどつとふき出した。校長先生も、ふだんの赤らみを取り戻してにこにこ笑ひながら

「大公殿下のおいでになる當日には、萬が一にも、こんなことはない、わしは思ふが、何が起つてもそんなに騒いではいかん。では、これより、歡迎會の練習にと

りかゝることにする。」

生徒たちは市役所まへの廣場に並んだつもりで、校庭の兩側に四列づゝならばされた。校長先生はそれが出来るまで壇上で眺めてゐたが

「それでは、皆さん、しづかにしてそのまゝ立つてゐる。わしがこれから（世にかくれない大公殿下）と叫ぶから、そしたら、皆さんは、いつせいに（ホッホ、ホッホ、ホッホ）と元氣よく言ふ。いゝかね。」

ホッホ？ 無心に校長先生を見上げてゐた生徒のうちに、その中にはぼかんと口をあけてゐるものもゐたが、その言葉を聞いて、大人のやうに、これは意外だと怒つた顔つきをしたものがあつた。それを知つてか、知らないでか、校長先生はだまつて列をつくつてゐる生徒の耳に、大きな靴音をひびかして歩いてゆき、ひとつの列の先頭に立ち止つた。間もなく、校長先生の破れるやうに大きな（世にかくれない大公殿下）につづいて、生徒たちの（ホッホ）がダニユーブ河に波を起しさう

なひゞきで鳴りわたつた。

歓迎の練習はなかなかうまく出来たと校長先生から褒められて、生徒たちは三人あるひは五人の組になつて校門を出て行つた。ある組は、大空をつき破るばかりに高く立つてゐる教會の尖塔の方へ歩いてゆく。またある組は「歌劇ウキリアムテル上演中」と書いてあるオペラ劇場の繪看板の下に立ち止つたりしてゐる。そしてまた、ある組はらつぷ、らつぷとせはしげな音を立てゝ流れてゐるダニユーブ河のほとりを家路にとつてゐる。

この組になつた生徒はきつと六年生ぐらゐにちがひない。それでなければ、河の中へ石を投げこんだり、追ひ駆けつこしたりして歸るところなのに、なにかしきりに議論をしてゐる様子だからである。中でも一番、口を尖らしてしゃべつてゐる生徒がすぐ目についた。房々とした栗色の髪の毛をして、それと似た色のいかにも腕白さうな目で仲間を叱りつけてゐるやうである。

「僕たちはドイツ人だらう。さうしてコルベ大公殿下もドイツ人でいらつしやる。それなのに校長先生はチエツク人のホッホ（パンザイ）をなせ僕たちに言はせようとするんだらう。をかしいぢやないか！ ドイツの子供がドイツの大公殿下をお迎へするのに、ホッホと言へなんて！ まるで乞食の咳みたいだ。」

「あつ、はつ、はつ。」

「だから、僕がさつきから言つてゐるやうに、ドイツの子供ならドイツ語のハイル（同じくパンザイといふ意）でゆかうぢやないか！ 君たちみんな賛成だらう。」

「賛成！ 賛成！ 賛成でござる。」

校長先生から（ホッホ）と叫べと言はれたとき、この生徒たちはみんな怒つたものでもであつたらしい。ところが、ひとりダビッドといふ生徒だけは何も言はないでだまつてゐる。手だつてちゃんとぶらりと下げたまゝだ。この少年を目ざとく發見した栗色の髪の少年はつかつかと歩みよつて

「君も賛成なんだらう。」

とやさしい口調で言つた。

「うん、ただどねえ、アドルフ、校長先生に叱られるよ。」

「だつて、君もドイツ人だらう。」

アドルフの聲がまた荒々しくなつたので、ダビッドはだんだん後しざりするていだ。

「おい、ダビッド、この河を見てごらん。こんなに勢よく流れてゐるぢやないか。いつたいこの僕たちのダニユープはどこからやつてくるか、君も知つてゐるだらう。地理の先生が、ダニユープ河はドイツのバイエルンにある黒森から發するとおつしやつたのは、僕たちドイツ人の子供の一人として忘れられないことだよ。きつと、このダニユープだつて、よく耳を澄して聞くとドイツ語をしやべつてゐるにちがひない。ねえ、ダビッド、だからまた、いくら校長先生が叱るからといつて、僕

たちがチェック語を使ふなんていふのはどうしてもへんなんだよ。君もドイツの子だらう。」

「うん。」

「ぢや、君もハイルつていふだらう。」

「うん。」

アドルフに言ひ詰められて、そのとんで出る言葉に殴られやしないかといふ風に片肘を目のあたりまで持つてゆきながらダビッドは、たうとう承知した。それで大きい生徒も小さい生徒も、河べりの途を歩き出しながら、アドルフの提案したとおり、明日、學校へ行つたら、ひとりが六人のハイル組をこしらへて、そのまた六人の新ハイル組にそれぞれ六人の加入者をつくらせるといふ議決を小さいくせに大きく、「承知承知」とうなづいた。

アドルフのハイル工作はどういふ風に進行して行つたらう。校長先生はおろか、

外の先生もちつとも知らなかつた。いや、一人、それでなければいくたりかのドイツ人の先生がうすうす感づいてゐるのに知らん顔してゐたかもしれない。そのうち、當日になつてしまつた。シルクハットをかぶつた市長ときらきら光る十字架を胸にぶら下げた司教とが驛までコルベ大公殿下をお迎へにあがつた。殿下は四輪馬車に召されて、沿道に整列した市民たちや、バルコンから旗を振つてゐる女たちのホッホ、ホッホといふ歡呼に、ほゝゑみをもつてお答へになりながら、いよいよ市役所の新廳舎にお着きにならうと遊ばされた。

そこには國民學校の生徒たちが固唾を呑んで並んでゐるのである。校長先生はやをらシルクハットをぬいで、血色のいゝれいの頭を見せびらかして、

「世にかくれない大公殿下」

と大音で呼ばはつた。すると、突然

「ハイル！　ハイル！　ハイル！」

といふ子供らしいいきいきの合唱がまき起つた。校長先生の頭はいきなり冬瓜のやうに青くなつて、シルクハットがころころと轉り出すさはぎである。アドルフの策謀が見事成功したのである。しかし、コルベ大公殿下は生徒たちの元氣のいゝドイツ語にますます御機嫌うるはしく式場へお臨みになつた。

式の濟んだあと、校長先生は心配のためにぶるぶる慄えながら、殿下のまへにまかりでゝ

「この度のことは、まことに申しわけ……」

と申し上げようとすると、

「いやあ、この度のこともといふほどのものぢやありませんよ。子供はあのくらゐの元氣がなくてはだめです。」

殿下からは別段のお咎めもなかつた。まあ、それで校長先生もほつとしたが（これからあることだから。）

と考へて、事件の首謀者を探すことになる。きつとドイツ人の子供がやつたことだらうと調べてみるが、その生徒たちはみんな口にふたをして白狀をしない。そこで校長先生は、ふだん、ドイツ人でないといふので、青チビなどゝいふ渾名をつけられてゐる先生を呼びにやつて、何か耳打ちをした。先生はへいへいと畏つて、それを聞いてゐたが、最後にひとつ大きくへいとやつて校長室からとび出すと、一人のびくびくしてゐる生徒をつれてまたとつて返してきた。

「君がダビッドといふ子だね。」

「えゝ」

「君は、今度みんなが（ホッホ）といふところを、みんなが（ハイル）といったね。君もさういつたのだらう。」

「いえ、僕は言ひません。」

とダビッドは小さい聲でいつたが、ほんとのところはさうではなかつた。しかし

校長先生はそれを聞くとにこにこして

「さうか、それはよかつた。わしも君がさういふとは思つてゐなかつたよ。それで聞くがねえ、いつたい、此度のことは誰がやらうと言ひだしたのだい。え、だまつてゐては分らんぢやないか。こゝにゐる人は誰も君の言つたことをしやべらないから言つてごらん。」

「アドルフです。」

「え、アドルフ？」

「アドルフ・ヒトラアといふ生徒です。」

「ふん、さうか。」と青チビ先生のはうに腰掛をまはして、校長先生は

「あなた知つてゐますか？」

と聲をかけた。

「え、知つてゐますとも。あの子は強情で怠惰で仕末にいきませんです。あ、

あの子供がやつたのか。」

校長先生はそれからまたくるとダビッドの方へ向いて、どこで、どういふ風にして、と詳しくいきさつを問ひはじめた。ダビッドが部屋を出てゆくと、

「これは一度ヒトラアの父兄を呼んでいはいかん。君ひとつ、呼んで下さい。」

と校長先生は言つた。

亡びゆくオーストリ

それでは、いつたいオーストリの國民學校の校長先生はどういふわけでドイツ人の生徒たちにチェック語を使はしたのだらう。勿論、校長先生はオーストリ政府の訓令によつてさうしたのにちがひないが、とすればまたどういふわけでオーストリ

政府は晴れの場所ではチェック語を言はなくてはいかんと命令したのだらう。

そのわけを話すには、前章の事件が起つた頃、つまり今からちよつと四十年ばかりまへのオーストリ國について語らねばならない。

その頃、オーストリはオーストリ・ハンガリ帝國といはれてゐてヨーロッパの大帝國であつたが、いやはや、その中をのぞくと大へん厄介な國であつた。といふのは領土が大きいために、いろいろな民族がはいりこんでゐる。ゲルマン民族があるかと思へばラテン民族がある。スラヴ民族があるし、マヂヤル民族も住んでゐる。それがまた大へんである。ゲルマン民族といふのはドイツ人のことであり、ラテン民族は主にトランシルヴァニア人とイタリ人に限られてゐて、またマヂアル族といふのははるばるアジアからやつて來たハンガリ人であつたが、スラヴ民族となるとチェック人、スロバツク人、セルビア人、クロアト人、スロヴエン人、それからポーランド人といった風に細く分けねばならないからである。

それもいい。このやうに多種多様な民族が力を併せて國を盛り立てゝゆかうとするならば、それでもいいが、隙さへあれば四方へ離れようとしてゐたから大へんだ。そして、オーストリアの國はそろそろ命が危くなつてゐたから、ハンガリ人はブダペストに都をつくつて首府のウィーンと競争をはじめし、スロバツク人はブライグ市を中心にするやうになるし、それからポーランド人はレーンベルグ市に、セルビヤ人はライバツハ市に集つて、それぞれ首府のウィーンをだし抜かうとしてゐた。さうなつたら、ドイツ人の都でもあるウィーンは氣が氣ではないだらう。

こんな厄介な國を治めてゐたのはハプスブルグ王家といつて、もとはといへば、わづかひとつの城と數ヶ所の小さい土地しか持つてゐなかつたドイツの豪族、ルドルフ一世である。その後、さばてんのやうに、あちらこちらの土地を併せて、ひと頃はヨーロッパ全土をその治下においたこともあつた。しかし、そんなに國威をあげてゐるときでも、をかしいことに、ハプスブルグ王家は國がなかつた。ドイツか

ら出て、ドイツと切つても切れない關係にあつたのに、はじめは王室の言葉として、ラテン語を採用し、間違ひだらけのラテン語をしやべつて得意になつてゐた。領土がスペインにひろがつたときはスペイン語が用ひられる。イタリイの都市をたぐさん手に入れたときは、イタリイ語が通用する。それから、フランスのさかんなときには、フランス語を使つたりした。

やうやく、もとのドイツ語にかへつたのは二百年まへぐらゐからで、それもだんだんと勢力が衰へてひとつひとつ領土を失ひはじめた時である。しかし、さうなつたのも束の間であつた。いくつかの小さい王國や公國から出來てゐたドイツ聯邦のなかで、オーストリと並んで二大強國と呼ばれてゐたプロシヤ王國に、あの有名なビスマルクがあらはれて、小さい國の寄り集りにしかすぎないドイツ聯邦を拳の中へ握りしめて一つにするにはオーストリを追ひ拂ふより方法はないと考へ出したからだ。そして、ビスマルクを宰相にしたプロシヤ王國が、そのプランどほり、オー

ストリに戦争を挑んで来て、サドワといふところでプロシヤ軍は大勝し、その結果、オーストリをドイツ統一の外へ追ひ出してしまつたのだから、ハプスブルグ王家はドイツが口惜しくてたまらなくなつたのである。

何とかしてプロシヤをやつゝけたいと考へたのは、プロシヤ・オーストリ戦争で負けたフランツ・ヨーゼフ皇帝ばかりではなかつた。それから三十年ばかりたつて皇太子になられたフランツ・フェルヂナンド大公ときは猛烈なドイツぎらひである。そしてまた同じくらゐ猛烈にチェックびいきであつた。これはまた、いつたいどうしたことだらう。きつと大公のお迎へになつた妃殿下がチェックのさる伯爵のお嬢さんであつたせいにながひない。そして大公は大へん妃殿下を大切になされたから、王室はチェック語の流行となつた。それから、ハプスブルグ王家の方々を迎へるときには（ホッホ）が用ひられることになつたわけである。

ドイツぎらひのフェルヂナンド大公がオーストリで流行させたものは、たゞチエ

ツク語ばかりではなくてチェツク人でもあつた。ドイツ人の都であるウィーンにもチェツク人が大手を振つて歩くやうになる。ドイツ人ばかりのリンツの町にさへチェツク色が濃くなつて、チェツク語の看板なんかどぼつとあらはれてくる。かうなつてはドイツ人たるもの氣が氣ではない。なにしろ、オーストリのとなりでは自分たちの仲間がドイツ帝國をつくつて日に日に勢ひが盛んになつて行くのだから、自分たちもスラヴ民族には負けてゐられない。

オーストリに住んでゐるドイツ人はこんなわけで、ドイツ語とドイツ人を護るにはどうしたらいいかと思案のあげく、まづ小學生に目をつけた。(ドイツの少年よ、ドイツ人であることを忘れるな。ドイツの少女よ、ドイツ人の母となることを忘れるな。)とドイツ人會の心あるものは、こんな文句をいくつもいくつも作つて、ドイツの子供たちに歌はせるやうにした。何かといふと、いつでも子供たちの胸にドイツの國華である矢車草をつけさせたり、横に長く、黒、白、赤と染めた旗(つまり

ドイツの國旗だが）にむかつてドイツ語の挨拶を言はせたものである。

國民學校ではしかし、フェルデナンド大公殿下がロシアのとなり別なスラヴ族の國を作らうと考へられたとほりを學童に仕込まうといふのだから、生徒がドイツの徽章をつけてくれば叱る、ドイツの國歌の（ドイツよ、世に比なし）を歌へば怒るといったものだつた。

ドイツの子供たちは

「どうして先生は怒るのだらう」

と考へてみても分らなかつた。でも、どの國よりもドイツが強く、しかも優れてゐるといふことだけはよく知つてゐた。しかし、さういつた中でも、大人のドイツ人と同じやうに、子供たちにも三つの型が出来てゐた。先生に叱られても何でもドイツを旗印にしようとする生徒がある。と思ふと、ドイツ語を捨てゝも先生の言ふなりにならうとする生徒がある。そして、その二つのうちどれでもいいといふ生

徒があつた。

アドルフ・ヒトラアはこんな生徒の中で、わけても、（何でもドイツ）の組の旗頭である。だから、ハイル事件などをしてかして、校長先生からも叱られたんだが、それについては、青チビ先生から、どうして「強情、それに怠惰」など、いふレッテルを貼られるやうになつたのだらう。

元來、青チビ先生といふ方はその名のとおり、背が小さくて、青い顔をしてゐるくせに、とつても怒りぽかつた。そこへもつてきて、ドイツ人ではないといふのだから、ドイツ人の生徒たちは、この先生の時間になると、何か悪戯をして先生を怒らして見たかつたにちがひない。だつて、よく怒るけれど、青チビ先生ぐらゐ、怒り方が下手でちつとも恐くない先生はゐなかつたのだから。

そんなわけで、ある日のこと、アドルフはひそかにポケットにいれて學校へ持つて行つたドイツ國旗の小さいのを、机の上に立てゝゐた。怒りつばい先生の時間に

である。しかし、先生のはうから眺めても何ともなかつたといふのは、まへの生徒の背中ですつかり小旗がかくれてゐたからだ。まづ何ともなかつたので、だんだんそれにあきてきた腕白小僧は、先生が後ろを向いて、黒板に字を書くときをねらつては、小旗を抜きとつて、右手に高く持ちあげはじめた。後ろの生徒たちが小さいこゑで

「ハイル、ハイル。」

と言ひ出すから、前にゐる生徒もなにかしら音を立て、後ろを向く。

（何かやつてゐるんだな。）

と先生はさつそく感づいて、ひよつと教壇の上で振りかへる。ところが、目に映つたところは子供たちの、灰色や、金色や、栗色の頭がしづかに並んでゐるだけであつた。なんのことはない。アドルフはまた右手で高くドイツの小旗をあげるだけでは物足らなくなつて、今度はそれを左右に振りはじめた。かうなると騒ぎも大きくなる。

先生は、ふと、廊下の方のガラス窓を見ると、アドルフが頬をふくらしながら、小旗をふつてゐるところや、前の生徒が後ろをふり返つてゐる光景が手にとるやうに映つてゐる。

「アドルフ！」

先生がかう言つたのと生徒のはうに向き直つたのと同時だつた。ドイツの旗はすつかりまるだしである。青チビ先生は背が小さくて教臺のところに立つと、やうやく首が出るくらいといつてもよかつたのだから、生徒を叱るときはそこから離れてやればよかつたのに！ その傍らで、しかもきいきいごゑで

「アドルフ、席を立て！」

とどなつたつて、腕白生徒は言ふことをきくものではない。それで、先生は短い腕をふりあげて、それからつひに、靴の底でほんと教壇の上を叩いて

「席を立て！」

と號令したが、アドルフは動かうとはしなかつた。

「よし。それならいゝ。お前のお父さんと呼んできて、よく言つてやらう。」

こんなことで、アドルフのお母さんはよく學校に呼ばれてお叱ごつとを頂戴した。

それから、お母さんは子どもに意見したが、その先生も、お母さんも、のちにこのアドルフ・ヒトラアといふ（何でもドイツ）の組の腕白小僧が、オーストリの國をなくして、ドイツの國の中へいれ、その名もドイツのオストマルク（東方地區）と改めるとは思ひもよらなかつたことだらう。」

司教か將軍か

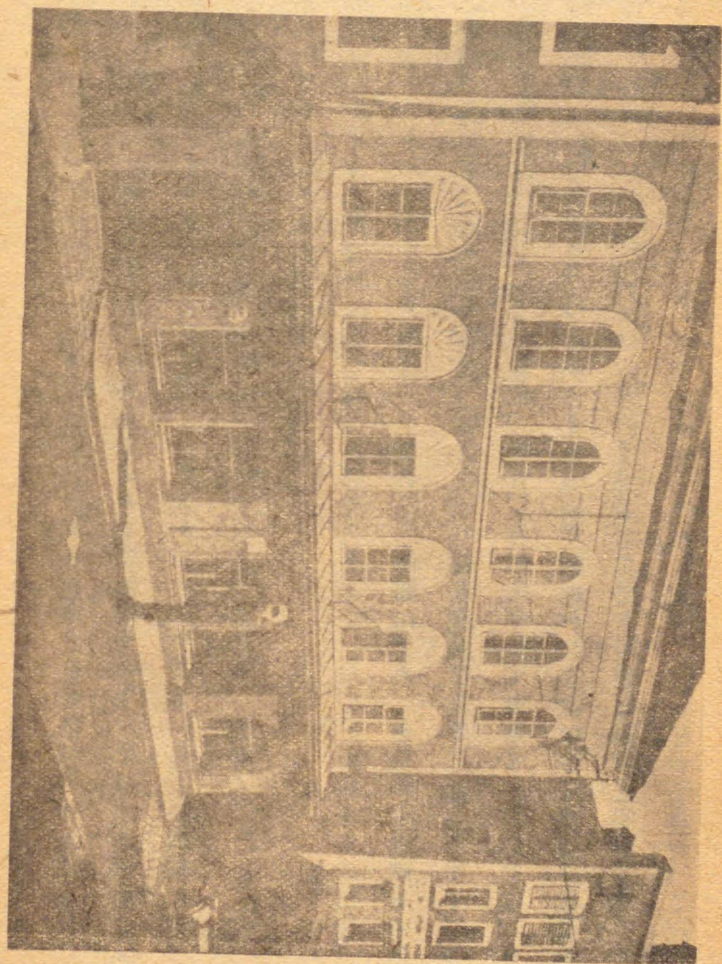
アドルフ・ヒトラアは一八八九年四月十一日、オーストリ・ハンガリ國のさゝやかな町、ブラウナウといふところで生れた。ちやうどこの頃、ベルリンではドイツ

のカイゼルといつてわれわれにも親しいウイルヘルム二世の即位の式がはなばなく行はれた。それから、オーストリ・ハンガリの首府ウイーンでは、チエツク人をひいきにして、ドイツ人をいぢめ出したフェルデナンド大公が皇太子の位におつきになつたといふのでウイーンの町はお祭のさはぎであつた。だけど

「アドルフちゃんが生れておめでたう。」

といつてヒトラア家の門に立つたひとは五人とゐやしない。それもそのはず、お父さんのアロイス・ヒトラア氏はブラウナウの税關に勤めてゐる小さな役人でしかなかつた。鼻の下には勿論のこと、腮のところにも立派な八の字ひげをくつつけて、いつも難かしい顔をしてゐるが、毎日、役所でやつてゐることゝいへば、イン河をへだてたとなりの國、つまりドイツのバイエルンからいつて來る小麥袋とか羊毛の包とか、またはこちらから川を渡つて送り出す葡萄の箱だとかから税金を取り立てることである。おまけにアロイス氏はもう五十二にもなつてゐた。これから

アラウカリアのある家——この二階 ヒトラアは生れた





赤 坊 の 頃

四五年もすれば停年になるのだから、わづかな恩給でたのしくつゝましく暮すことしか考へてゐなかつた。

ブラウナウ税關の官吏、アロイス・ヒトラア氏はもとを糾^{たづ}せば、田舎の貧しい百姓の子どもであつた。あばら屋にすんでゐて、年から年中のこと、黒パンとチーズだけが親しい友だちである。肉を喰べることもなして、それは年に五六度やつてくるめづらしい友だちといつたわけだつた。物心がつくと、まづ村一番の偉い人物といふことになつてゐる司祭(坊さんのこと)になりたいと考へたが、それも無理がない。兩耳のところで、つばの捲れあがつた山低帽^{やまひぼう}をかぶつた坊さんは誰にでもうやうやしく挨拶される。何か御馳走といふと、きつと招待されて一番いゝ席に坐つてゐる。おまけに村の人から、肥つた雞だとか卵、チーズが雨のやうに降つてくるのだ。

「これは司祭になるに限る。」

と小さいアロイスは考へたが、さうなるにはまづ勉強して神學校へはいらなければならぬ。ところが、その勉強といふのが、村ではなかなか思ふやうにならなかつた。そして町へ行つてそれをやるには、家中いつたいがその日暮しときてゐるのだから、どうていだめの皮である。心が坊さんのことから町のはうへ移轉してゐるところが、そこへウィーンの靴屋がやつてきた。アロイスはさつそく靴屋の小僧になるのだといつて皆をびつくりさせた。村の人たちはいろいろの失敗した若者の話を例にもち出して

「ろくな夢などみるものでねえぞ」

と云つてみたが、少年は一度言ひだしたらあとへはひかない。そしてウィーンの町へ小僧になりに出かけたのが十三のときである。さてウィーンに行つてみると、驚いたことには建物のひどく大きいのが並んでゐるし、そこに中はいろいろする人たちがきれいな四輪馬車なんかに乗つてゐる。

「いつたいあの人たちは何ですか。」

とたずねると兄弟子は

「お役人だよ。」

と答へた。坊さんの馬車はめつたにお目にかゝらないが、役人のそり返つた禮服姿はあきるくらゐあらはれる。それで小僧の心はいつしかとなく、坊さんとウィーソのことを忘れて役人になりたいと言ひだした。しかし、それにはまた試験がある。小僧はそれから一人前の職人となり、またそれから髭を生やした大人となつて行つたが、毎年同じ試験を受けては落弟した。あるとき、友だちの一人が手紙をよこしたので、封を切つてみると、中に繪が描いてある。大きな山がひとつの線で書いてあるその下のところに、蟻が一匹畏つてゐる圖である。そして手紙の文句によるとアロイス蟻はいつになつたら山の頂上へのぼれるだらう、山さへ登る氣にならなかつたら、今頃はアロイス靴店が繁昌してゐることであらうにいつたものだつた。

「バカにするな。」

アロイス氏は怒つて友だちの手紙をびりびりと破き、それからまた机にしがみついた。こんなことがあつたから、今度こそはうまく行くだらうといふところなのに、またもや落つこつた。そして、アロイス蟻がひとつの頂に、といふのは山の頂はまだなかなか遠いところにある峠といった試験に、やつと受かつたときは四十歳にもなつてゐた。その年ではたとへ官吏になつたとしても、もはや偉い官吏にはなれぬのである。官吏の世界といふのは石段をひとつひとつ上つて行つて、やうやく見晴のきくいゝ位置につけるもので、一足飛びにそこへ行くことはとうてい出来ないからだ。

だから、アロイス・ヒトラア氏はアドルフが生れたのにこにことほゝるみを浮べたとき

「この子はどうしても偉い役人にしなければいかん。」

と考へたのである。後になつて、この子と呼んだアドルフ・ヒトラアがドイツで一番偉い男になり、そののみか、オーストリを併合して、税關なんてものはいらなくしてしまふなど、は少しも思はなかつた。五十の坂を越したお父さんは、この子の大きくなつてゆくのをたのしみにして、ブラウナウから同じ税關町のパッサウに轉勤し、それからまたリンツの町へ移らされた。そこでたうとう退職となつたが、身體はいゝし、また百姓の子供でもあつたので、リンツ近くのレオンチング村にさやかな土地を買つて、のんきにじやがいもの栽培などをするこゝになつた。

アドルフがやうやく大きくなつて、大人になつたら何にならうかと考へはじめたのは、ちやうどその頃で、待ちかねたお父さんが

「アドルフ、いつたいお前は大きくなつたら何になる。」

とたづねると

「さうだな、僕は坊さんにならうかな。」

と答へてお父さんをびつくりさせた。お父さんは（この子もまた俺の考へたことを考へてゐるのか）とびつくりしたわけだが、子供のほうのは同じ坊さんでも位の上の司教のことにうつとりしたのである。なにしろ、お父さんの小さな村とちがつて、リンツの町はかなり大きな町であつたから、教會だつて大きくて、千本以上の蠟燭があがることがあるし、その上同じ蠟燭といつたつて中には十五尺ぐらゐのものもあるんだ。そんなところへ、お伴をたくさんつれて、紫の服の上にぴかぴか光る白い薄紗の衣をきてゐる司教がしづしづと歩いてくる。そして、信者の心を捉へないではおかない、るるとした説教をするのである。

「うん。」といつてしばらくだまつてゐたお父さんは

「それもいいゝかなあ、お前はしやべることがうまいし、それに坊さんだつて悪くはない。ただどねえ、アドルフ、坊さんになるのだつたら、役人になつたはうがどのくらゐいゝかshれないよ。坊さんだつて偉い人はいゝが、その偉くなるまでが大へ



んで、それまでといふもの黒い服を着て、年がら年中青い顔をしてゐなければなら
ないのさ。そこへ行くと、役人になればすぐ立派な馬車に乗れるし、とんとん拍子
で出世できるんぢやないか。アドルフは馬鹿ではないんだから、役人になることに
決めて、しつかり勉強するのだなあ。」

と反對した。

それで小さいヒトラアは坊さんになることをあきらめた。といふより忘れてしま
つたのだらう。ところがそれからまた新しい志望が心の中に湧いてきた。それはも
う小學校の上級生になつた頃だつたので、かなり字が讀めるやうになつてゐる。お
父さんの本棚から、おもしろさうな本をだまつて失敬して、こつそり讀むのが愉快
でたまらない。

こんなことで、或る日のこと、「普佛戦争物語」とあつて、赤い表紙に、ドイツ軍
の歩兵がしやれた髪を生やしたフランス士官を追ひかけてゐる勇しい繪が貼つてあ

つた本を見つけた。頁をめくつてみると、戦争の繪がいつばいはいつてゐる。(こいつはおもしろさうだなあ)、と自分の部屋にとちこもつて、胸をわくわくさせながら読み出した。

「ばんざい。ドイツ軍はまた勝つたぞ。」

彼はときどき夢中になつて、大きな聲をはりあげた。

いつたい普佛戦争といふのはどんな戦争だらうかしら。前にも言つたが、ビスマルクがドイツの統一を目指して、それでもつてオーストリアをドイツの外へ追ひ拂つたのが一八六六年のプロシヤとオーストリアの戦争、つゞめていふと普墺戦争といふのだつたことは忘れてゐないだらう。その戦争から、わづか四年たつたぐらゐで、この普佛戦争、つまり、プロシヤとフランスの戦争がはじまつた。それといふのもドイツが統一されたとはいへ、北ドイツばかりのことで、まだ南ドイツのバーデン、バイエルンといったやうな國々はちよつと何かあればすぐ離れさうになつてゐる。

これではいけない。北も南もすべてひとつになるにはどうしたらいいか？ それには昔からの仇敵であるフランスと一戦し、北の國も南の國もひとかたまりになつてゆけば、それでもつてドイツの統一は完成するだらう、と考へたのはやつぱりビスマルク大宰相であつた。

しかし、そんなことは、小さいアドルフがひらいてゐる「普佛戦争物語」には書いてはない。いつたん、スペインの國會がプロシヤ王家の血を引かれてゐるレオポルド親王を王にすることゝきめたのに、フランスでは、ときの皇帝ナポレオン三世をはじめとして、それではフランスが南と北からドイツに壓迫されて危険であると騒ぎ出し、レオポルド親王に辭退させようと運動しはじめた。これが普佛戦争のきつかけである。

いよいよ戦争かといふまへ、フランスではときのオリビエ内閣がサン・クルー宮殿で御前會議をひらくことゝなつた。功名好きのナポレオン三世も、初めは勝てる

かどうか大へん心もなくておいでだつたが、陸軍大臣のルブーフ將軍らが強い見
幕で主戦論を唱へ、ことに將軍が

「兵士のゲートルのボタンまでみな用意してございます、陛下。」

と進言したのに及んで、たうとうナポレオン三世も動かされてしまつた。

ところがいざ戦争を宣言してみると、ボタンどころか、軍服やゲートルがない軍
隊があらはれた。召集された兵隊のうちで、

「いつたい、俺の聯隊へはどういつたらいゝのだい。」

とまごまごする者もあつた。そしてフランスの將校ときたら、「普佛戦争物語」の
表紙に描かれてしまつたやうに、まじめな戦術よりも、ひげの型は、まどんなのが
流行つてゐるかしらんと考へるものばかりであつた。

ドイツはこれと全く反對で、古今の名將といはれるモルトケ參謀總長が何から何
まで用意しておいた。

アドルフがその本の中でまづお目にかゝつたモルトケ將軍といふのは蠟燭が一本灯つてゐる寢室にゆうゆうと横になつてゐる寢衣姿の將軍である。その枕もとに副官が立つてゐて

「閣下、フランスに對していよいよ開戦になりました。」

「さうか。まあ落ち着かうぢやないか。勝利はわれわれのものだからな。動員令はほら、その机の三番目の抽出しにはいつてゐるよ。」

それからすぐ將軍はぐうぐうと高鼾をかいて眠つてしまつた。ところが、翌朝、目を覺して伸びをした頃にはもう數十萬のドイツ軍が國境に向つて進軍してゐたのである。

アドルフはすつかりモルトケ將軍の用意がいゝのに感服した。(これでなければ戦争に勝てないんだな。)頁をあけるたびにドイツの大砲はフランスの機關銃を空にはねとばした。ドイツの騎兵は浮き足立つた敵軍の中へ躍りこんで蹄の先きでフラン

スの赤ズボン（兵隊のこと）を蹴ちらした。ドイツ軍はワイセンベルグでも勝つた。ウエルトではフランスのマクマオン軍を打ち破つた。さうしてドイツに侵入したフランス軍を追ひ拂つたのみか、さつそくフランス領に攻めこんで、たうとうセダン市でナポレオン三世を捕虜にしてしまつた。（ルブーフ將軍の言ふことなんかをほんとにされたから悪かつたのだ。それにしてもドイツ軍はなんて強いのだらう。）とアドルフはさらに感心する。またバリに立てこもつたフランス軍の中から、ガンベタといふ男が輕氣球に乗つて、ふはりふはりとドイツ兵の頭の上を飛んでゆく繪を見ては、（戦争つてするぶん勇しいことも出来るんだなあ。）と羨しがつた。

つまり、こんなわけで、アドルフは軍人になりたいと考へるやうになつたが、まづまづ戦争ごつこでドイツの將軍になるだけでしばらくは我慢しなければならなかつた。しかし、それにしても、變だなあと思つたのは、同じドイツ人でありながら、オーストリのドイツ人がフランスをやつゝけに行かないことだ。

「ドイツ人だつてさ、皆がみんなビスマルクのドイツにはいるものではないよ。」

お父さんはかう言はれたが、アドルフにはちつとも合點がゆかない。やつぱり變だなと考へてゐるうち、上級學校へ行くことになつてしまつた。

父　　と　　子

ハイル騷動のことからみると、小さいヒトラーはもう政治家の卵であつたといつてもいいのだが、といつたところで、御本人はそれに氣がついてはゐないし、またさしせまつて小學校を出て上の學校へ行くとなると、お父さんのふところ工合のこともあるし、またその希望といふこともなかなか重大になつてくる。第一、十一や十二で、世の中のことが何も分らないのに、何がいちばん性にあつた將來かといふことが分つたものではない。

國民學校を出る頃のアドルフは

「僕は繪が好きだよ。」

と云ふ外は何もなかつた。

ある日、お父さんは夕食のすんだ頃を見計つて

「さあ、アドルフ、お前はどこの學校へ行くかなあ。」

と口にくわえたバイプを手にとつた。

「僕、さうだなあ、中學へ行かうかな。」

「中學か、ふん、中學へゆくとなると、高等學校まではいらなければならん。ところが、高等學校を出たつて何も使ひものにならないから、大學へすゝまなくてはならない。そこで、大學にはいる。はいつたのはいいが、大學教育は頭でつかちの間ばかりつくつてゐて、實際の役に立つ人間をこしらへようとしてゐない。まあ、中學は止めにするんだなあ。」とお父さんはこゝで一休みしてバイプの煙をあげて、

「それに中學ではお前の好きな繪の時間がほんの少ししかないよ。」

と云つた。さう言ふお父さんのアロイスは髪は毛はもちろんのこと、自慢の髭さへもすつかり白くなつた六十の爺さんになつてしまつた。息子といふより孫といつたほうがしつくりするやうなアドルフを早く一人前にしなくてはならないから、それに少い恩給のことも計算にいれなくてはならないから、大學教育の悪いところばかり目についたのである。しかし、それはともかく、最後の文句に、アドルフ少年はすつかりまいつた。

「繪の時間のない學校なんていやなこつた。」

かういふわけで、アドルフはリンツの町の實科學校へ通ふことになつたが、それから大へんなことがもち上つた。

お父さんは、毎日、壁にかけてある昔の寫眞をながめてゐる。それはブラウナウの町の税關を背景にして、五六人の同僚と並んで撮つたものであるが、アロイス氏

もまた彼らと同じやうに胸のところをボタンが二列にならんでゐる税關吏の制服をきて、見事なひげで外のものよりずつと偉さうに見える。寫眞の上には「ハプスブルグ王室萬歲」と書いてあるし、下の方には、人物の名まへがそれぞれ違つた字體で書きこんである。お父さんはそれを眺めながら

(アドルフもいつかこんな寫眞を撮ることだらうなあ。しかもつとすばらしい服をきてだ。)

とにこにこしてゐたのだ。だから、ある晩、夕食のすんだあとで、アドルフにむかひ

「お前は官吏になるんだらう、大きくなつたら。官吏といふのはいゝものだよ。」と言つた。

「官吏になる？　僕はいやだなあ、お父さん。」

「ど、どうして、い、いやなんだ。」

お父さんはすっかり周章みはてで、パイプを床の上に落つことした。それを拾はうとしなかつたから、お母さんが腰をかがめて食卓の下を探しまはつてゐる。

「だ、だつて……」

お父さんの見幕けんまくがあんまり恐しいので、アドルフの心臓もどきんどきんと打ちはじめた。

「だつてとはなんだ。だつてとかあさつてとかは町のクリーニング屋が言ふことだ。役人の子なら役人の子らしくはつきりと言つてごらん。いつたいどうして役人になるのがいやなのか。」

「か、官吏になると、毎日、同じ机に坐つて判こばかり押してゐるからです。」

「それから。」

「それから、目上のひとにはぺこぺこするくせに目下に向つては靴べらのやうにそり返つてゐるからです。」

「生意氣なことを言ふな。それから。」

「それから、理窟を言ふのはうまいけれど、やることゝいつたらへまばかりだからです。」

いつの間に、これはオーストリの役人の悪い癖だつたが、それを數へられるやうになつたのかしら。元税關吏のお父さんは、しかし、さう息子から言はれると、なほのこと肚はらを立てた。

「屁理窟をいふのがうまくて何もしないのはお前のことぢやないか。」とお母さんから受け取つたパイプから煙突のやうな煙をあげはじめ。「お前はまだ子供で、世間のことはちつとも分つてをりはせん。だから世間の鹽も少しはなめてきたこのお父さんの言ふことを聞くのが一番いゝことなんだ。世間にはいろいろな職業がある。

この中で一番いゝのが役人だ。それを、何も知らないくせに、いやだといふ。阿呆唐變木とはお前のことだ。お前は商人になりたいといふのか。商人つていふのは資

本がなくてはならん。その資本を小さいものから大きくしてゆくのが商人の出世といふものであるが、それには夜眠つてゐるときだつて金のことを考へてゐなければならぬ。そんな苦勞へもつてきて、お客に向つてはぺこぺこ頭をさげる。しかしそれでどうかといふと、いつも失敗がつかまへようとして待ち構へてゐて、うつかりそれに捕れば、それまでの苦勞も目ばたきするうちに水の泡だ。それぢやお前は學者にならうとする。ところが、この學者といふのは年がら年中、机にかじりついてゐなければならぬ。それで、胃病が慢性になつていつでも青い顔をしてゐる。その上世間のことにうとくなるから、うつかりすると政府に反對なんかしてゐる羽目になつて、手が後ろへ廻ることになつてしまふ。

ところが、役人とくると、いつたん官につけば、金のために夜眠られないこともないし、机のまへに屈んでゐるために胃病になることもない。政府から、ちゃんと給料がもらへるところへもつてきて、またきまつた時期にその給料がふえることに

なつてゐるが、その上退職すれば恩給がついて何の心配もしなくていい。ちよつと偉くなれば、どこへ行くにも馬車に乗つて、胸を張つてゆくのだから、胃病などになる心配もいらなといったわけだ。それからはお前の働きひとつで、局長にもなれるし、大臣にさへなれる。したら、どうだ。國王陛下にちきちきお目にかゝつて、何々は何々でございます、陛下、つて言へるんだぞ。それでも、お前は役人になりたくないか。」

「えゝ、僕は役人なんかになりません。」

アドルフは十一歳の子供であつたけれど、どこか御飯のしんみtainなところが出来てゐた。小學校の先生から、「強情」と書きつけられたのもそれで、これはお父さんから親しくゆづられた天性である。どこまで行つても、だから

「僕は役人なんかにはなりません。」

でまるで壁みたいであつた。ところで、お父さんのアロイス・ヒトラア氏は、こ

れまた息子と負けるとも劣らぬ頑固もので、二十三年もかゝつて役人になつたくらいだから、ちつとや、そつと、息子が何か言つたからといつて閉口たれるやうな御老體ではない。

ある日は、自分の身の上話から

「お父さんはこんな風に苦學しながら試験を受けてゐたものだから、つい年月がかゝりすぎてしまつたんだよ。しかし、お前はお父さんよりかすつと工合よく勉強が出来るから、試験なんかわけはないと思ふね。」

と言ひ聞かした。またある日は、ビスマルクをはじめ、アロイス氏の知つてゐるかぎりの偉い政治家で、貧乏の家から出世した故人の名まへを借りてきて、氣を引いてみた。たうとう、しまひには、さすがのアロイス氏も言葉がなくなつてしまつて、單に

「まだお前は役人になるといはないか。」

と言つた。アドルフは、又か、といふ面持ちでだまつたまゝ答へようとしなない。そこで父と子はランプの赤い光の中に腰かけたまゝ、睨み合ふことになつた。母の心はたゞ心配ばかりするだけで、この場をどうかたづけたものか分らぬから、寢床にはいるが、うとうとしては眼がさめる。寢卷のまゝ起き上つて行つてみると、夫は腰掛の上に足を組んでタバコの煙をあげてゐるし、息子はくつゝきさうな目をしてぢつと坐つてゐる光景である。

「もうお休みになつたらどうですか。あなたは身體にさしますよ。それにアドルフだつて明日は學校があるんぢやありませんか。」

「いや、かまはん、ほつとおけ。」

さういつてあひもかはらず、父と子はランプの光を浴びてゐた。そして夜が白々と明けてくるころには、アロイス氏もうとうとまどろんでゐるし、アドルフも卓に頭をつけてぐうぐう眠つてゐるといふわけだ。いつしか、朝の早い近所の百姓のあ



ヒトラーのお父さんアロイス・ヒトラー氏

ひだに、このヒトラア家の夜わかしランプの話が傳つて、くつろぎ時間のいゝ笑ひ談しとさへなつてしまつた。

しかし、當の父にとつても重大なことであるか、まして息子のアドルフにいたつては氣が氣ではない。小さい身體に大きな悩みといふところである。たつたひとりぼつちで、かつての腕白小僧はしよんぼりと森の中へはいつて行くが、小鳥のこゑがうるさいと思つただけで何も決心がつかないうちに家に戻つた。かつてはとんだりはねたりした牧場の草の上に永いこと寝ころんでみるが、牛のモウ、モウに考へがかき亂されて、氣持はいつかうさつぱりはしない。

(それにしても雲はきれいだなあ。ようし、繪に描いてやらう。)

むつくり起き上つて、家から繪具箱をとつてきて描いてゐると、

(まんざらでもないや。僕は繪描にならうかしら。さうだ、それにきめよう。)

こんな考へが浮んで來たので、畫筆を捨て、びよんと跳ねあがつた。

ちやうど、小さいアドルフがけなげにもその決心をした頃に、れいの食卓をはさんでの問答がはじまり

「そんなに役人になりたくないといふなら、よし、それでは何になりたいのだ。」とお父さんが詰めよつたのである。

「僕はゑかきになります。」

お父さんは、コーヒー茶碗を手に持つたまゝ、しばらく何にもいはないでだまつてゐる。そんな恰好で油揚げのはいつた鍋を持つてゐたら、とんびにさらはれてしまふところだらう。つまり呆然としてしまつたのだ。

「畫家？　ゑかき？」

こんなことを呟きながら、息子の面持をみると、栗色の目がちつとすわつて目ばかりきしてゐない。

「とんでもない。俺の眼の黒いうちはゑかきなどにするものか！」



ヒトラアのお母さん

お父さんのアロイス氏が、どのくらゐ肚を立てたかは、食卓においたコーヒ茶碗がころがつて、中の液體が流れ出したのを見ても分つた。お母さんはおろおろして、そのかたづけにとりかゝつたが、お母さんの役目も大へんである。アドルフは自作のうちでも自信のある繪をぐるぐる丸めて握つてゐたが、その手はぶるぶる慄えてゐた。お父さんに見せようと思つてゐたのに、彼は

「手に持つてゐるものを破つてしまへ。」

とどなつた。

「いやです。」

と息子は答へた。しばらく、繪を破るか破らないの間答があつたのち「ゑかきにならせぬ」と「ゑかきになる」の押問答となつてゆく。それでもけりがつかないから、最後は白眼と白眼で睨み合つた。

それからといふもの、お父さんはアドルフを見かけると目をそらした。アドルフ

も父の眼を見ないやうに伏せ眼になつて皿のものをばくついたが

(これはひとつ、繪かきにしてくれないといふならもう學校へ行かない、と言つてやらう。さうすりや、お父さんも閉口するにちがひない。男の子は僕ひとりなんだから。)

こんな策謀をめぐらしてにやりとした。さつそく、やさしいお母さんから説き落して、お父さんにわたりをつけてみると、案に相違して

「子供のくせに親をばかにしてゐる。俺はそんな不心得な子をつくつた覚えはない。おまへが甘いからいけないんだ。」

とお母さんまで叱られることになつた。

アロイス蟻の子はやつぱり蟻であつた。そして、アロイス蟻が頑固な甲蟲になれば、その子もやつぱりそのとほりの甲蟲になる。きつと、ひよつとしたことで、右と左から角つきあふことになつたのだらうが、一度さういふことになると、さあ、

それが事件から事件を産むやうになる。ずつと、あとになつて、大きくなつたヒトラアはお父さんの言つたことを一生けん命になつて實行するやうになつたが、小さいヒトラアはまだまだお父さんの言ひつけをきかないで

(斷じて繪かきにせんと言ふなら、僕も斷じて學校の勉強をしないでやらう。そして、ゼロ點ばかりならんだら、お父さんだつて困つてしまふだらう。音をあげさせるのにはこれにかざる。)

ととんでもない考へを起して實行した。

そのために、繪に關係のある學科がずつとよくて、そうでない學科がひどく悪くなつた。しかし、地理と歴史は例外で、アドルフが級で一番なのである。いつた、これはどうしたわけからだらう。

少年愛國者

その頃、リンツの實科學校に、レオポルド・ベツチといつて歴史を受持つてゐる先生があつた。(僕たちのお爺さん)とドイツ人の生徒たちから大へん親しまれてゐたが、猛烈なドイツびいきであり、その氣持を傳へるのに、いろいろな歴史の事實をうまく按配した。あんはいオーストリで虐められてゐるドイツの子供たちが、分けても、何でもドイツといふアドルフが、これで歴史が好きにならなければ、よほど、どうかしてゐる。

ベツチ先生もドイツ人であつて、オーストリでドイツ人がだんだん小さくなつて行くのを最も悲しんだ人であつたから、自から、ドイツ國民黨にはいつて、政治的にも活躍した。しかし何分にも年配であり、それに子供が好きなので、専ら、歴史

の講義をとほして、ドイツ精神を盛りあげようとする。そして歴史をよく分らせるには、どうしても地理に明るくさせねばならぬ。

ベツチ先生はいかにもドイツ人らしい大きくて重さうな身體を床の上に、づしりづしりとひゞかせて教室にはいつてくると、いつも、ぼいと手にもつたノートを机の上においた。

「さあ、今日はどこからだつたつけ。」

「プロシヤ・オーストリ戦争からです。先生。」

生徒たちは異口同音に答へる。ベツチ先生ときたら、ノートなんかいつだつて開けたことはない。面白い話をたくさん持つてゐる老人が、子供たちからせがまれたつて、あはてゝ参考書などひらいてみることにやうに、先生もまた、歴史をよく知つてゐて、生徒たちから、いつも「もつと、もつと」とせがまれるていだつたのだ。

「さうか。さうか。」

と血色のいゝ顔をにこにこさせて先生はくるりと後向きになつた。生徒たちが固睡^づをのみながら見てゐるうちに、黑板の上を先生の美事な白髪があつちへ行つたりこつちへ來たりしながら、忽ちのうちにヨーロッパの地圖が出來上る。もつとも、ヨーロッパの地圖といつても、一九〇〇年頃のものだ。オーストリがちやうどしやがんでゐる男の恰好で、ドイツがその男の頭にふかくかぶさつてゐる冬の帽子みたいに見える。そしてこの男はバルカン諸國にちよつと腰をかけ、イタリの長靴をはいてゐるが、とてつもなく大きな荷物^{カネ}のロシアを背中に擔いでゐるし、また鼻先には、フランスの五角形が岩のやうにつゝかえてゐる。

白髪^{カネ}の先生は黑板の上に「一九〇二年」と書いて、またくると、今度は生徒の方に向いた。

「普^{カネ}興戦争はいつ起つたかなあ。」

「千八百六十六年です。」

どうやら半分ぐらゐの生徒たちが聲を合せて答へる。

「ぢや、その頃のドイツはどういふ聯邦に分れてゐたか、こゝへ來て黑板に描けるもの。」

なかなかの難かしい問題を先生は出したものだ。なせといつて、その頃のドイツ聯邦の國々は數十もあつて、名前をあげるだけでさへ容易なことではないのに、その地圖も描いてごらんといふのだつたから。ところが一人勇しく手をあげた少年がある。栗色の髪のをふさふさと分け、栗色の瞳をちつと注いだ……といふともう分つたらう、それこそアドルフ・ヒトラアだ。もう腕白らしいところがなくなつて何かしきりに考へこんでゐるところが顔にあらはれてゐた。

アドルフは、ベツチ先生のちよつと驚いた表情には、少しも氣にかけずに、つかつかと黑板に走み寄つて、まづ、「ドイツ」といふ字を消した。それから、その區分

の中へたくさんの線を引いて網の目のやうにしてしまふ。一番大きいところへ「プロイセン」、その下にある二番目のに「バイエルン」、といったやうに、はじめはさつさと書いてゐたが、だんだん白墨がすゝまなくなる。つひには、白墨をしつかりと握つて、黒板を睨んでゐる。

「ははあ、降参したのかね。いや、そんなに細いところまで書かなくてもいいのだよ。さあ、席にお着き。……うん、感心、感心……」とこれから、いよいよ、ベツチ老先生の授業がはじまつた。さて、普墺戦争の話をするまへに、是非、忘れてはならないことが三つある。その一つは、ドイツ聯邦の國々がこんなにくさんあつても、皆でひとつにならうとせず、中でも大きいプロイセンがこれをやらうと思つたが、オーストリが邪魔をしてゐたといふこと。それから、そのプロイセンには、皆も知つてゐるとほり、大ビスマルクが宰相になつて、ドイツの統一を計畫したといふこれが一つ。最後に、大ビスマルクが考へたオーストリを聯邦の外へ追ひ出す

といふには、ロシアとフランスが何と文句をいつてくるか分らない、これが一つ。」生徒たちが、先生の話につられて、うん、うんと頷いてゐるとき、先生は、黒板の「一九〇二年」といふのを「一八六六年」と書き直しながら

「そこでドイツの統一を邪魔をするオーストリを叩くにはどうしたらいいか？ 皆はきつと、もしそれでロシアやフランスが何か言つてきたら、ついでにそれも負かしてしまへばいゝと言ふにきまつてゐるだらう。ところが、ロシアもフランスも、それから今でこそ弱くなつてしまつたがオーストリも強國である。その強國に三方から攻めて來られたのでは、ちよつとプロイセンに勝味はない。そして、オーストリと戦ひをはじめると、そのロシア、フランス二國が、またはどちらかゞ、オーストリの味方になる心配がたくさんある。さあ、困つた。どうしたらいいだらう。君たちならうろろするだけなんだらうが、いやまだ小さくて何も分らない、だから、ドイツの歴史を勉強して、そんなときにどうすればいいか、ちゃんと肚を決めてお

くことがかんじんである。

さて、大ビスマルクは時の陸軍大臣ルーン、參謀總長モルトケから、オーストリには必ず勝てるといふことを確めた。そこで、ロシアとフランスを中立させておけば、あとは何の心配もないといふことになったのだが、それがまた大へんである。しかし、ビスマルク宰相は、いつたん事を決した以上、あくまでもやりとげようといつた男らしい人だからびくともしない。考へに考へて、ロシアを中立させるのに十二年もかゝつた。はじめはクリミア戦争で、ロシアと鬭つたオーストリがプロイセンに援助を申しこんで來たとき、ふつうなら當然オーストリを助けるところだがドイツ統一といふ大事を控へてゐるので、そのために中立を守つた。

きつと氣の弱い人だつたら、さつそくオーストリの味方をして、ロシアを怒らせその結果、大事の成就を水の泡にしてしまつたところだらう。」

こゝで生徒たちはわつはつはと笑つたのに、ヒトラーはまじめな顔をしてゐた。

ベツチ先生は、笑ひ聲がしづまると、なほ續けて

「それから、ロシア領ポーランドの叛亂のとき、イギリス、フランス、それからオーストリがポーランド人に同情した。プロイセンの中でもそれと同じ氣分を持つものがゐたが、やはり大事を成功させるには、どの事件でもそれに工合よく行くやうに處理しなくてはならない、さういふわけで大ビスマルクは、ロシアと共同防衛を結んだ。そこで、プロイセンは、實際には何ら血を流さないで、印判ひとつの力によつてロシアの好感をもうけてしまつたのである。」

ベツチ老先生の授業はこんな工合にをもしろく、それで行きとゞいてゐた。そして、昔のことを話しながら、現在の、これからどうしなければならぬかの覺悟を説明した。「アドルフちゃんと呼ばれてゐたときのドイツ魂は、「ヒトラア君」と呼ばれるやうになつて、この歴史の先生から、いはゞ、うまい牛乳をもらつて、どんな大きくなつたといふわけだ。」

ベッチ先生の時間が終ると、いまゝでおとなしくしてゐた少年たちは我先きに運動場に向つてとび出した。ところが、ヒトラア少年は、當番の生徒が黒板拭きでもつて、さつさと消してゆく地圖を残しさうに眺めてゐた。それから、ふと、何を思ひついたか机のふたをあけて、一冊の本を抱へると、校庭の片隅にあつて、あんまり生徒たちの駆け廻つてゐない榆の木の下に向つて行く。「どうしたんだらう、ヒトラア君は。近頃どうかしてゐるねえ。」

「うん。」

「僕たちとあんまり遊ばないで、ひとりぼっちでゐるぢやないか。」

「うん。さうだ。何をしに行くのか、ひとつ見とどけてやらないか。」

あとから、同級生の二三人がついてくるとも知らないで、ヒトラア少年は榆の木のところへ着くと、幹によりかゝつて、持つてゐた本を開いた。足音を立てないやうにして、悪戯小僧たちは木影にはいり、

「わあつ！」

といつて、ヒトラア少年を取り卷いた。

「おや、何だ。おい、ヨーロッパの地図だぜ。僕は漫畫だと思つてゐたんだが。」

一人がかう云つて笑ひ出すと、恐い顔をしてヒトラア少年に睨まれた。彼は突然大きな聲を出して

「さうだ。僕は地図を見てゐるんだ。ドイツの地図を見てゐるんだよ。ドイツの國境の標石を地面から掘り起して、さうして、ドイツの國をひろげようとしてゐるのぢやないか。」

陽氣な生徒たちも、さう言はれては、今更、自分たちの肩身のせまいことを思ひ出してひつそりしてしまつた。

「惡かつたね。」

と笑つた少年は彼の手を握つた。それは消しゴムのやうに柔いが、ぐつと力をこ



ヒトラー總統少年をはびます

めて握り返してきた。

學校が終つて、家路を辿る五六人の組が一人へり、二人になつて、たうとうヒトラー少年ひとりになると、彼は恐い顔をしてゐるお父さんのことを思ひ出して、心は鉛を呑んだやうに重くなつた。

日本びいき

ところが、そのお父さんがそれから間もなくぱつくりと逝つてしまつた。レオ

ンディング村の小さいコーヒー店に、いつもの通り、アロイス氏がゆつたりと腰をおろして、コーヒーを呑みながら、新聞をひろげてゐたときである。どう思つたか、兩手で持つてゐる新聞を、片手で掴みはじめて、それから、何か悲しい記事にであつて泣きなくなつたやうに卓の上に顔を伏せた。

「旦那、どうなさいました。お芝居のつもりですか？……いや、これはへんだ。」

コーヒー店の主人はたゞ事でないと氣がつくと、すつかりあわてゝしまつて

「大變だ。大變だ。」

と店先で大聲を立てる。それで、近所の人々が集つてきてがやがや騒しくなつたが、そのうち醫者がやつて來て

「これは卒中です。十分安靜にして下さい。ではまた來ます。」

と言つたので、村人たちはひつそりと聲を落しながらさゝやいた。

「中氣にならつしやつたとよ。だが、一番中氣はなほるつていふから大して心配は

いらねえこつさ。」

しかし、アロイス氏はひと晩、氣持よささうに鼾をかいて眠つたあげく、永の眠りにはいつてしまつたのである。

アドルフはお母さんと一緒にわつとばかりに泣いた。泪が乾いてゆくと、あげてゐた風の糸が切れて、風が大空のはうへどんどんすひ込まれてゆくのを手をたらしたまゝ、眺めるといつた氣持だつた。呆然自若とはこのことである。なに、強情をはるのにいゝ相手がゐなくなつたからだらうつて？ そんなこともあるかもしれない。がしかし、あつたといつても、それは小指ぐらゐに小さいことだ。もつと大きいことは、アドルフが一人前にならないうちにお父さんが死んでしまつたので、手相みみたいな言ひ方をする、アドルフ・ヒトラアの手相が、自分では氣のつかないうちに大變化したといふことである。

(アドルフには樂をさせてやらう。)

かう考へてゐた頑固なお父さんが、一幅の寫眞となつて壁のはうから、まじまじと見まもつてゐる。

「アドルフよ、役人になれ。」

お父さんのこんなきびしい口調に代つて、優しいお母さんが戸棚の中から、チョコレートを出したり、コーヒーをいれてくれたりしながら

「ねえ、アドルフ、お父さんがもうおいでにならないのですから、あなたもよつぱどしつかりしなくてはいけませんよ。お父さんには駄々をこねることも出来ませんが世間に出るとけつしてそんなことは許されないの。世間にはいろいろ、規則があつて、みんなそれを守つて行かなくてはなりません。それでないと、アドルフみたいに我儘な人ばかりになつて、いつも喧嘩になつて治まらなくなるでせう。」

コーヒーをのみながら、ヒトラア少年は一本まゐつたといふ風に苦笑ひした。しかし、お母さんは別にやさしい口調を改めることもなく

「偉い人も、その規則を守つて偉くなつたのですよ。お父さんだつて、ちゃんと試験を受けて役人になつたでせう。あなたは繪描きになるつて言つてゐるけれど、それは目に見えない、とつてもむづかしい試験があるといふことを知つてゐるの。」

「?……」

何だらうといつたアドルフの面持に、お母さんは答へない。そして、役人になるのが、一番、らかな試験で、それがまた一番偉くなれる方法だと言つて聞かせた。

「柔よく剛を制す」といふ格言もあるくらゐだから、お母さんの優しい言葉には、強情息子も大分軟化ななめしてくる。役人になるために、今の實科學校をやめて、中學校へ移らうかといふ話が、亡きアロイス氏の寫眞が（息子はどうなるかな）と心配してゐるところで母と子のあひだに交されるやうになつた。

「僕は中學校に移るのは、しかし、繪の時間が少いからいやだなあ。」

そんな風に、きまつて、アドルフが言ひ出してゐるうちに、とんでもない方面か

ら、この話を解決してしまふ事件が起つた。

ある日アドルフがいきなり高い熱を出して、ごろつと横になつたまゝ起き上れなくなつてしまつた。お母さんがびつくりして、醫者を呼んでくると、診察をすましたあとで、小首をかしげながら

「風邪かな、肺炎かな。」

などゝ言ひ、さらに

「とにかくまた明日伺ひませう。」

と處方を書いて歸つていつた。高熱は二三日で引いてしまつたが、微熱がつゞいてゐる。十日もたつて、醫者は

「これは立派な肋膜炎です。」

とうれしさうに診断した。なせつて、ドクトル先生にとつて患者の病名がはつきりするほど喜ばしいことはないのだから。そして、心配さうにアドルフの顔を見詰

めてゐるお母さんに

「御心配なさることはありません。まづ、安靜、それから榮養、それに氣樂にしてゐればすぐなほりますよ。」

「學校のはうはどういたしませうか。」

「さあ、一年も休學なさつたらよろしいでせう。」

お母さんは、「すぐ」と聞いて安心をし、「一年」と聞いてびつくりした。

「さういたしますと、この子は將來試験の勉強など出来るやうになりませうか。」

「まあ、むづかしい勉強はおよしになつたらいいでせう。この病氣は一事に熱中するのがいけませんからねえ。微熱のあるあひだは安靜にさせておく。熱がとれたら起きたり寝たりさせる。日向にはなるべく出ないやうにして、運動はもちろんやつてはいけません。ときどき私のところまで連れてきて下さい。また何かありましたら、では失禮。」

お母さんはこれでアドルフを役人にすることはすつかりあきらめた。壁にゐる寫眞のお父さんだつたら、あるひは、こんな事ぐらゐでは變節しなかつたかもしれない。がお母さんにとつて、今では息子ひとり頼りなのだから、心配でたまらないのである。

ところで、アドルフのはうはどうだらう。病氣は思つたとほりだんだんとよくなつてくる。それに、お母さんから、美術學校へあがつてもいゝといふお許しが出る。思ひがいちいち叶つてみると、さて負けん氣の少年は退屈で困つてくるものがある。

あんまり戸外へ出ることが出来ないから、家の中で繪を描いてゐる。それも醫者から申し渡されたとほり、(あんまり熱中してはいけない)のである。ヒトラア少年がこんな工合に、オーストリの片田舎で、退屈の日を嘆いてゐるところへ、はるばるとアジアの東から、日露開戦のニュースがとびこんできた。

「日露いよいよ開戦か。うーむ。」

など、大人みたいに力んだ。そして、それから、日露戦争のことにすっかり夢中になつてしまひ、お父さんのやうに食卓の上に新聞をひろげて

「日本がまた勝つた、勝つた。」

とひとり言を言ひながらコーヒの冷めるのさへ忘れるといつたていである。

その頃、ヨーロッパの大國、つまりドイツやフランスはロシアをずる分強い國だと考へてゐた。ドイツはロシアを敵と見てゐたが、それを恐れてのことか、ロシアの大將などがやつて來ると軍隊が出迎へて大へんな歓迎をする。フランスはロシアの味方だつたものだから、これはなほさらのこと、ロシアの艦隊がフランスの港にはいつてくると、司令官の名まへを取つて町の名を變へるなど、いふこともあつた。

だから、アドルフの近所の人たちだつて、日本の陸軍が九連城を占領し、また、

遼東半島を得利寺、大石橋、遼陽と攻め込んでも、それから、海軍が仁川沖の海戦
黄海海戦でさんざんロシアの艦隊をやつゝけても、ロシア軍が奉天で破れ、バルチ
ツク艦隊が全滅するまでは、日本が勝つとは少しも考へてはゐなかつたにちがひな
い。

それに、ロシア軍ときたら、いくら敗けても洒々^{しや}として「これは豫定の行動であ
る」と早速発表した。ところが、その頃の日本軍はまだ、宣傳の術といふものを知
らないでゐたものだから、ほんとうは勝つてゐながら、世界の國に勝つてゐると思
はせることが出来ない。

アドルフのお母さんもさう思はない一人で

「あなたが、日本は勝つた、勝つたと言つてよろこんでゐるけれど、それは糠^{ぬか}よろ
こびといふものよ。」

と水をさす。

「ちがひますよ。お母さんなんて何も知らないのだなあ。」とそろそろ生意氣になつてきたヒトラア少年はこんな風な得意の口調で「ロシア軍はいくら強い、それに兵隊の数がいくら多いといつたつて、よく新聞を讀んでごらんさい。ロシア軍の總司令官アレキセフといふひとは海軍の軍人のくせに奉天にゐて指揮してゐるのですよ。それはまあいゝとして、をかしいことにはクロバトキンが軍司令官といつてアレキセフと同じ位にゐる。これぢやどちらがほんものだか分りませんよ。」

「さうなの、まあおどろいた。」

「さうですとも、おまけにアレキセフ將軍と來たら馬が恐くて閱兵するのに歩いてやつたといふくらゐの弱虫です。一番偉い大將がそんな風なところへもつて來て、上の將校連が喧嘩ばかりしてゐる。そんなことでは、いくら兵隊が多かつたつて勝てないと僕は思ふな。」

「さうねえ。でもほんとうかしら。」

「まだお母さんたらあんなことを言つてらあ。それにねえ、お母さん、僕たちオーストリのドイツ人はロシアが負けた方がいゝんですよ。なぜだか知つてゐる？ それはロシアが負ければ、オーストリのスラヴも今のやうに威張ることは出来ないではないの。だから、僕は斷然日本びいきだ。」

「さう。成程さうね。でもあなたはいつそんなに分るやうに偉くなつたの。」

「これも、みんなペツチ先生のおかげですよ。」

小さいヒトラアの望んだとほり、日本はロシアをたうとう負かしてしまつた。

そして昭和十一年、といふとそれから三十年ほどたつた年に、日本とドイツのあひだに日獨防共協定といふのが結ばれたとき、そのときの少年、今のヒトラア總統は、わが駐獨大使の武者小路さんの手を握つて

「人間の一生の中で嬉しいといふ日は度々あるものではないが、今日はその稀な一日です。日本とドイツのこんな握手は、自分が子供のときから抱いてゐた三十年來

の夢を實現したといふものです。日露戦争のとき、私は十五の少年でしたが、日本海でバルチック艦隊が東郷提督の艦隊に撃沈されたといふ報道を聞くと、私の目から涙が出ましたよ。これで、將來、世界の中心となるのは日本とドイツにちがひないと思ひましたからね。」

と昔のことを思ひ出しながら、力強く語つたといふことである。現在、日本とドイツは、さらにイタリとも握手して、三國同盟をつくり、イギリスやアメリカを向ふに廻して大戦争をやつてゐる。三十年まへの日本とヒトラア少年の敵が、強いといはれたロシアであつて、今の日本とヒトラア總統の敵が、強いと言はれてゐるイギリス、アメリカであるのは何となくおもしろいではないか。

ドイツ國民黨

病氣がよくなると、アドルフの家はリンツの町へ引越して、アドルフはいよいよその美術學校へはいることになつた。十八になつたら、ウィーンの國立美術學校に受験が出来るから、それまでみっちり腕を磨いておかうといったわけである。

「僕だつて、いつまでもお母さんの世話になつてはゐませんよ。ウィーンの學校へ行けば授業料はいらないし、それに學資だつて足してくれますからね。」

とお母さんに言つてゐたものだ。

いつたい、リンツといふ町はオーストリでも三番目に大きい都會であつた。昔からある町なので、美しの碧きドナウといふものゝ黄ばんだ濁水を流してゐるダニユーブ河が昔から流れてゐるし、また、中世以來、かはらぬマリヤ寺院の鐘が鳴りひびいてゐる。ところが、そこへパリイからウィーンに向つて走る汽車が通りすぎる。ドイツのハンブルグからやつてきて、イタリアのトリエストまでゆく汽車が止る。それから、ダニユーブ河汽船の發着地である。だから、地理の教科書で使つて

ある文句を借りると、リンツは「交通の要衝」にあたつてゐて、また、農具とかタバコの「集散地」であるわけだ。

そこで、リンツの町で巾を利かしてゐるのが坊さんと役人と商人であつたといふことが分るだらう。アドルフが實科學校へ通つてゐた頃、同級生はそのうちどれかにならうと思つて、點取虫のやうにごそごそしてゐた。それを見ると彼はいつも氣がくさくさしてくる。そんなときリンツのオペラ劇場にとびこんで、てつぺんの席から、ウイリヤム・テルとかローエングリンとかいふワグネルの歌劇を見物して大へん晴々とした。

「あゝ、勇しいなあ。僕も昔に生れたら、馬に乗つてあんな華々しい戦争にでかけるんだが。」

いつたん、暮しが落着いて、自分の好きな繪を描いてゐると、またもやこんな考へが頭をあげてくる。そこで、ときどき、お母さんのまへでも思はず

「何か勇しいことがないかなあ。」

と言ひ出して

「いきなり何を言ひ出すの。おかしい子。」

と軽くあしらはれる。ランプがしづかに灯つてゐる夕べの食卓で、母と子の顔が明るく照されてゐるころである。

そのうち、アドルフがそんなことを口外しなくなつたので、お母さんは別に氣にとめなかつたが、そのかはり、なんとなく、こつそりと表へ出て行つて、一時間か二時間かたつてこそそと戻つてくることがある。

「?……」

お母さんはいっぱいその疑問符を書きつけたやうな顔をして

「どこへ行つてゐたの。」

「いえ、別に、ムニヤ、ムニヤ。」

「悪いことをしてゐるのではないでせうね。」

「えゝ、斷じて……」

「ぢや、はつきりと言つたらいゝぢやないの。男の子なら、男の子らしく。」

ヒトラア少年は、かう言はれても、もしほんたうとこのことを言つたなら、きつとお母さんは心配するにちがひないと考へるとどうしても言へない。何かかにか口實を見つけて、うまく逃れようとした。しかし、その都度、

「嘘をついてもだめ。あたしはちゃんと知つてゐるのだから。」

とお母さんにやられてしまふ。永年の経験で、お母さんは子供のいゝ裁判官になつてしまつたのである。「ちゃんと知つてゐるのだ」つたら、聞かなくてもいゝのにそれが、それ手といふものだ。つひに、アドルフは包み切れずに白狀に及んだが、氣づかつたとはり、お母さんは

「あつ。」

と顔が青ざめるくらゐびつくりした様子である。

アドルフの自白したところによると、お母さんもよく知つてゐる實科學校のベツチ先生がドイツ國民黨といふのにはいつてをられる。ある日、コーヒー店にはいつてみると、そのドイツ國民黨の機關紙が置いてあるので、ベツチ先生なつかしさからそれを手に取つてみた。ところが、それには自分の考へてゐるのと同じに、オーストリ政府がドイツと同盟を結んでゐながら、ドイツ人を壓迫するとはけしからんと叫んでゐる。事々にもつともである。それで、それから黨紙を読むために、コーヒー店に出はいりしてゐると、いつといふこともなく、演說會へ行つて、元氣なところを聞いてみたくなつた。それに客の中で

「とにかくあぶなつかしい演說會だよ。」

と言つてゐる人があつたので、尙更、行つて見たくなる。そしてたうとう出掛けたところが、なるほど、あぶない。演臺で辯士がしゃべつてゐるかたはらには、警

官がサーベルを突いて腰かけてゐる。ちよつとでも辯士がオーストリ政府の痛いところを突かうものなら、すぐ、「中止」とやられる。

しかし、あぶないからといつて、ドイツ人が引退つてしまつたら、いつたいこれからどうなるだらう。さう思つて、なるべく都合をつけてドイツ國民黨の演説會に行くことにした。こゝで、ぺこんと頭を下げて

「お母さんにだまつてゐたのは悪かつたけれど、僕はけつして悪いことしてゐたわけではありません。」

お母さんは、アドルフの手をしつかりと握つて、ぢつとその目を見詰めながら「アドルフ、あなたは繪の方はどうしたの。まだそれも一人前にならないうちに、そんな演説會に出かけて、決して悪くないなど言へると思ひますか。ねえ、二度ともうそこへ行かないとお母さんに誓つて下さい。」

といまにも涙を浮べさうな様子。

（あゝ、悪かつた。お母さんにこんな心配をかけて！）

アドルフもまた心のうちで後悔しながら

「えゝ、僕はもうけつして行きません。」

と誓ふ。壁にある寫眞のお父さんは、やがて、母と子が泪をぼろぼろと流すところを、しづかに眺めることになる。

ところが、外のことゝ違つて、それはドイツがオーストリで勝つか負けるかといふ問題だから、お母さんの言ふのは一々もつともだと思ひながらも、足はひとりで演説會へ歩いてしまふ。家にゐるとき、壁に向つて歩くと（行つてはいかん、アドルフ）と誰かゞ叱るが、それからくりと後ろをむいて窓の方へ歩くと（行けアドルフ）とまた誰かゞ言ふ。その結果、お母さんが臺所で何かしてゐるときを覗つてこつそり外へ出かけてしまふのだが、たうとう、ある日、ひどい目にあつた。

その日の會場には

「二枚舌のオーストリ」

と書いた看板が立てゝあつて、ヒトラア少年、といつてももうぢき青年になるところの年頃だが、彼も、五六十人の聴衆のひとりになると、會場の空氣がびいんと張り切つてゐるではないか。

(こいつはけんのんだぞ。)

と考へてゐるうち、辯士がひとり立つてしやべり出した。その次に立つた男はドイツ人としては小造りで、黒い背廣を着てゐて、ちよつと坊さん臭いところがあるが、テーブルをどんと叩いて、口を切りはじめると、熊のやうに底力のある聲だ。

「いつたいオーストリは誰のものなのであるか。ドイツ人が劍の力で得て、そこにものは何百年も土を耕してゐるのである。それに何ぞや、現在のオーストリ政府は、雨戸をあけて、泥棒どもの手引きをしてゐるがごとく、スラヴ人をドイツ人の土地に入れてゐる。云々」

こんな調子で、オーストリ政府を猛烈にやつゝけるのだから、臨席の警官がだまつて聞いてゐるはずはない。突然、立ち上つて

「演説中止！」

とどなる。すると、熊の辯士があつさりとやめて渴いた喉をしめさうとして、やをらコップを手にとつたのを、何を感じがひしたか二三人の警官が演壇にかけのぼる。さうなると、會場の中はわいわい叫ぶと、聴衆が出口に押しかけるあはてた動きとで、まあ、上を下への騒ぎである。ヒトラア少年もその波に揉まれて、いつしか外へ押し出されたが、

「はい、またひとり。」

と言つたやうな顔をした警官の手で、檢束の網の中へいれられた。それから、一列となつて近くの署まで連れて行かれる。

（さあ、どうなることだらう。今度の相手は小學校の先生とはちがふんだからな

あ。お前の住所はどこか、名前はなんていふ、それからちよつぱりお叱言を頂戴して許されるかな。それとも、政治犯、うあ、かうなると助からないぞ。いまいましいなあ。全體、オーストリのドイツ人がだらしないから、僕までこんな汚名を着せられることになるんだ。だが、僕がもしさうなると、さうだお母さんが、あゝ、お母さんがどんなに心配なさるだらう。うまく逃げられないかしら。」

こんなことを考へながら、下をむいた目をきよろきよろさせてゐると、廣告塔のそばに通りかゝつた。用のある人もない人もんきさうに廣告の圖を眺めてゐる。

(よし！)

と言ふ間もなく、アドルフは、ちやうど傍らの警官がよそ見をしてゐるのを幸にして、のんきな見物の仲間入りをした。それから、なんだつまらないといった恰好で、すたすたと人だかりから離れると、ちよつと後ろをむき、さあ、それから家まで一散に走り出す。

（政治演説なんて大人が聞くものだよ。アドルフ。お前はこれから繪に専心しなくてはいいかん。それにしても田舎ぢや、いゝ繪が見られないし、つまらない。早く僕もウィーンに行きたいなあ）

その夜、寢床の中で、アドルフはそんなことを考へた。

若　い　驚

かれこれするうちにヒトラア少年は十八になるい。いよいよウィーンの美術學校へ試験を受けにゆくときがやつて來た。ある春の朝、ぽかぽかとする日を浴びながら、彼はリンツの驛に向つてゐる。手に持った鞆をふつて、口笛もふかんばかりの元氣である。それもそのはず、鞆の中には上出來の繪がぎつしりと詰めこまれてゐる。「僕は學校で一番の繪描きです。そんならお見せと言ふのなら、鞆をあけて、

これ御覧下さい。この通りです。ふんと感心して、試験官はお前はなかなか見所があるとする。試験のパスなんてわけではない。」

こんなに自信まんまんとして、ヒトラア少年はたゞひとりウィーン行の汽車に乗りこんだ。それは三時間と三十分で目的地に着いてしまふのだが、標示板にはかう書いてある。

(バリー……ブダペスト……ブカレスト……イスタンブール)

だから、乗つてゐる人たちもそれぞれ風體がちがふやうに國もさまざまである。しかし、ヒトラアにとつてそんなことは、今のところどうでもいい。ガラス窓をゆるやかに通りすぎて行くオーストリの山々を眺めながら、これからお目にかゝる「小さいバリー」のことを思ひ出してゐるのだ。いつかお母さんに連れられて見物したウィーンはまるでお伽噺に出てくる町のやうにすばらしく壯麗だつた。

青い空のなかに、まるで雲のやうに浮んでゐる白い圓屋根があつた。その下に立

つと、あまり高いので目が眩みさうなとがった塔が、色とりどりに塗った屋根の上にそびえてゐるお寺があつた。太い柱をいくつも並べてゐる玄關を持つた大きな建物があつた。繪を見に行つたつもりなのに、その帝室博物館の建築に見とれてないことそのまへに佇^たんでゐたことも思ひ出した。

（さうだ、お伽の國を建てるのも悪くないなあ。）

ヒトラア少年が吾を忘れて、天上の夢をみてゐるあひだも、汽車はごとごとと忠實な音を立てゝ走つてゐる。これが夢想をしてゐるときのいゝ伴奏だ。おまけに先刻から、フランス語らしい滑らかな話聲が彼の耳にはいつてきて、それがちつとも意味の分らないところから、ウィーンの並木道を歩いてゐたときのワルツのやうにひどく氣持よく聞えてゐる。

話手といふのは痩せて眼鏡をかけた青年でなかなか手振やら、首振りやら、それから肩まで使つて話をする。それを聞いてゐる男は中年の商人らしい男で、いちい

ち感心したり、畏れいつたりしてゐる。では、どんな話をしてゐたかといふと

「へえ、さうですかねえ。私は商賣に追はれてゐるもんですから、世界のことはいくら分らなかつたが、ヨーロッパが戦争になるつていふと、さうだ、これはうかうかしてゐられない。」

「あつはつは、まあ、それはいつのことになるか分りませんよ。」

「では、伺ひますが、どうして戦争になるといふわけでせう。」

「ロシアが日本に負けたからですよ。」

「へえ。」

「一昨年、つまり一九〇五年にですね。今まで百年不敗と威張つてゐるロシアが、それではじめて弱いといふことが分つた。すると、ドイツ、オーストリ、イタリの三國同盟と、ロシア、フランスの二國同盟と釣合つてゐたのが、二國側がびんともちあがつたでせう。そのまへフランスは、モロッコを我輩がもらふが、その代りエ

ジブトを貴殿に差上げるといふことで英佛協約といふのを結んでゐます。その協約の効力が、しかし、どんなものであるか分らない。そこでドイツはロシアが負けたのでこのときとばかり、モロッコの門戸開放といふことを叫んだのです。あなたもロシア軍が奉天で負けたあとで、すぐウイヘルム二世がモロッコのタンジールにおいてになつたことは新聞で見たでせう。」

「えゝ、まあ、讀んだことにしておいて下さい。そして。」

「そのときが門戸開放の宣言なんです。そんなことをされては、フランスはだまつてゐられないでせう。ところが、いくら外務大臣のデルカッセといふ男が鼻柱が強くたつて、その後楣だてとなる軍備が十分でないんだから文句が言へない。結局、フランスは外務大臣をやめさし、ドイツの言ふ通り列國會議をひらくといふ意見に従つた。これがアルゼシラス會議といふのでしてね、アメリカからわざわざセオドル・ルーズヴェルト大統領なんかもやつて來たんです。ところがこれがドイツの鯁蛇と

なつて、ヨーロッパで獨身者となつたのはドイツばかりといふことになつた。

その上、日本がロシアに勝つて東亞の王者になると、どうです。イギリスは泡食つてロシアと仲よくならうとしてゐるぢやありませんか。さうやつて、日本を牽制けんせいしておいて、同時にドイツがトルコの方へ出てくるのを防がうとしてゐるのです。

これではドイツは袋の鼠でせう。オーストリは昔日の威力がないし、いつたいあなただつたらどうします。イギリスが拳固をふりあげてあなたの頭を叩かうとしたら？」

「へえ。」

と聞手は驚いた風に目を丸くした。

そんなことをしやべつてゐるとはちつとも知らないものだから、相も變らずアドルフはうつとりとしてゐる。やがて、汽車がウイーンにとまつたので、網棚から鞆を下して元氣よく町にあらはれた。

（やあ、ウィーンの人つていふのは綺麗な服を着てゐるなあ。しかし、何だつてあゝ早足なのだらう。まるで駈けるやうだ。）

さういひながら、アドルフも目指す學校に向つて、せつせと歩いた。その校門に辿り着いてしばらくすると鐘が鳴る。いよいよ試験だ。だが、自信があるのだから少しも胸騒ぎなどしない。

「さすがは美術學生だ。」

机に着くと、その上に、どの生徒が描いたのかしらないが、女の顔がペンでもつてなかなかうまく描いてある。

「僕もまもなくこゝの生徒です。君の後輩になるわけですね。」

答案が出来あがるごとに、ヒトラアの自信はますます強くなつてゆく。だから、試験が終つて、まつすぐ家に戻つたときだつて、びんと鼻を高くして

「お母さん、僕には繪の神様がついてゐますからねえ。絶対安心ですよ。」

と報告したものだ。

ところが、さて、首を長くして待つてゐた學校からのハガキは、いくら読みかへしても、

「不合格」

としか讀めないのである。家の中もそれから窓の外にひろがる景色もみんな春の日の明るさに輝いてゐるといふのに、まるでそれが日蝕にでも出遇つたやうに、いきなり眞暗になつた感じがした。その中にあつて、たゞ見えるのはお母さんの蒼白い顔がぼうつと浮んでゐる影である。お母さんをあんまり喜ばせた手前、それから自分にもあんまり威張つてゐたのだから

「こんなことつてあるものか。何かの間違ひだと思ひますから、僕はこれからウイーンに行つてきます。」

と言つて外にとび出すと、後ろから

「アドルフ、アドルフ。」

とお母さんの聲だ。振り返つた拍子に、お母さんが勵ますやうな顔つきで立つてゐて、手には彼の帽子を持つてゐる。あわてゝ帽子をかぶつてくるのを忘れてしまつたのだ。

ウィーンの學校の門をくゞつて、受付から校長先生の部屋に廻つた。扉をことごと叩くと

「おはいり。」

と聲がしたので、そこでアドルフは生れてはじめて美術學校の校長先生にお目にかゝることになつた。白髪交りの髪を長くして、その瞳は何かをちいつと見つめてゐるやうで、また物腰はしづかであるのに氣がついた。校長先生の方では

（この子の目は何かに燃えてゐるやうだが、それはしかし、落ち着いて繪を描くにはちと激しすぎる目だて。）

などゝ思ひながら

「御用は何だね。」

とやさしく質問した。

「僕はどういふわけで落第したか説明していただきたいのです。」

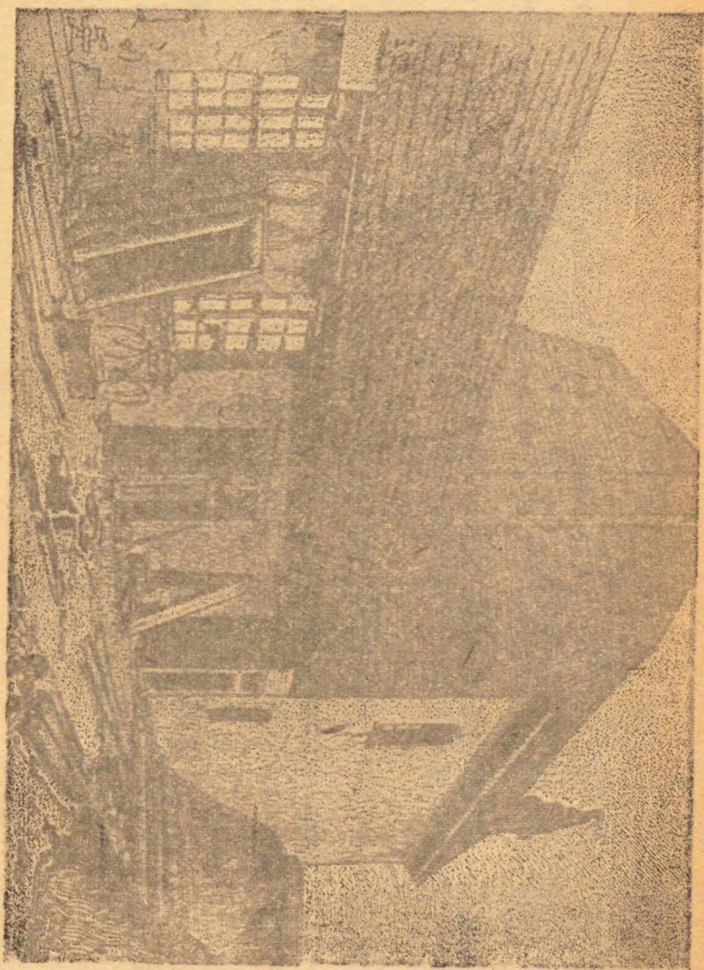
「ほう、それはお氣の毒だった。名前は？ あゝ、さう。」

先生は後ろの大きな戸棚をあけて、アドルフの繪を一束取り出した。そして、アドルフの驚いたことには、一枚々々、先生が繪の缺點を指さして説明するのが全くもつともなことである。

「この山の繪だつて、さうだね。この空と、遠い山と近い山の構圖はうまく出来てゐるが、君の使つた色をよく見てごらん。ありふれた色で、それにどういふ光の運動を掴まへたといふところがなくて、模様みたいだらう。」

「なるほどさうです。」

大戦中一兵士のヒトラアの描いたスケッチ



「それから、この家を描いた繪だが、これぢや、たゞ投視畫法を使つて、一軒の家の見取圖を引張つたとししか取れないだらう。あの壁にかけてある繪と君のを比べてごらん。」

さういはれて、はじめてそんなところに繪があつたと氣がついたのだが、思ひ掛けないやうな色を使つて描いてある家が一目見て心を打つのに引きくらべて、アドルフの描いたのは繪でなくてまさしく圖面であることが分つた。

「ほんたうにさうですね。あつはつは。」

ふさいだり怒つたりしてゐたのはこんな思ひちがひからかとアドルフは笑ひ出す。すると校長先生もほつとしたやうに申される。

「君はつまり、目で感じるよりも、頭で計ることがうまいのだね。だから繪描きよりも建築をやつた方がいゝと思ふよ。ひとつ建築科の先生のところへ行つてごらん。」

それまで、アドルフは繪を描いてゐるとき、ときどき不安になることがあつたが、校長先生のこの言葉で、その不安といふのが、繪か製圖かといふ迷ひからであつたことが分る。

「よし、それでは建築科に行つてみよう。」

校長先生の部屋を出て、暗い廊下に出ると、大變な忘れ物をしたのに氣が付いた。それは、建築科にはいるのには、中學校を出てゐなくてはならぬといふことである。そして、實科學校も卒業してゐないアドルフは、そこからすぐ校門の方へ歩き出したが、百貫もある石を引きすつてゐるやうに足が重くなつた。

こんなことでしょげこんでゐたところへ、次の年の冬お母さんが死んだので、アドルフの心のなかには寒さと闇に包まれて、たゞ泣くより外に手段もないかに見えた。愛するお母さんが、ひとつの白い十字架の下へ行つてしまつたのだ。ところが、お父さんがさうなつたときはとにかく親子が暮せるだけのものは、役所から下つたが

お母さんがさうなると、アドルフに下る扶助料は水も呑めないほどわづかである。それが、泪の中から、奮ひ立たせることになり、持ち前の負けん氣も手傳つて、すべては闇の中に、一寸の光明を見出した。

（お父さんは十三でウィーンに出て一人前になつた。それを思へば僕なんか泣いてばかりはゐられないぞ。さうだ、アドルフ、おまへはどうしても建築家になれ。ウィーンへ行つて！）

そこで俄かに勇氣を出した少年は、小さな田舎の財産をいろいろと仕末した。着物やシャツ、それから繪の道具を行李に詰め、そして左の胸にはお父さんとお母さんの寫眞、右の胸には（何があつてもやり抜くぞ）の氣持を持つて、小さいリンツの町から、若い鷺のやうに、闘ひを求めるために飛び立つたのである。

人生修業

ウィーンの現實

ウィーンといへば、そのころ、人口が百六十萬もあつて、そこにハプスブルグ王家の宮殿がある。

あこがれのウィーンよ

おまへは百萬のほゝゑみを浮べ

しかもそれを絹の布で巻いてゐる

誰かゞこんな詩を作つたくらゐに、ウィーンといふ大都會は人々のあこがれの的となつてゐる。一九〇九年の「ウィーン案内」にはその詩がはじめにのせてあつて

「この氣分を味はうと思ふ人は、せひウイーンの森に上つてみるとよい。それもな
るべくならば夕方をまつて、その森のカーレンベルク(禿山)に登ると、ウイーンの
町は半圓をつくつてゐる灯の點々でそれと分る。それこそは二哩にもわたつてゐる
輪狀大路であり、昔、それは石壁によつて廻らされ、いく度かトルコ軍の侵入を防
いだものであるが、今ではすがすがしい大通となつてゐて、ウイーンに入人を誘つ
てゐる美しい建築物がほとんどそこにあるのである。

まづ第一には、昔のウイーンの中心に、目眩いばかりの高い尖塔と、色あざやか
な彩色瓦の模様のある屋根をもつたステファン大寺がある。この寺院は七百年もか
ゝつて竣工されたもので、いはゞウイーンの誇といふべき建物であらう。

ステファン廣場はそのまへにあつて、そこから、ウイーンでも一番賑やかな通り
が三つの方面に伸びてゐる。ウイーン一流の紳士淑女にお目にかゝらうと思へば、
そこへ行くとよい。また、財布のふくらんで困つてゐる外國の人たちはそこへ行く

と、それが軽くなる。云々」

といった工合にはじまつて、（誰かウイーンのオペラの名聲を知らぬものがあらう）といふオペラをやつてゐる歌劇場のことや、（金色の圓蓋を輝かせてゐる）王宮のことから、博物館、國會議事堂、それから大學の建築がいかに立派であるかを説明してゐる。さらにその案内書は

「ひとたび市の公園に足をいれ、ば、木の間に佇み、あるひは腰かけてゐる大音楽家、モツアルト、ハイドン、ベートーベン、シューベルト、ブラームスがほゝゑみかけるであらう。もつとも彼らはもはや石または金屬となつてゐるが、音楽を熱愛する人にとつて、またはいさゝかウイーンの酒に酔つた人にとつて、それはさながら生きてゐるやうに感じられることであらう。云々」

と書いてある。そしてまた

「ウイーン見物をなさらうといふ方は、ウイーンの丸の内である城内區に宿を定め

るがよろしい。そこにはきれいで落着いたホテルがたくさんある。」

など、云つてゐる。

さて、ヒトラアは大望を抱いてウイーンにやつて來たが、勿論、ゑらんだ宿屋といふのはそんなところではない。「ウイーン案内」に、ウイーンの華と唄つてある輪狀大路から大分離れたところのごみごみした場末の木賃ホテルである。

「こゝもウイーンか！」

といつてびつくりしたが、その木賃ホテルといふのは、なるほど、がらんとした空家みたいなところに細長い木のベッドが並んでゐて、天井にはホテルがとまつたくらゐの佗しい電燈がついてゐるだけだ。

へいや、僕だつて、いつまでもこんなところにゐるわけではないさ。これもいつかは、いゝ思ひ出になるだらう。とにかく、明日から、何でも仕事を見付けて働かう。どうれ。)

ひと眠りといったわけで、へんな嗅氣のするうすい布團をひつかぶると、しばらくたつて、身體のそこゝがちくりちくりと痒くなつてくる。まばりにゐる連中はそれこそいゝ氣になつて強風のやうな鼾をかいてゐる。それやこれやでなかなか眠れない。

（いや、ひどい目にあつた。やれ、やれ、やつと夜が明けた。）

ヒトラアはひと晩のうちに、うつかりすると一生かゝつても出来ないいゝ學問をしたのち、仕事を探しに出かけると、さつそく、それにありついた。どんなものかといふと、建築場の見習ひといつて、煉瓦や砂を高いところへ運ぶのである。

「さうしてゐるおひだには、一人まへの建築職工になつて、それからあんたの勉強次第で技師にでも、何にでもなれますよ。」

と口入屋の番頭はうまいことをいふ。

とところが世の世の中といふものはなかなかそんな工合のいゝものではない。十

九歳のヒトラアが、ステファン大寺の南塔をつくつたあの有名なブラツハチツツを
思ひながら、せつせと働きだしてから、四日とたゝないうちにもう故障が起つてし
まつた。

ちやうど、午休みのときである。それまで蟻のやうになつて、建築場にとりつい
てゐた連中はさつさと仕事をやめる。あるものは、

「俺が一番だ！」

などゝ口々に叫びながら、近くの食堂まで駈け出してしまふ。そして、あるもの
は、入口のところに立つてゐて

「お父つあん、辨當持つてきましたよ。」

と女房が汚れた小さいバスケットを手に掲げてくるのを待つてゐる。

ヒトラアは、生れてはじめて、こんなところへとびこんだものだから、誰も食事
に誘つてくれるものがない。足場の下で、圓くなつてバスケットをあけてゐる連中

のところから、ちよつと離れた煉瓦の山の上で。牛乳のビンをぐつと傾けてはパンを噛つてゐる。そして、そこからもステファン大寺の尖塔が青い空を指さしてゐるやうに見えてくる。

「見事なものだなあ。しかし、あの形を近代建築にとり入れるのにはどんな工風をしたらいゝだらう。」

ともぐもぐやりながら考へこんでゐると

「おい、君、君。」

と肩を叩かれてはつとした。五六人の、いづれもひと目で、仕事場で働いてゐることが分る若者たちがつゝ立つてゐる。肩を叩いた男は赤いネキタイなんかして、小男のくせにいやに威張つた風で

「君の名まへは何つていふんだい。」

と身許調べの口調である。それから、ぐつとくだけて、握手の手をさし伸べたり

しながら

「これから、僕たちは友だち、いや同志である。君はさつそくわれわれの組合に入しなければならぬ。」

ヒトラアは小男の手を握つたものゝ、藪から棒といった工合の申出に呆氣にとられた。

「われわれの組合つてどういふものですか？　僕は田舎から出て來たばかりでまだ何も知らないのです。」

「なるほど、さうか。こいつは失敬といったところだな。ぢや、同志といふことは分るか。君。」

「ドイツ人同志つてことでせう。」

アツハツハ！　五六人いつせいに突然笑ひ出して、ヒトラアがそろそろ肚を立てはじめたことも氣がつかないで、

「ドイツ人同志とはよかつたな、アッハッハ。」

と笑ひこけてゐる。だが、このうちにも赤ネキタイはきつとなつて

「同志といふのは、そんなものではないよ。君はまだ分らないのだ。追々、分つてくると思ふが、しかし、われわれの組合、それは自由労働組合といふ名前だが、君がこゝで働いてゐるかぎりさつそくはいつてもらはなくてはならない。」

「僕はいやです。」

「なに、いやだつて、それはまたどういふわけだ。」

「その自由労働組合つていふのが僕にはどんなものか分らないからです。」

「それはねえ、君は社會民主黨といふのを知つてゐるだらう。その黨の前線にある闘争團體なんだ。なに、今にだんだん分つてくるよ。組合のありがたさは、はいつてゐるうちに大分りとなるもんだ。なあ、同志。」

「さうだ。」

とみんなは鴉のやうにそろつて口を開ける。

「ほら、みんなかう云つてゐる。このうちの誰だつて、はじめは君のやうに何もしらないで加入したんだよ。さあ、どうだ、君。」

「僕は考へさしてもらひませう。」

「なに、考へる？ 考へるところなんかないぢやないか。組合にはいるのがいやだつたら、さつさと出て行つてもらはう。そんな奴はわれわれの面汚しだ。え、おい。」

ひよろひよろした大男が拳をふりあげようとすると、赤ネキタイはそれを押へて「まあ、いゝ。考へるといふのだから、しばらく考へさしておかう。ぢや、君、また来るぜ。」

組合員たちは、煉瓦の山の上にヒトラアを一人残したまゝどこかへ消えて行つた。それから、ヒトラアは毎日のやうに、午の休憩時間となると、仲間の話をそれと

なく一心に聞いてみた。すると、ひよろひよろした大男が、ヒトラアにあてつけを云ふやうに

「今時、ドイツ人だの、フランス人だのつて云つてゐるやつが知れねえ。萬國の勞働者はみんな仲間ぢやないか。僕たちには祖國なんてものはもうなくなつたんだ。今更、宗教にだまされてお賽錢をあげる馬鹿はない。それよりか、唸るモオタアにでもお辭儀をしろつていふんだ。」

と大きなこゑでしやべつてゐる。ヒトラアはそれを聞いてゐると、ことに「祖國はない。」といふのが我慢が出来なくて

「なんだ。君たちはドイツ人ぢやないのか！」

と叱聲る。そのこゑで、仲間の顔はいつせいに彼の方をふりむく。それから、いやはや、マルクス主義がどうの、社會民主黨がどうのといふ工合に、ヒトラアには聞き馴れない文句をみんなが並べたてる。これには、いくら、勇氣はあつても、惜

しむらくは兵法を知らぬアドルフ・ヒトラーといふところだから、ぐうの音も出ない。そこで、こつそりと、仲間の讀むパンフレットを片端から手にとつて、彼らの論法を研究した。

ある日のこと、れいによつて、電信柱みたいな大男が、

「僕たちはもうドイツ人でもない。またフランス人でもない。」

と呼んでゐるところへ、ヒトラーは自信満々と口を切つた。

「さうですか。そんなら、君の主張するやうに僕たちはそのいづれの國民ではないとしませう。それでですね。もし、今、フランスとドイツが戦争をはじめたら、君はどうします。」

「戦争なんかはしないよ。」

「しかし、フランス軍がドイツに攻めこんで來たらどうしますか。」

「そんな馬鹿なことつてあるものか。」

「いや、ナポレオン戦争のときはどうです。それに普佛戦争のときだつて、フランス軍はドイツに侵入してきたではありませんか。」

「僕たちは國と國との戦争はやらないんだ。敵は資本家だけだよ。」

「すると、君たちはフランス軍が堂々とベルリンに乗りこんでくるのを黙つて見てゐるのですか。」

「生意氣を云ふな。お前は組合にはいりたくないんでそんなことぬかすのだらう。そんならそれでいゝ。たつた今、こゝを出て行け！ 屋根にでもかちりついてゐてみろつき落すぞ！」

理窟で負けた大男がかういふと、仲間はいつせいに拳固をつき出す。多勢に無勢だ！ 腕づくでは叶はないとみたヒトラアは、それでも胸を張つて、ゆうゆうと退場した。

社會民主黨のからくり

労働組合にはいらないからといつて、拳をふりあげてまで、善良な青年を仕事場から追ひ出さなくてもいいではないか。あこがれのウイーンに、こんなことがあるとは、ちつとも考へたことがなかつたので、ヒトラアはびつくりするとともにぶんぶん腹を立てた。

「もう、僕は仕事なんかに行くものか。」

と木賃ホテルから起き上つては、美しい公園に出かけたり、ときには勇氣をつけるためにオペラを見に行く。そんなことをやつてゐるうちに、大切にしまつておいたわづかな全財産がすつかりなくなつてしまふ。そこで、また外のところへ働きに出かけると、またもや

「組合にはいれ。」

「いやだ。」

となつて、どどのつまり、ヒトラアは仕事場から逃げ出さねばならなかつた。

「あゝ、ウイーンといふところは、何つて住みにくい町だらう。まじめに働かうと思つても働けはしない。お父さん、あなたもこんなところで働いてゐたんですか。

偉いもんですねえ……うん、さうだ。僕だつて負けるものか。あんな労働組合のひとつや二つに負けてたまるものか。それにしてもウイーンにはどういふわけで、あんなものが流行つてゐるのだらう。」

とそれから、暇がありさへすればそのことを研究してみた。いろいろな書物からヒトラアは、赤の労働組合がオーストリばかりでなく、ドイツにも、それからフランスにもイギリスにも流行つてゐることが分つてびつくりした。そして、その赤の組合は、社會民主黨といつて、ウイーンの國會にも代議士を出してゐる政黨が、あゝ

やれ、かうやれと指圖してゐる。

その（あゝやれ、かうやれ）のやり方はカアル・マルクスといふユダヤ人が、一八四八年のフランス革命のときにこしらへあげた。どんなものかといふと、どこの國の歴史をみても、それは働くものと、働かせるものとが喧嘩ばかりしてゐる話である。だから、お前たち、労働者は喧嘩したくないといつても、喧嘩しなければならぬ。それにはたつた一人ではお前たちの方が弱いから束になつてかゝれ。と、でたらめの歴史の話から、うまく喧嘩させようとけしかけた。

すると、同じくユダヤ人のラサアルといふ男がマルクスのでたらめを、ドイツに擴めようとして仲間を集めた。それが社會民主黨のはじまりである。ちやうど、その頃、ヨーロッパではいろいろな品物を製造するのに機械を使ひはじめたものだから、それまでたくさんの人手をわづらはしたことが極くわづかですむやうになる。そこへもつてきて人口が増加したので、職につかない人たちがたくさんゐるやうに

なつた。機械を工場に据へつけた人たちは、たゞ、金もうけだけに忙しがつて、働けないものを放つておいたもんだから、さあ大變である。

まるで、流行性感冒がひろがるやうに、ヨーロッパの土地に、このでたらめ話と社會民主黨がひろがつてゆく。働けない人たちは、無論のこと、工場で働いてゐるものも、クシヤン、クシヤンとやりながら、熱のために呆つとしたのが多くなつた。

一八七〇年にフランスを負かして、ますますドイツの統一を固くしたビスマルクさへ、それからほどなく、これらの熱に浮かされた連中がドイツの議會にまではいりこんで來て、わいわい云ひ出したのには困つたくらゐである。しかし、流石はビスマルクのことだから、喧嘩をまき起してドイツをめちやめちやにしてしまはうとする者たちを押へつけて、とにかくあんまり騒がせないやうにした。

(なるほど、あの大ビスマルクでさへ困つたほどの連中か！ それなら、僕みたいな青二才なんかわけなく仕事場から追ひ出されるわけだなあ。)

とヒトラアは苦笑した。

しかし、さうやつて本を読んでゐるときは、笑つたりすることも出来るが、仕事から追ひ出すものは、赤の組合ばかりでなく、仕事が早く片付きすぎたりすれば、さうなるのだから、パンにありついたらと思へばすぐパンにありつけなくて、それこそ笑ひごとではなかつた。

「世の中は廣いもんだなあ。探せばどこかに仕事はある。しかし、仕事は仕事でもそれは羽の生えた鳥なのだ。すぐ飛んでいつてしまふ。」

こんな文句が口癖になる。ところがあたりを見廻してみると、閉口したヒトラアみたいな若者がたんさんゐるにはびつくりした。やつぱり、彼のやうに（何かにならう）と思つてウイーンにやつてくると、仕事といふのは逃げ易い鳥なのである。掴まへたかと思つてゐるうちに、もう手には何もなくなつてゐる。かうなると、掴まへてどうしようといふことのまへに、たゞもう見つけることに一心になるばかり。

だから、見つけて金になれば、もう後先もなく飲んだり喰べたりしてしまふ。そのときは

「なに、明日のことを考へろつて！　くよくよするねえ。明日は明日の風が吹かあ。

といふ大した御機嫌であるが、その明日がくると青い顔をして、二本の脛を抱えてゐる。ウィーンの美しい公園のベンチの上で日にあたつてゐても、さうしてゐたのでは木の枝からうまい物が落ちてくるなど、いふことは決してない。そのうち、腹の方は主人の心中を思ひやつてやらうとは思はないで、ぐうぐう唸り出す。ぢつとしてゐれば、うるさくて仕方がないから、立ち上つて、何か仕事のありさうなところへ歩いて行く。すると、ある工場のまはりで、人だかりがして、何か面白い云つてゐる。

「何ですか。この騒ぎは！」

と聞くと、

「これはストライキだ。お前もバンが欲しかつたら、參加しろ。」

と恐い顔をした男が叫ぶ。これが赤の勞働組合で少しは威張ることも出来るといつた仁である。それで、たゞ、何といふこともなくこの男にくつゝいて、歩いたり、喚いたりしてゐると、さつそく、警官に捕つてしまふ。警察でさんざん叱られて、また往來に出てくると、赤の組合の連中が待ち構えて逃さない。

さうして、こんな若者がたちまち赤の流行性感冒にかゝつて、クシヤン、クシヤンと嘔をするやうに

「われわれはオーストリ人でもない。ドイツ人でもない。たゞわれわれはバンのために闘ふのである。」

などゝ云ひ出すのである。

そんなのをいくたりも見ると、ヒトラアは肚が立つてたまらなかつた。」

「これでも、彼らはドイツ人なんだ。偉大な祖國のことを忘れて、パンのために闘ふなんて云つてゐる。意氣地のない人たちだなあ。昔、君たちのお祖父さんは祖國の急を聞いて、雨とふる砲彈の中へとびこんで行つたのぢやないか。」

それから、しばらくたつたある日のこと、カスタニアの葉がそろそろ茂りはじめて、ウイーンの人たちがギターを肩にかけたり、マンドリンや笛を手に持つて踊るやうにウイーンの森を目指して出かける。ヒトラアも、お天氣がいゝものだから、外に出て、輪狀道路の並木を歩いてゐると、遠くのはうから、合唱のこゑが聞えてくる。

「みんな陽氣に騒いでゐるんだなあ。」

と思つたところ、それは、さうにちがひないが、マンドリンやギターのかはりに、赤い旗や、標語を書いた板をかゝげて、ぶつさうな歌を歌つて行進してくる赤の勞働者たちだつた。行列は四列縦隊になつてやつてきて、いくらたつても終りになら

ない。やつと、終りになつた頃は、たつぷり二時間もかゝつてゐる。ヒトラアは、お天氣のせいであつと浮き浮きしてゐたのが、それでもつて、何とも云へないくらゐ重い氣持になつた。

（ドイツのことを考へてゐるのは僕ひとりではないかしら。あゝ……それにしても、赤の病氣はどうしてあゝも流行るのだらうか？）

道々、そんなことで氣を悩ましてゐると、とある貧しげな通りにさしかゝつたとき、一軒のタバコ屋の店先に、「勞働新聞」があるのに氣が付いた。それはオーストリ社會民主黨が發行してゐる新聞で、ヒトラアがよく行つたコーヒー店の卓の上にならずのつてゐたものだが、手に取つて見ると、肚を立てないではゐられない見出しがいつもついてゐるので讀んだこともなかつた。ところが、そのときは、何にせよ流行の原因をつきとめたくてたまらなかつたので、引つたくるやうにして買つてきた。



子 供 の 好 き な ヒ ト ラ ア 總 統

そしてそれから毎日といふもの「労働新聞」を讀んでみると、赤でない者はみんな悪口を書かれてゐる。怠け者の下男にちよつと口叱言を云つたといふのでも、それが赤でない主人である、と、(きはめて勤勉な下男が、往來で石に躓いたために不機嫌になつた主人によつて、何でもなく殴打された)となる。それから、新聞は赤でなければ讀んではいかん、とか、いつたん赤の組合にはいつたものは、脱退するときは、どんなにひどい目にあふか覺悟しろ、

といつたことがくりかへし書いてある。

「へん、ではこれは何ですか、いつたい。」

とヒトラアは、それまでに讀んだことのある社會民主主義のパンフレットをあげて、（われらは自由を語る）とか、（われらをおいてこの世に品のある人間はない）とか書いてあるところを開けて、あつはつは、と大笑ひした。

ぶきみなユダヤ人

つまり、社會民主黨といふのは、マルクスといふ男から赤の細菌の作り方をこつそり教はつた悪い男が二三人で牛耳つてゐて、何も知らない労働者のあひだに菌をばらまくと、そこに保菌者が出來てくるから、それを決してなほらないやうにする。もし患者がなほれば、もうけにならないといつた悪い醫者の考へがあるからで

ある。しかし、世間に向つては、自分たちの悪業が知れわたると困るものだから、やつてゐることや考へてゐることをさもさも良いことのやうに觸れてまはる。ヒトラアが笑つたのもそのからくりを發見したからである。

ところで、ヒトラアがもつとよく考へてみると、いつたい社會民主黨が赤を流行らせるといふのがもうけになるからといつたところで、それだけでは大したことはない。財布のあまりふくらんでゐない労働者たちから、わづかな金を捲きあげたところで、その額はそんなにまで骨折つてやつた結果としてはばかばかしいものだらう。何も知らない労働者こそいゝ面の皮だが、悪事をはたらくものの計算からゆくと、たゞそればかりだといふことはきつとない。これには何か、深いわけが……

そんなことを考へながら、ヒトラアは仕事場をわたり歩いてゐる。するとあるとき、仲間のものが

「あいつはユダヤ人だ。」

といまいましたさに云ふことを耳にした。

「だつて、それがどうして腹が立つの。」

と聞くと

「おまへ何も知らねえのか。おめでたいなあ、奴らは俺たちと人種がちがふくせにのさばつて仕事場を荒してゐるんだぜ。」

「へえ、だつてせつせと働いてゐるぢやないか。」

「へつへつへ、荒すといふのはねえ、俺たちよりも安い給金でいゝとやつてくるから、俺たちがお拂ひ箱になつてしまふだらう。それが荒すさ。」

「なるほどなあ。しかし……」

同じ人間だから、そんなに腹を立てなくてもいゝだと、ヒトラアは云ひたかつたのだが、考へてみると、さう云ひ切つてしまふには何かもやもやとしたものがある。それはパンの問題があるからだ。それでも、しかし、仲間のあひだにひろがつ

てゐる反感を、全然正しいと思ふわけにもゆかない。

「しかし、人種がちがふつて云つたつて、僕たちと同じ顔付きをしてゐるし、同じ服装をしてゐるぢやないか。ユダヤ教信者からだらう、君の云ふのは。」

事實、ヒトラアは小學校のときからそれまでといふもの、ジュー（ユダヤ人といふ意味の悪口）と人が云つても、何の反感もユダヤ人にはおこらなかつた。リンツの町で、お母さんに内緒で出かけた演説會で、辯士がさかんに、ジュー、ジューと叫んだときだつて、ちよつとしか憎しみを感じなかつた。それにウィーンに來ても、まだゆつくりと上から下まで見るといふところまで行かなかつたので、それはもつともな考へである。

「ちがふ。ちがふ。ユダヤ人はウィーンには二十五萬人もゐるんだぜ。通りを歩いてゐるとき、おまへは何を眺めてゐるんだよう。」

と仲間は笑つて相手にしなかつた。

それから間もなく、ダニユーブ河岸といはれてゐるウィーンの下町に通るかゝつたときに、黒い頬ひげをぼうぼうと伸して、外套のやうな服を着た異様な男が、兩手を袖口の中で組み、こそこそと歩いてゐるのにばつたり出遇つた。

（これがユダヤ人なのか？　しかし、リンツ町のユダヤ人はこんな恰好をしてゐなかつた。とすると、みんなドイツ人なのかな。）

なほもよく觀察してみると、ウィーンの町にゐるスラヴ人ともちがふし、マヂャール人とも全然別である。といつて、ドイツ人であると斷言することも出来ない。そこで、ちやうど本屋のまへにやつて來たのをさいはひと、「ユダヤ人の正體」といふバンフレットみたいに薄い本を買つた。

それを公園のベンチで讀むと、ヒトラアは

「あつ！」

と驚いた。なにぶん、バンフレットのこととて、あまりよくは書いてないが、と

にかく、驚いたことには、社會民主黨の裏面にユダヤ人があるといふことである。

そして、ユダヤ人とドイツ人とは同じであると考へたことは間違ひで、ドイツ人とは全然ちがふ人種だと書いてある。

「さうか。それは、ほんとうにさうだつたのか。」

とすぐつとベンチから立ち上つて歩き出す。パンフレットによると、ユダヤ人の金持はヨーロッパの町で今をときめく商人になつてゐるが、またユダヤ人の貧乏人は町外れのむさくるしいところでひと塊になつてゐるとあつたので、ウィーンの中心地とドナウカナルの北部を探險して、ユダヤ人を見付けてやらうと考へたのだ。

そこで、まづ、ウィーンの銀座通りといふところのケルントナー通りに辿りついてゆつくりと歩きながら、紳士らしい人の顔をつくづく見て廻ると、ダニユーブ河岸であつたユダヤ人の顔付によく似た人がずゐぶんとゐる。それから、いよいよドナウカナルのユダヤ人町に乗りこむと、どれもこれもユダヤ人だ。それぞれ、ぷんと

鼻をつくいやな香ひを發散しながら、汚じみた着物にまるまつて歩いてゐるところは、何となくぶ氣味である。

「うん、さう思へば、あのユダヤ紳士もぶ氣味だつた。よし、これはひとつ研究してみなければ……」

何ごとにも、事にあたつて研究心の強いヒトラアはそれから、いろいろとユダヤ人に關する書物を讀んだ。さて、その結果、彼の考へにどのやうな大變化が生れたことだらう。

反ユダヤ主義者になる

われわれ日本人でさへユダヤ人の鷲鼻と知つてゐる、そのユダヤ人はさてどんな民族だらう。今から、ざつと四千年ぐらゐまへから、中央アジアにあつて、青

草を追ひながらうろろしてゐたアラビヤ人と同じセム族である。その頃はヘブライ語といふのをしやべり、ユダヤ教を信仰して

「われわれこそは神にえらばれた民である。」

と威張つてゐた。なるほど一時はダビデ王が都をエルサレムに奠め、その嗣子のソロモン王のときにはなかなか榮えたものである。ところが今から二千五百年まへそのユダヤ王國が亡び、それからといふもの、いろいろな強國に従へられてゐる。それで、ユダヤ人はどうかして、救世主でも出て來て獨立することが出来るやうにと考へてゐると、そこへキリストが生れた。しかし、キリストは

「われわれは、どこの國の人でもみんな仲よしにならなくてはいけない。」

と云つて説教したので、神から自分たちだけが選ばれたと信じた同じユダヤ人たちによつて十字架にかけられてしまふ。その後もいくたりか救世主が現れたが、たうとうキリスト紀元七十年といふときに、バルコチバといふ救世主がローマのテト

ス將軍のためにさんさんぎんに破られて、ユダヤ人はエルサムレムを追ひ出されることになつた。

これから、あと千九百年、つまり今日に至るまで、世界の諸々方々に散らばつて、國といふものを失つてしまつたが、それであきらめたかといふと、いやどうして、ちつともそんなことはない。武力ではもう再興の望みがないから、他の方法で目的を達しようといろいろとユダヤ人は計りごとをしてゐるのである。

流浪分散の生活がはじまつてから、凡そ五百年ぐらゐで、まづ、タルムード教典といふものが作りあげられた。それは、勿論、ユダヤ王國再建を目指したものであつて、なにしろ五百人もの高僧が五百年もかゝつてこしらへたのだから何十冊あるのだから分らない。しかし、その中で

「汝等ユダヤ人は人間であるが、世界の他の國民は人間に非ずして獸類である。」とか

「他民族の有する所有物はすべてユダヤ民族に屬すべきものである。故に何等の遠慮もいらぬからこれをユダヤ民族の手に收めること差支ない。」

などと教へてゐるのである。

このやうな教典をしつり信じてゐるユダヤ人は、國が亡んだ、さてどこへ行くかとなると、何か品物を持つて、ぼつぼつとヨーロッパの町へあらはれた。町の人々へ品物を賣つてゐるうちに、商賣はひとり占めにするし、おまけに金貸まではじめ。なにしろ、自分たちだけが神から選ばれたと思つてゐるので、その町の一劃に固つてゐて、町の人々と仲善しにならうとはしない。そして、外の國の人たちの物は自分の物と考へてゐるので、高い利子のため借金が拂へなくなつた町民から、先祖傳來の土地を取り上げてしまふ。

そんなことで、一部のユダヤ人は金袋をふくらましてゆくうちに、ヨーロッパではフランス革命といふのが起り、人權平等が叫ばれると、それが各地に波及して行

つて、ユダヤ人町などゝいつて、ユダヤ人ばかり特別に扱ふことはよさうぢやないかといふことになつた。さうなると一部のものは、金がふところにいっぱいあるから、表面だけでもキリスト教に改宗して、フランスにゐるものはフランス語をしやべり、ドイツにゐるものはドイツ語をしやべり、めいめいフランス人なりドイツ人なりのふりをしながら、金の力でもつて、ヨーロッパの國々をユダヤの屬國にしてしまはうと考へた。

しかし、いくらさう考へても、表向きにそんな大それたことが通用するはずはないから、世界各地のユダヤ人は、祖先傳來の聖地であるパレスタインに戻つてそこにユダヤ王國を昔のやうに建設しようではないかと云ひ出した。それがシオン運動といふので、ウイーンのノイエ・フライエ・プラツセといふユダヤ人の大新聞に、文學部長としておさまつてゐたヘルツル博士が唱へ出したのである。シオンといふのは、故郷パレスタインの別名だから、ヘルツル博士が一八九七年（といふとヒト

ラアがもう八歳になつてゐるに、その頃はまだオーストリアの治下にあつたブラーグ市にシオン會議といふのを開き

「ユダヤ人は一國民である。一國民である以上一國を持たねばならぬ。」

と叫んで、それがちつともユダヤ人の大陰謀であるとは氣がつかせない。もつといろいろなことを書きものにしたシオンの議定書は、利巧なユダヤ人のことから、世界の眼のとどかないところにちやんとしまつておいたからだ。

さて、それからユダヤ人は陰にまはつて、どんなことをしたかといふと、金の力でもつて政府の大官や、政黨の領袖、それから經濟界の巨頭といった連中を押へつけ、金は世の中で一番いゝものであるから、金のためにはどんなことをしてもいゝといふ自由主義を吹きこんだ。それから、フランス革命についで、いまゝでいろいろな物を手で作つてゐたのが機械で製造されるといつた状態になる。金が萬事だとふきこまれた人たちは、人間なんかどうなつても、金さへ儲かればいゝと、どん

どんその機械を据えつけた。そのために、いま、で手工業で暮してゐた職人たちの仕事がなくなつて、喰べられなくなつてくる。そこで止むなく、安い給料でもいゝからと何とか工場に傭はれようとした。すると、ユダヤ人の思想にかぶれた人たちは、働きにやつてくる者の足もとを見て、無法なことを云ひ出す。ユダヤ人に押へつけられた政府は、この状態を見ても知らん顔をしてゐる。これでは労働者といふものはますます困つてしまふだらう。

そこへ目を付けたのが、ユダヤ人である。一方で、労働者を困らせるやうな金第一の自由主義を流行らせておいて、今度は、誰が救つてくれる人はいかなあと思つてゐる労働者に近づいてゆく。そして、さもさも同情するやうな顔をして

「それは怪しからん。そんなことつてあるものか。資本家は横暴である。」

といふ。このやうな甘言に、何とかかとか理窟をひねくりまはしたのがマルクスといふユダヤ人で、ユダヤ人はこのマルクスの理窟、つまりマルキシズムといふの

をさかんに宣傳する。何しろ、世界一の大金持が集つてゐるユダヤ人のことだから大きな新聞社をたてることなど何でもない。それも、ひとつは上流社會に自由主義を宣傳する新聞社と、もうひとつは下層階級にマルキシズムを流行らせる新聞社とに分けて、新聞をどしどし發行する。

ユダヤ人はこんな惡賢いことをやつて、世界の國々に亂を起し世界の國民をユダヤの奴隸にしてしまはうと企んでゐるが、世界の人たちはともすると（律義者のユダヤ人）だとか（罪のないおどけたユダヤ人）などゝ信じる傾きがある。それもみんなユダヤ人の新聞が植まつけた宣傳なのである。

こんなからくりが分ると、ヒトラアは

（これはうかうかしてゐられないぞ。）

と考へた。

（どうも、ノイエ・フライエ・ブレッツセとかヴァイーナ・ターゲブラットとかユダヤ

人の大新聞が、ドイツのカイゼルの悪口を云ふので、腹を立てゝゐたが、これで分つた。僕たちの祖國なんかどうなつたつてユダヤ人にはいゝのだ。よし、ユダヤ人なんかのにさばられてたまるものか！)

ヒトラアの反ユダヤ主義といふのはこゝですつかり決つたのである。

前途の光明

ヒトラアはこんなわけで一年もたつたかゝないうちに、ウイーンの華かな表面をすつかり暗くしてしまふやうなウイーンの裏をまざまざと見せつけられた。いや、それを見るどころか、もし映畫などに寫したら、そこへ表はれてくる人物だつたわけである。しかし、そんなに貧しい暮しをしてゐても、プラツハチツツにならうといふ希望は捨てたのではない。だから、暇さへあればこつこつと建築の研究をやつ

てゐた。それにときどき、あんまり暗いじめじめした木賃ホテルの氣分を拂ひのけるには、オペラへ行つて、心臓に勇氣をふきこんでやる必要がある。ところが、またオペラ見物といふのがなかなか、金持のやうにらくらくと行かれるのではない。そこへ一べん行けば、幾日もひもじい思ひをがまんしなくてはならないといつたわけだから

オペラ——僕は君になによりも美しい夢を見せてあげませう。

バン——僕は君に氣持よく毎日を過させてあげませう。

オペラ——バン君の云ふのもつともだ。しかし、人はバンのみにて生きるものにあらずといひますからね。何よりも、生きる勇氣ですよ。

バン——オペラ君の云ふのもつともだ。しかし、花より團子といふことがありましてねえ。腹が空いてゐては戦争は出来ませんや。

とひとりのヒトラアの心中に、バン君とオペラ君とが口論をはじめて、果ては摑

み合ひにも及ばうとするのである。そこでヒトラアは立つたり、坐つたりして、いはゞ仲裁をやらうとするが、

「生きる勇氣！」

といふオペラ君の肩をもつて、帽子をかぶり、財布をしらべてオペラにたうとう出掛けた。

そんなことをやつてゐるうちに、ウィーンにまた冬がやつて來ようとしてゐる。

輪狀大路のカスタニヤ並木も、だんだん裸になつてくると、紳士はあつい毛織の外套をきて歩いてゐるし、婦人はぬくぬくと毛皮に腮あどをうづめながら通りすぎる。そして、ヒトラアの住んでゐる町のあたりには、山から枯木を捨ひ集めて肩に擔いでくる裸足の少年たちが行つたり來たりしてゐるのである。つまり、貧しいものも、金持も、寒い中にあつて暖まらうとしてゐるのに、手間取りのその日暮しをやつてゐる連中は寒い中にも寒くなくてはならない。冬になるに従ひ仕事がだんだん

となくなつて、泊るどころかバンにさへありつくのが困難となるからである。かういつた連中は、枯葉のたまつてゐる通りの日向で、午間はともかくちつと暖つてゐるが、それもやがては寒い夜に追ひ拂はれて、どこか、しごく簡単に一夜の宿が出来るところを探しにゆかなくてはならない。

ヒトラアもそんな仲間のひとりであつた。あんまり、あちこち歩くのでズボンが大分破けてきたし、上衣は虱なんかのよい巢にならうとしてゐる。それに髪は伸び放題で、どこから見てもこれではこの青年があと二十年たつて世界がびつくりするやうな偉い男にならうとは思へなかつた。がしかし、こんなうちにも彼は希望を捨てなかつたのである。ともすれば風當りの強いところにあるろうそくのやうに、その火が消えやうとすると、ふところから、ウィーンに出るとき持つて來た寫眞を出して

「お父さん、それにお母さん」

と呼びかけるのがきまりだ。

「僕は落膽しさうなところでしたよ。しかし、あなた方の顔にお目にかゝつて元氣を出します。いつまでこんな冬が続くものではありませんからね。」

といつて、またあてのない仕事を探しに出かけたが、ある日のこと、思ひがけないところから運がひらける、といつても大したものではなかつたが、とにかく救ひの手がさし伸べられたのである。

ヒトラアはそのとき例によつて、木賃ホテルの床に腰かけて、ズボンをつけた外は裸だつた。それで何をしてゐたかといふと、上衣の虱を取つてゐたのである。何四目を潰したところであるか分らないが、しばらくさうやつてゐると、後ろからいきなり

「おい、君何をしてゐるんだい。」

と誰かの聲がする。振り返つてみると一人の若い男がつゝ立つてにこにことはゝ

ゑんでゐる。髪を長く伸して、膝までくるやうな長い黒色の上衣をきて、一目でボヘミアン・スタイルの畫工であると分る。

「何をしてゐる？　つて云つたつて御覽のとほりさ。」

「へえ！　おい虱かい。こいつはたまらない。うーつ。」

大げさにそんな叫びをあげたが、若い男は繪描きらしい吞氣さで、ヒトラアの手もとを見てゐるうちに、（おや）と呟いた。その二つの手は虱を取つて潰すにしてはあんまり白くて、且きやしやであつたからだ。そこで若い男は、何かわけを聞きたくなつたとみえて

「僕はねえ。今夜、君のとなりに居眠りが出来る光榮に浴したよ。そこで友だちになるまへに、名まへを云ひ合はうぢやないか。僕はラインホルト・ハニツシュつていふんだ。君は？」

「僕はアドルフ・ヒトラア。」

ヒトラアはうるささうにそれだけ言つて、やはり例の手仕事をつゞけてゐる。

「君は、失禮だけど、何をして喰べてゐるんだい。僕は廣告圖案をやらうと思つてゐるんだ。」

「さうかあ、君は僕が思つたとほり。僕はたゞ町をうろろしてゐるだけさ。」

「うろろしてゐる。といふと。」

ハニツシュは改めて、きれいな手で虱を潰してゐる若者の顔をつくづく見直した。そして、(この男の友だちとなつたからには、まづ第一になすべきことはこれだ)と考へながら、自分のポケットの中から、一塊のパンを取り出したのである。

「どうだい、君もよかつたら、これを半分やらないか。」

「なんだ。パンか、うん、ありがとう。」

彼は、さう言つて、上衣をわきにおき友だちの恵みにあづかつた。一日中、まだ何もはいらなかつたのである。

「しかしねえ、君はどういふわけで、こんな所に落ちこんだのだい。君の手を見る
と労働者向きには出来てないぢやないか。」

ハニツシュの親切にはだされて、ヒトラアはいろいろと身の上ばなしを話してき
かせる。中でも、ウィーンの美術學校にはいりそこねて、プラツハチツツにならう
と考へてゐるといふのを耳にすると、ハニツシュは

「ブラボオ！」

と手を拍つた。

「どうだい。アドルフ、これから二人で一緒に繪描の仕事をやらうぢやないか！
儲かるぞ。」

そこで二人の青年はいろいろと話し合つた結果、ヒトラアが外出用としても恥し
からぬ一着が出来るまで、主としてポスターを描く、それを持つてハニツシュが商
店を廻り、同時に次の注文も取つて歩くといふことになつた。

「儲けは山分と行かう。」

「うん、さう願へれば。」

といふわけでいよいよ明日から開店である。さて、店を開いてみると、ハニツシユの叫んだやうには儲からなかつたが、とにかく、どうにか、かうにか毎日は暮せるし、今までのやうに仕事場から歸つてくると、ぐつたりとしてしまつて本も讀めなかつたときが多かつたが、そんなこともなく時間は餘つてゐるし、その上、建築家志望にも、今度の仕事はまんざら縁がないといふわけではなかつたので、なほさら身がいつた。

「お父さん、それにお母さん、どうやら、僕も一人前になりさうですよ。喜んで下さい。」

と大分古ぼけてきた寫眞に向つて言ふと、そのお父さんもお母さんもほろろみ、なほも息子を勵ますやうに見えるではないか。

ヒトラアは一心にポスターや繪ハガキの原圖を描き、それがすむと建築の研究をする。一步、一步、プラッハチツの域に近づいて行くのだと思ふと嬉しくてたまらない。

「おい、バンにしないか。」

とハニツシニ言はれて、はじめて腹の空いたことに氣がつくほどの熱中ぶりである。それだもんだから、顔が頬ひげでとりまかれ、髪が首の下まで長くなつても一向おかまひなしであつた。もつとも、それが當時の畫家の恰好だつたこともあるが、一日中、顔のことも構へなかつたといふには、バンの仕事や建築の研究の外に依然として、生々しい社會問題のことがあり、それからオーストリはどうなるだらう、ドイツ人は果してもとのやうな勢力を持てるやうになれるかしらといふ心配があつて、従つて、オーストリの政治問題も研究してゐたからである。

民族議會

そして、ある日のこと、ヒトラアは生れてはじめてオーストリ議會に出かけた。といつても、勿論そこで演説をするわけではない。たゞおとなしく、無名の傍聴者として、オーストリの政治の一面はどういふ風に行はれてゐるかを研究したかつたからである。ウィーンに来てから、いくど國會議事堂の建物をすばらしいと思つて眺めたかしないが、いざそこへはいるとなると、議事堂の全景はありがたいと感じるほど大きくて美しかつた。それもさうだらう。なにしろ、テオピリ・フォン・ハンゼンといふ立派な建築家が、十年もかゝつて創りあげたのだから。そして、それは二千年も前のギリシャ建築、といふのは、鳥居の柱のすてきに大きなのを石で作つて玄關に並べ立てるといつたやり方だが、ウィーンの議事堂も三つある入口が

その式を取り入れてあり、殊に中央のは前面に、ギリシャ神話で智慧の神様とあがめられてゐたパラスの像が槍を持つて立つてゐる。さらに、屋上の四隅にはギリシヤの人馬像が、東西南北に向つてそれぞれ走り出さうとしてゐるし、また同じやうな像が階段の上り口で、人々の目をひいてゐる。

ヒトラアもいよいよ中へはいつて、こんなギリシヤ式の人馬像にお目にかゝるとなんだか神々しくなつて、着物のどこかに塵でもついてはゐないかときよろきよろした。ところが、一度、ドアをあけて、オーストリ議會といふものを目のあたりに見たとき、そんな氣持がいつべんで吹きとんでしまひ、その代りに、大きなこゑで「なんだこのざまは、それでも諸君はこのギリシヤ建築の中で政治をする資格があると思つてゐるのか！」

と叫んでやりたいほど肚が立つた。

議場にはきら星のやうに議員が並んでゐる、といふ風に形容したいところが、そ

れはまるで子供たちが、立派な議席についてみて、嬉しくなつてさかんに騒いでゐるといつた光景である。大切な經濟問題が討議されてゐるといふのに、ある代議士が立ち上つてチエツク語で演説をはじめると、ポーランド語やドイツ語で彌次がとぶ。それで、今度はもうひとりの議員が立つて、ドイツ語で演説すると、チエツク語や、ポーランド語で怒鳴るこゑが起る。果ては、いたづらな中學生みたいに床を踏みなしたりする。

白髪あたまの議長が、いくら鈴を振つて

「靜肅に、靜肅に！」

と叫んだところで何の効果もない。つひには議長がたまり兼ねて、すくつと立ち上り、力いっぱいに鈴を鳴らし出したが、それでも騒ぎはなかなかしづまらなかつた。これはまるで、秋の夜に森にはいつて、いろいろな音を立てゝ鳴いてゐる虫に向つて「靜まれ、靜まれ」と命令するやうなものだ。と考へるとヒトリアはをかし

くてたまらない。たうとう吹き出してしまつた。がなほよく見まはすと、こんな騒ぎの中で、こくりこくりとたのしさに舟を漕いでゐる老代議士があるかと思ふとそのとなりでは拳固で卓を叩きながら二人が大議會の中の小さい議會をやつてゐるといつた有様である。

オーストリの國會ともあらうものが、どうしたわけでこんなにだらしないものとなつたか？ この理由はまへにも書いたが、オーストリといふ國がいろいろな民族の寄せ集めで出来てゐて、それを統一すべきはずのハプスブルグ王家にもはや力がなくなつてゐたからである。フランス革命の「人權平等」はヨーロッパの國々に議會政治を行はせるやうになり、そこでオーストリも、世界に名だたる議事堂を建てゝ威張つたものゝ、さて議會をひらくとなると、各種の民族の代表者がそれぞれ勝手なことを言ふやうになつて、それが引いてはオーストリの命取りとなつたのだ。

民族の争ひはまづお國言葉を使はせろといふ形であらはれた。それまでドイツ語

が公用語になつてゐたのに、ポーランド人はポーランド語を使はせろ、イタリ人はイタリ語を、チェツク人はチェツク語をといった工合に、それぞれ勝手なことを言ひ出す。

その中で、最も烈しいのはチェツク人のたくさんゐるボヘミヤ地方だつた。ヒトラアの生れる凡そ十年も前から、そこではチェツク人がのさばり出して、オーストリアの公用語にはドイツ語とチェツク語を使用せよと叫びはじめる。しかし、ボヘミヤにゐるドイツ人は、そんなことつてあるものか、こゝはもともとドイツ人が血を流して得た土地なのだから、ドイツ語一本槍で行かなくてはいけないと反對した。ところが、そこは何分にもチェツク人がたくさんゐるのだし、ウィーンの國會にあつてもチェツク黨は、ポーランド黨、ドイツ黨とならんで三大黨といはれたのだから、ポーランド人と握手をして、兩公用語案を通してしまふ。そして、ボヘミヤで一番大きな都のプラーク、そこにあるプラーク大學でも、チェツク語のクラスとド

イツ語のクラスに分けられるやうになる。ドイツ人は肚が立つてたまらないが、多勢に無勢であるし、政府の力が弱くなつたのだから、しかたがない。

それから十年たつて、ヒトラアが生れたころ、ちやうど皇太子殿下となられたフエルデナンド大公は、チェック人の肩を持つて、ドイツ人を小さくならせようと考へられたのだから、ますますたまらない。ドイツ人はオーストリの國にゐて、異民族のチェック人が風を切つて歩いてゐるのを、おもしろくないと思つてゐると、一九〇七年の普通選舉である。投票箱をあけてみたところが、それまで、どうにか、過半数を占めてゐたドイツ人の代議士が、數では勝てないことになつてしまつた。しかし、ドイツ人だつて、みすみす自分たちの國が取られるのを見送つてゐるわけにはゆかないから、議會でも、自分たちの意見を主張する。それでチェックの議員たちとのあひだに、烈しい口論がもちあがり、果ては互ひに、議事進行の妨害をやるやうにまでなつた。

ヒトラアが、生れてはじめて見物して、笑ひ出したのもそのひとつである。もつとも、もしヒトラアが千里眼だとしたら、どうだつたらう。あと、五六年もすれば第一次世界大戦がはじまり、負けた組のオーストリ・ハンガリはそれぞれその領土の半分も削られて、あるひはポーランドに、あるひはイタリに、それから、ルーマニア、ユーゴスラビヤに分けられてしまふはおろか、ボヘミヤにはその近くの領地とともにチエツク人とスロバツク人がチエツコ・スロバキヤ國をこさへてしまふのである。

こんなことが分つたら、勿論、笑へるものではない。しかし、たとへ、それははつきりと分つてはゐなかつたが、ひとりのドイツの代議士が立ち上つて、何か演説をはじめたとき、あんまり彌次が多くてよく聞きとれなかつたので、ちよつと心配だつた。

「いつたい、今演説してゐる人は何黨ですか？」

「オール・ドイツ黨ですよ。」

「えつ。」

「えゝ、御覽のとほりのていたらくでさあ。少しまへまではオール・ドイツといへば飛ぶ鷺を落すほどの勢ひでしたがねえ。」

「へえ、そんなときもあつたのですか。」

「なるほど、お見受けすればあなたはまだお若いから、昔のことは知らないのもむりはない。昔は、ドイツ人といへば誰でもオール・ドイツ黨だつたんですよ。議員がひとり、(ホーヘンツォレルン萬歳!)といへば、満場そのころだけの合唱といつたものです。思へば變り果てたものでさあ。」

「ぢや、どうしてこんなになつたんでせう。」

「さあ、どうしてですかね。もう、オーストリも終りぢやありませんか？」

「しかし、さうなつたとして、オーストリのドイツ人はどうなるでせう。」

ちやうど、そのとき、ヒトラアの隣りの老人に代つて答へるやうに、オール・ド
イツ黨代議士のこゑが一段と高く

「何れにせよ、われわれはドイツとオーストリとは一つにならねばならぬ。従つて
最後に私は叫ぶ。ホー・ヘンツォレルン萬歳！」

と言つて腰を下ろした。誰も、その萬歳のこゑに和さうとするどころか、耳だつ
て借さうとしない。議場はやつぱり千匹の蜂がぶんぶん飛び廻つてゐるやうな騒々
しさである。ヒトラアと老人は、こんな中で

「ドイツのために。」

と握手した。

「リューゲル市長のウィーン美化運動も今となつては所詮水泡にならう。」

老人は別れぎわにこんなことを言つた。ヒトラアが議場を出て、ふたゝび、國會
議事堂の建物を眺めまはしたとき

(やあ、やつぱり立派な建物だなあ。しかし、それはチェツク人、ポーランド人、ハンガリ人、セルビヤ人、それからユダヤ人たちをいれてゐる立派なごみ溜なんだ)と吐息をついた。それは、とりも直さず、リューゲル市長が世界で一番の美しい町にしようとしたウイーンのことにもあてはまつた。ヒトラアはこの事に考へつくと、それではウイーンをもとどほり、ドイツのものにしようと思つた、オール・ドイツ黨のシエーネレル黨首と、リューゲル市長のことを研究してみようと決心した。

ナチスの先驅者

昔から、いろいろ、世の中の改革といふものがあるが、よく見ると、それはかならず突然に出来たものではなく、いつも前にそれと似た小さい改革があるものであ

ヒトラー總統が建築製圖をしてゐる



る。ヒトラアはナチス黨によつて、ドイツの改革をやつたが、それにもやはり手本といふのがある。つまり、これから話さうとするシエーネレルのオール・ドイツ黨と、リユーゲルのキリスト教社會黨がそれだ。

オール・ドイツ黨の主張する考へといふのは、ビスマルクがドイツを統一するの
に夜も日中もなく忙しかつた時から、ドイツ人のあるものが考へてゐた。それは、
ビスマルクが、ドイツを統一するにはオーストリを除かねばならないと言ふのに對
し、オーストリもドイツの中へ丸めてしまへと言ひ張つたのである。まへの方は小
ドイツ黨といひ、あとの方は大ドイツ黨といはれた。

前にも言つた通り、小ドイツ黨の意見でもいつて、ビスマルクはオーストリをド
イツ聯邦の外へ追ひだしたが、それから、オーストリの中にあるスラヴ民族が、オ
ール・スラヴといふ考へに目醒めて騒ぎはじめたので、ドイツ人は、殊にオースト
リにゐるドイツ人はオール・ドイツといふ考へを立て、本國のドイツを中心にして

その他諸地にあるドイツ人が集らうと運動しはじめる。

シエーネレルはウィーンで生れて、フオンといふ貴族の稱號を持つてゐるが、その運動に熱心となつたため、ヒトラアがまだお母さんのお腹の中にあるころ、オーストリの役人に捕つて、禁錮五ヶ月の刑を言ひ渡され、おまけに、名前から「フオン」をとられてしまつた。しかし、アドルフがよちよち歩くやうになつた時には、押しも押されぬオール・ドイツ黨主となつて、それから六年ばかりといふものの黨は大きくなる一方である。

「ではどういふわけで、あつといふ間に勢力が衰へたのだらう。とにかく、シエーネレルは貴族であつたし、それに經濟博士ぢやないか。」

とヒトラアは考へる。そこでなほも本を讀んでゆくと

(なるほど)

と手を拍つた。その手には繪具のしみがついてゐるが、その部屋はなにしろ、ウ

イーンでもひよつとするとこれぐらゐ質素なところはないといつたものである。

(なるほど、フォン・シエーネレル先生は、學者でもあるから下情にはうといのだな。)

と呟いた。

シエーネレルはドイツのホーヘンツォレルン王家をいたゞいて、ドイツ民族を一つにしようとし、従つて反ユダヤを唱へた。それから、ドイツはオーストリを併合すべしと叫んだ。それはいゝが、その相手が金持ばかりで、貧乏人に向つて言つて聞かせようとはしなかつた。だから、町に出て大演説會をひらかうとしないで、たゞ、議會でばかり、理想を説いてゐる。議會がドイツ人ばかりならばあるひはそれでよかつたかもしれないが、實際はだんだんドイツ人が少くなつたのだから、それではだめだつたのだ。シエーネレルが落目になつたのを挽回しようと考えて、カルスバードの温泉場に行幸されたカイゼルに御助けを願つたが、たとへ御聞届にな

つたとしても、もはやだめだつたのだ。オール・ドイツの運動ははじめから、元氣のいゝ貧乏人に呼びかけて、そこを中心としなくてはならなかつたからである。

リューゲル市長はそこへ行くと門番の息子である。なにしろ、ひどい苦勞をした末、辯護士になつたのが、立身のはじまりといふのだから、貧乏人のことはよく知つてゐる。辯護士の店をひらいても、お客になつてやつてくるのは職人や貧乏人で彼らの味方になつてやる。それ故、リューゲルが代議士の候補に立てば、そんな人たちが皆、（カール・リューゲルさん）と書いて投票する。このやうにして、リューゲルのキリスト教社會黨はさかんになつて行つた。彼は五十四歳でウイーンの市長になり、それから十年といふもの、電氣、ガス、鐵道といつた近代設備をウイーンに導きいれて、世界第一の都にしようと努力した名市長だけあつて

「ウイーンはオーストリアの心臓である。」

と考へた。そこで、キリスト教社會黨の理想も、ウイーンに活氣を與へて、その

新しい血をオーストリの隅々まで行き渡らせることにあつた。そして、ウィーンが元氣よく鼓動するには、市民はみんなキリスト教を中心にして集り、ドイツ人も、チエック人もそれぞれあまり我儘を言つてはならぬ。なせならば各民族の協力こそウィーンを救へるからであると主張した。

「各民族の協力だつて！ そんなことが實現出来るかしら。」

ヒトラアは堂々と立つてゐるウィーンの議事堂の内部のことを思ひ出して、ぺつと唾を吐きたくなつた。でも、心からいふと、リューゲル市長の暖かさ、殊に職人や貧乏人に味方したところが好きである。それから、頭からいふと、シエーネレルのオール・ドイツの理想が何より氣持にあつてゐる。

ウィーンにやつて來て、まづ、赤の労働組合に肚を立てた。それから社會民主黨のからくりが分つて、そいつが憎らしくなつた。さらに、黒幕にあつて、それをあやつるのみか、ウィーンの町を腐敗させたユダヤ人を一生の敵と考へた。また、そ

のユタヤ人によつてまとまりのなくなつた議會人にも肚が立つた。ドイツ人を押へつけて、のさばつてゐるチエック人も氣に食はなかつた。ウィーンに住んでゐるヒトラアは、それこそまさに八方塞りといつていゝところで、たつたひと所、見晴らしのきくところは、シェーネレルとリユーゲルのゐるところだつた。

しかし、それもオール・ドイツ黨は間もなく姿を消してしまふ。リユーゲル市長も、ウィーンの市長を止めてから三年ばかりで死んでしまつた。ちやうど、それは一九一〇年の三月のことで、もうぢきウィーンの森がいつせいに若返つて、市民たちを呼びよせようといふときである。市民は喪章をつけて、悲しみの顔を並べ、また戸毎に弔旗がうなだれてゐる中を、故ウィーン市長の柩を先頭にした長い行列がしづしづと、市廳からあらはれて、輪狀大路の方へ向つて行つた。ヒトラアもそれを見送る市民のあひだに立つて、十字を切つたが、行列が見えなくなると

「これは、ちやうどウィーンの町そのものゝ葬式にちがひない。どんな偉い人物が

あらはれたつて、ウイーンは救へなかつたんだ。もし、リューゲル市長がドイツに生れたら、働き甲斐があつたらうに、惜しいことをしたものだ。」

こんなことを呟いた。

これまでのうち、最も偉大なドイツ人市長といつてヒトラアが尊敬してゐたリューゲルがなくなつたから、それぢや、さつそく、いやなウイーンをとび出して、ドイツへ歸つたか、といふと、さうではない。きつと神様が、ヒトラアにもつと試練を與へて、のちのち、ドイツのために立ち上せるため、なほ二年といふ月日を、ウイーンの花の下で、せつせと働いてゐる虫にしておかれたのだらう。しかし、その頃、バルカン半島にそろそろ風雲が急になつて、やがてはヨーロッパ全土の嵐となる氣色がきざしてゐた。そして、ヒトラアは、ドイツのために、ウイーンのとときから握つてゐた繪筆を投げて、この嵐の中へとびこんだのだから、どうしてもバルカンの風雲とはどんなものか述べなくてはならない。

ヨーロッパの火薬庫

古來から、バルカン半島はヨーロッパの噴火山とか、火薬庫といはれてゐるが、それはどういふわけだらう。

ちよつと、ヨーロッパの地圖をひらいてみてもそのわけはすぐ領ける。だいたいヨーロッパ大陸には、スカンデナヴィヤ半島、イベリヤ半島、それからイタリ半島、それにバルカン半島と四つの大きな半島が海に向つて伸びてゐる。その中で、アジア大陸にちよつと股をひろげれば片足を下ろせさうな位置にあるのがバルカン半島だ。

そしてさきの三つの半島が、ひとつか二つの國しか持つてゐないのに、バルカンときたら、ヒトラアが鞆ひとつ持つてウイーンに上つた頃には、八つの國に分けら

れてゐる。つまり半島の突端にあつて、昔から地中海の潮風を浴びてがんばつてゐるギリシヤ。一時ほど大きくはないが、自國からボスホラス、ダーダネルスの二つの海峡でつながれて、ギリシヤの北にずうつと割りこんでゐるトルコ。さらにトルコの北にはブルガリヤ、セルビヤ、モンテネグロがあり、一番奥のルーマニヤはロシアとブルガリヤのあひだにはさまつてゐる。イタリーとはアドリヤ海で向ひ合つてゐる國に、モンテネグロ、それから、オーストリ・ハンガリがそのアドリヤ海に出たがつてゐるのを邪魔してゐるやうな、ボスニヤ、ヘルツェゴビナのトルコ領がある。

これらの小さい國が仲よくしてゐるのならいゝが、何かといふと、忽ち角を立てる。しかも、いづれの小國も一人立ちは出来ないで、どこかの強國にすぎらなければならぬといふのだから、バルカンの國々にちよつとでも戦争の火の手があがればどつとばかりに、ヨーロッパの強國が馳せ參することが分るだらう。この強國とい

ふのが、一方ではロシアであり、もう一方ではオーストリ・ハンガリとその後ろ立になつてゐるドイツである。

一八二七年に、ロシアはイギリス、フランスと共同して、バルカンの王といつて威張つてゐたトルコを敗り、ギリシャを獨立させた。それから、凡そ五十年たつてバルカン王の冠がやうやく傾き、トルコ領のボスニヤとヘルツェゴビナにスラヴ人の叛亂が起きると、このときとばかりロシアは立ちあがつて、有名な露土戦争となつた。その結果ロシアは大勝して、それまでトルコの治下にあつたスラヴ系の民族に、セルビヤ、モンテネグロの二國をつくらせる。また、同じくトルコ領であつたブルガリヤ人の土地に、スラヴ系のブルガリヤ公國を立てゝやる。かうして、ロシアはバルカン半島を大ロシア主義の旗の下になびかせようとした。ところが、ロシアがバルカンから地中海へ出るやうになつたら、せつかくスエズ運河が出来て、地中海からインドへと近道がひらけたのも、いつ追はぎが出るやうになるかもしれない

い、これはうつかりしてはゐられないと考へたのがイギリス。それに加つて、その戦争には自分の國も兵隊を出してゐるし、この機會を失つたら、いつ海へ出られるか分らないと考へたのがオーストリ。この二つの國が主となつて、大ロシア主義のあばれまはらうとするのを押へ、オーストリは、ボスニヤとヘルツェゴビナの行政は任せてもらうぞとロシアに約束させた。

これが一八七八年のベルリン條約のひとつで、ロシアはせつかくトルコに大勝しながら、もう少しといふところで凍らない海に出ることが出来なかつた。そこで、苦んで考へ出したのが、東アジアの遼東半島へ、向つていつたらどうかといふのである。こんなわけで、のこのこと出て來たロシアの熊は日本軍によつてひどい目にあつて、また雪の山へ引返さなくてはならなかつた。

これを隣りで眺めてゐたオーストリは、これはいゝ機會だと手を叩く。はじめから、ボスニヤとヘルツェゴビナは自分の領地にしたくてたまらなかつたのだが、う

つまり、そんなことを言ひだしたら、トルコが反對して、どう騒ぎ出すかも分らない。ひいては、そんなことで、ロシアがさらに手を伸してくるかもしれないものではない。それに國內のドイツ人がそれでなくても、スラヴ民族のわがもの顔に肚を立てゝゐるのに、もしその人數が併合によつて、いつぺんにふえたら何といつて騒ぐだらう。それやこれやで、委任管治といふことにして、一時を過ぎしてゐたのだがヨーロッパの強國ロシアは日本に大敗して、當分もう戦争は出ない。おまけに、もとの持主であるトルコに青年トルコ黨といふのが起つて、國の中がごたごたしてゐるから、これまた外に事を構へる氣力が無い。それにオーストリ國內では、セルビヤ人やクロアート人が團結して「セルビヤ國に行かう」といふ運動をやりだしたのだから、ぐづぐづしてゐると大へんなことになる。

一九〇八年十月、こんなわけで突然、オーストリ・ハンガリ國はボスニヤ、ヘルツェゴビナを併合すると發表した。トルコは大不満である。ロシアは勿論かかん

になつて怒る。同盟國のフランス、イギリスもおもしろくないと考へたが、どうに
もしかたがない。結局、オーストリと戦さをするといきまいてゐるセルビヤの國
をなだめて、兩州併合を承認させることにした。それで、とにかく事は治つたが、
その當時、セルビヤ國のバシツチ首相が

「セルビヤは國際會議に訴へてみても、何も得るところがないから、そんなことは
しない。また、戦争をやるにしても、どこの國も助けてくれないから、それもしな
い。しかし、ボスニヤ、ヘルツェゴビナはいつまでたつても、なほらないオデキで
ある。」

と言つたとほり、このオデキをひきうけたオーストリは、黴菌がこゝからはいつ
て、つひに亡んでしまふのである。

ヒトラアがオーストリ國內のスラヴ族は、どうしてかうも勢ひをまして行くのだ
らうかと思つて、調べたところはこんなものだつた。

「こいつは、いつかきつとセルビヤがオーストリに仇をとるにちがひないぞ。」

とそんなことがぼんやりと考へられたが

「いや、しかしフェルヂナンド大公は大のスラヴびいきでゐられるから、そんなこともあるまい。」

と考へ直した。

愛するリューゲル市長がなくなつてからも、ヒトラーはウイーンにとまつて、こつこつとポスターなどを描いてゐる。もうハニツシュと一緒にやつてゆかないで、自分で、いろいろな商店やら、方々の新聞社に持つてゆく。すると、そここゝで、世間話などがもち出されるが

「いよいよ、バルカン戦争がはじまりますかね。」

「日露戦争が終つてからまだ六年にもならないのに、また戦争ですか？」
などゝいふ話がだんだん多くなる。

といふのは、この頃、トルコの青年トルコ黨がマホメット五世をいたゞいて、大いに昔のトルコの國威を回復しようと企てゝゐた。それはよかつたのだが、バルカン半島のトルコ領にゐる各民族をすべてトルコ化しようとしたのだから、昔からここにゐて獨立したがつてゐるアルバニヤ人がまづ反亂を起す。それから、マケドニアのギリシヤ人、ブルガリヤ人、セルビヤ人を押へようとして、トルコ人をたくさん割りこませたのだから、彼らは怒つてトルコ人と喧嘩をする。それでブルガリヤ人の凡そ百八十人ばかりが虐殺されたのみか、セルビヤ人の數百名といふものが、トルコ兵に怪我をさせられたり、誘拐されたりした。

いくら小國といつてもこれではだまつてゐられない。そこで、ブルガリヤはさつそくトルコに戦ひを開かうとする。ギリシヤもともとトルコに恨みがあるから、ブルガリヤに味方する。また、セルビヤがそれらと結んで立ち上るのももつともだが、こゝに、モンテネグロも、トルコ討つべしといつて同盟に加つたのは、オース

トリがボスニヤとヘルツエゴビナを併合したとき、同民族の悲しみそこにありと、
攻守同盟みたいなものをセルビヤと結んだからである。

こんなとき、ちやうど一九一一年九月のこと、アフリカの北でイタリがトルコと
戦争をはじめた。なにしろ、トルコはまへにロシアに敗れたが、それでもなほ強い
といはれてゐたから

「これで、イタリがトリポリにて（北アフリカにあつて、今のイタリ領リビヤにあ
る町）大勝ときたら、おさまりがつきませんよ。」

とウイーンの人々は噂してゐた。

ヒトラアはこんな話を聞くと居ても立つてもゐられないやうな氣がしてたまらな
い。なせといつて、もし、トリポリでトルコが負けたら、いつせいに反トルコ同盟
軍が立ち上るにちがひない。そして同盟軍がトルコを敗つたら、どうなるだらう。

セルビヤ人はじめスラヴ民族の意氣は大いにあがつて、オーストリ内のスラヴ人も

ドイツ人なんかに負けてたまるものかとますます結束を固くする。

（オーストリはオモチャの積木だ。いつ、風が吹いて、すつかりくづれるか分らないと思つたが、それも目のまへにせまつて來たやうだ。僕はぢつとしてはゐられない。僕たちドイツ人はどうなつてゆくだらう。あゝ、祖國ドイツよ、なせ僕たちを救つてくれないのか。オーストリをドイツが併合したら……うん、そんなものは待つてはゐられない。よし、それでは、僕が出かけてドイツに合併するぞ。）

つひに、ヒトラアはドイツに行くことに決心した。それもドイツの有名な畫家アルブレヒト・デュラアなどの繪が見られる、そして美しいドイツ建築の眺められる古い町ミュンヘンへ行くのである。

ミュンヘンにかへる

心のふるさと、ミュンヘン！

一九一二年の春、やうやくヒトラアはドイツで四番目に大きいミュンヘンの町にやつて來た。それはウイーンなどゝちがつて、どここの土地から來たか分らぬやうな人間なんかひとりもゐない。みんな肚からたのしさうなドイツ語の發音を澄んだ高原の町の空氣にひびかせてゐる。そこへもつてきて、そのドイツ語たるや、ヒトラアが生れたところのブラウナウ訛りとほとんどかはりがないのだからますます愉快である。

それにまた、ミュンヘンの町を飾つてゐる大寺院や、博物館、バイエルン王國の宮殿といった美しい建物は、寫眞や繪などによつてよく知つてゐたから、久しぶりで歸つて來たところのやうだ。そして、それらの建物にうつとりとした目をちよつとでもそらすと、ドイツのアルプスの山々が、萬年雪をいたゞいて、あるひは塔のやうに、あるひは鋸のやうに、目にはいつてくる。それこそ、祖國ドイツのいつま

でたつても變らぬ姿を物語つてゐるものではないか！

ヒトラアは心もかるく

「ミュンヘンを見ない者はドイツを語ることが出来ない。ミュンヘンを見ない者はドイツの藝術を語ることが出来ない。」

など、いふ古い言葉をつぶやきながら街を歩いてゐる。ときどき、ビヤホールのまへに出ると、そこから、世界一のいゝビールと評判をとつたミュンヘン・ビールで元氣をつけた市民たちの暢氣な叫びが聞えてくる。

「たのしい町だなあ。」

とヒトラアは思はず叫んだ。しかし、こゝでも、彼がポスターや誕生日のカードを描いたり、建築製圖を引いたりして暮す生活はちつとも樂ではなかつた。それでも、いつか、このたのしいミュンヘンで成功することを考へると、パンの苦しみなんかなんでもない。

だから、もし、世界がすうつと平和だつたら、きつと、アドルフ・ヒトラーといふ立派な建築家がひとり出来あがつたわけだらうが、ヒトラーが、ミュンヘンにやつてきたその年のうちに第一次バルカン戦争がはじまつて、ヨーロッパ各國の市民たちをぎよつとさせる。イタリに負けたトルコの弱いことが分つたので、まへに言つたバルカンの四國が立ち上つたのだ。そして一九一三年の五月、トルコはまたさんざんに敗けてしまふ。それで戦争はすんだかと思ふと、こんどは勝つた同志のあひだに土地の分配でもめごとが起り、その年のうちに、ギリシヤ、セルビア、モンテネグロ、それからルーマニヤが四方からブルガリヤを攻撃して、たちまちブルガリヤが降参した。これが第二次バルカン戦争といふのだが、まへに負けたトルコ、それからあとに敗れたブルガリヤは兩方ともドイツに親しい國である。いはゞドイツ側が小さくなつて、そのかはりに同じスラヴ族のロシア側が榮えやうといふのだから、ヒトラーは建築の本ばかり勉強してゐるわけにはゆかなかつた。

「ドイツはこんな弱い國ばかりと握手してゐて、それでいゝのだらうか？　いつたい同盟とはどんな意味を持つたことだらう。」

といつたわけで、外交のことを書いた書物などを仕事机の上にひろげるやうになる。そんな本を五六冊も讀まないうちに

イ、自分の國が他の國と同盟を結ぶのは、さうすれば自分の國の前途が安全になると考へるからである。

ロ、また他の國にとつても同様である。

ハ、つまり、同盟といふのは（興へて、貰ふ）ものであり、（貰つて、興へる）ものなのだ。

こんなことがたちまち分ると、さあ、オーストリのことが心配でたまらない。その頃、ミュンヘンのビヤホールでは、市民たちが、晩かれ、はやかれ戦争はやつてくるものとしてわいわいさはいである。

「なにしろ、セルビヤは二度戦争に勝つて、得意になつてゐるからなあ。」

「さうだとも、ボスニヤの仇を取らうと、オーストリをねらつてゐるわけだ。」

「さうなるとロシアとオーストリの戦争だね。」

「うん、ドイツとロシアの戦争だ。」

「いや、正確に言ふと、ドイツ、オーストリ、それから、イタリの三國同盟對ロシア、フランス、イギリスの三國同盟の戦ひだよ。」

「ぢや、ヨーロッパ戦争ぢやないか。」

「勿論！　そして、敵國のやつらはヨーロッパの三方から、わがドイツを包圍して首でもしめようといふんだらうが、どつこい、さうはさせないさ。ドイツには地中海に握り拳をつき出してゐるイタリがついてゐるし、それに大國オーストリがロシアを睨んでゐるからな」

ヒトラアはこんなことをしやべつてゐる連中のなかへ、思はず大どろを立てゝ割

りこむ。

「いや、ちよつと待つて下さい。そのオーストリはロシアを睨んでゐるのでなくてロシアに睨まれてゐるんだと言ひ直さなくてはなりません。」

「えつ、睨まれてゐるつて、それは何故だ。」

「それは、つまり、僕はつい最近までオーストリで暮して、とうとう、愛憎をつかしてこゝへやつて來たのですが、オーストリぢや、誰だつて、それが互解するつて考へてゐるのですよ。」

「でたらめを言つてはいかん。オーストリはドイツ民族の立派な國ぢやないか。それが亡ぶなんてもつての外だ。」

「いや、それがあなたは實情を知らないからです。ドイツ人の國だなんて、とんでもない。オーストリの半分は、まさにロシアの屬國になつてゐるのぢやありませんか。ためしにウイーンの議會のことを考へてごらんさい。ドイツ人の議員は全體

の半分もゐないのですよ。その議會がドイツのためにロシアと戦ふべしと議決すると思ひますか？」

「うーむ。」

頭から湯氣を立てさうに怒つた人たちも、ヒトラアに痛いところをつゝこまれると、考へないわけに行かなかつた。ところがこんなところへ、世界を上を下への大さはぎにした最初の一報がとびこんで來た。

オーストリ皇儲フェルディナンド大公暗殺さる

一九一四年六月二十八日、大公殿下並に同妃殿下はボスニアに於けるオーストリ國軍の大演習を御統監あそばされるべくサラエヴォ市に御成りの折一兇漢の狙撃にあひ、御落命あそばされた。犯人はすぐ逮捕され、目下訊問中である。

この號外を手にしたヨーロッパの國民たちはハツとした。

「これはひよつとすると戦争だわい。」

ヒトラーの出征

世界大戦はじまる

「これはいよいよ戦争だ！」

ミュンヘンの町がこんな叫びにあふれたとき、勿論ヒトラーも、戦争になると考へた。しかしふと

「もし、フェルチナンド大公の下手人がドイツ學生だとしたら……それもあり得ることだ……どうなるだらう。」

といふ想像がわいてくる。ところが、ボスニヤからやつてきた第二報でもつて、ヒトラーの獨言はふきとばされてしまふ。犯人はセルビア學生で、その外にも五六

人あり、セルビヤの官吏までふくまれてゐるといふのだから、ミュンヘン市民の

「今日は」といふ挨拶が、そこで

「これから戦争ですね。」

といふのにかはる。

「セルビヤ側ではフェルディナンド大公がセルビヤの戦勝記念日に、うらみのボスニヤで大演習をみをなはさうとなされたのがいけないといふものがありますよ。」

「よくそんなことが言へますね。怪しからんぢやありませんか。かうなつた以上、もう斷然セルビヤ膺懲すべしです。」

「しかし」とヒトラアはこの會話の仲間にはいつて「私もそれに賛成ですが、オーストリが戦争をはじめるので、私はほつとしてゐるのです。これがドイツからはじめれば、オーストリ國內のスラヴ族は何といひ出すか分りませんからね。」

「そして、ドイツはつひにロシアを叩くつてわけですね。」

市民たちはかう言つて、勇氣りんりんとしながら開戦の報せを待つてゐた。

一方、オーストリ國民のあひだには、セルビヤ打つべしの叫びがあがる。セルビヤ人の議員がなぐられる。セルビヤ公使館が彼らによつて石を投げこまれる。セルビヤ政府はオーストリ人の脅迫狀を何十通か受けとる。オーストリの國內はこんな風に上を下への大騒ぎなので、政府も時日を延ばしてもゐられないから、ドイツとも打ち合せて、いよいよセルビヤをこらしめることになり、七月二十三日といふ日に最後通牒をセルビヤの首府ベルグラードに送つた。

かうなるだらうと待つてゐたセルビヤ政府は、さつそくロシアの助けを哀訴する。それから、イギリスに向つて、オーストリを引きこましてくれと嘆願する。そこで、ロシアとイギリスは、フランスやイタリを誘ひ、それからドイツにも話をして、ヨーロッパの強國のまとまつた意見をつくりあげ、それでもつて、オーストリを引き下らせようとかけづりまはる。

しかし、ドイツとしたら、前々から、イギリス、フランス、ロシアの三國が握手して、だんだんと、いはゆる「鐵の輪」をもつてドイツを締めつけようとしてゐるのを知つてゐるから、今こゝで、うつかり、イギリスやロシアの相談にのつたら、あとでどういふことになるか知れたものでない。いつそ、今こそ、セルビヤ對オーストリアの喧嘩を機會にして、その「鐵の輪」にがんと一撃加へてやるはうがいい。と考へたので、イギリスがあるひはロシア、ドイツ、フランス、イタリの、あるひはロシアを除いて、イギリス、ドイツ、フランス、イタリの四國會議に誘つたのをみんな斷つた。

この間に、ベルグラードに駐在してゐるオーストリア・ハンガリ國公使は、二十五日、セルビヤ首相兼外相のバシッチから、回答を受けると、それとかねて本國から來てゐた訓令とを引き合はした上、バシッチ首相が歸つてから五六分とたゝないうちに、國交斷絶の公文をセルビヤの外務省に送つたのである。それから、三十二

分たつたのち、公使館をたゝんだオーストリ・ハンガリ公使がベルグラードの停車場にあらはれた。

國交斷絶のしらせがベルグラードからペテルスブルグにとぶと、ロシアの外務大臣のサゾノフはびつくりして

「今度こそ戦争です。あゝ、恐しいことになつた。」

とフランス大使のバレオローグに叫ぶ。自分たちのはうから、いはゞ戦争をしかけておいて、今更、恐しいも聞いて呆れるが、それから二日後、といふと、一九一四年七月二十八日、いよいよ、オーストリはセルビヤに宣戦を布告して、ベルグラード攻撃の火ぶたを切つた。

これを見たロシアは三十日、十六個軍團を動員し、翌三十一日には、ロシア軍に總動員令が下る。その動員を中止しろと、最後通牒をロシアに送つたのち、八月一日、つひにドイツは立ち、ロシアに宣戦をする。

同日、フランスとベルギーは動員した。

越えて同月三日、前からロシアと行動を共にすると聲明してゐたフランスに對しドイツは宣戰する。それとともに、ベルギーがドイツ軍のベルギー領通過を拒絶したので、ドイツ軍はベルギーに雪崩をうつて進撃した。

四日、ドイツがベルギーに宣戰布告すると、イギリスは今さら手遅れになつた、ベルギーの中立を尊重せよといふ最後通牒を出したり、あはて「イギリスはドイツと戰爭状態に入れり」など、宣言した。

ついで六日、オーストリがロシアに宣戰すると、それを眞似したやうに、セルビヤがドイツに宣戰布告をする。

それからのち、しばらくして、十月二十九日、トルコ艦隊は、ロシアの黒海沿岸を砲撃し、ロシアの軍艦一隻を沈めた。それがとりも直さずドイツの味方に立つことゝなつた。トルコがどちら側につくかは各國の注視の的となつてゐたが、さきに

トルコが注文した軍艦二隻を狡いイギリスが何とかかんとか言つてつひに引渡さなかつたことが、イギリス側に及向ふ動機となつたわけだ。

トルコが、ドイツ側になつてから凡そ一年のちブルガリヤも味方となつた。

これでドイツとオーストリの味方はトルコとブルガリヤとなつたが、これに對し敵にまはつた國はちよつと數へ切れないくらゐ次々にドイツ側に宣戰する。

もともとドイツ、オーストリと三國同盟を結んでゐたイタリがオーストリに於ける失地回復問題で、イギリス側に立つて參戰したのをはじめとして、ルーマニヤ、それから大西洋をへだてたアメリカ、パナマ、キューバ、ブラジル、グアテマラ、ニカラガ、コスタリカ、ハイチといった中南米の國々、さらに日本、支那、シヤムといふ東アジアの國々が加り、サライエボの三發のピストルの彈が、かうして地球上の國々をあげた世界戰爭となつた。

いよいよ開戦だ！

ドイツの町々では、若い者が軍服にきりつと身を固めて元氣よく戦場に向つた。

それを送る人々は手に手にドイツの三色旗を振りながら

「勝つて歸つて來い。お前の未來の花嫁がそれを祈つて待つてゐる。」

と口々に叫んだ。東へ行く汽車も兵隊でいっぱいだった。西へ行く汽車も兵隊の顔が鈴成だった。小さい村の人々は、夜中、ふと、勇しく走つてゆく軍馬の蹄の音に目を覺して、床の上に起きあがり、十字を切つた。

ヒトラアが宣戦布告の號外を見付けたのは、ミュンヘンのある電信柱の下に集つた、いはゞさゝやかな集會に加はつたときである。床屋のおちさんも、パン屋の小僧も、それから會社員も

「いよいよやりましたね！」

と互ひに顔を見合せる。

「さうです。これ以上、ドイツは黙つてゐることは出来ませんからね。」

とヒトラアが思はず力むと、みんなは

「さうだ、さうだ！」

と賛成した。

「そしてまた、今こそ大ビスマルクが始めた大ドイツ建設完成のいゝ機會ですよ。」

ヒトラアはかう叫ぶと、ちつとしてはゐられなくなつたので、みんなが「賛成、

賛成」といつてゐる聲をあとにし、廣場の群集に向つてかけ出した。前にも話したが、子供の時から、戦争が好きで、いつかは祖國のために身も心もなげうつてみたいと考へてゐたのだから、人一倍、勇み立つたのも無理がない。

そこで八月三日、ドイツがフランスに宣戦したとき、いよいよたまらなくなつて

當時のバイエルン國王ルードウィッヒ三世陛下あてに出征願書を奉呈した。

「謹んで陛下に申し上げます。不肖こと御領下ミュンヘンに住むつまらぬ繪描きでございますが、血の正しいドイツ人であること、ドイツの國のためには身命もこれといとはぬことは神に誓つて申し上げます。過日、不肖ことオーストリ國籍者なるにより、オーストリ領、ザルツブルグにて徴兵検査を受け、不幸にも不合格となつたものでございますが、只今は當時とは比較にならぬほど強健となり、また、此の度の祖國危急をまへにして何者にも不肖が祖國の愛に燃ゆる心は勝るものでございます。何卒、御慈悲をもつて、陛下の一兵に加へられますやう、こゝに伏してお願ひ申します。云々」

これを讀んで、係官もきつと感心したのだらう、ヒトラアのところへはその翌日許可書が下りた。慄える手でその封筒を切ると、希望どほり「バイエルン聯隊に即刻出頭せよ」とある。

「あゝ、神よ！」

と叫んだが、そのあとが續かなかつた。あんまり嬉しかつたので、立つてゐることも出来なかつた。しばらくしたのち、氣がつくと許可書を握つたまゝ、床の上で土下座をしてゐるではないか。

「よし、いつまでかうもしてゐられぬ。」

叫ぶと心も軽く立ち上ると、繪筆を銃劍に持ちかへるために家をとび出した。

そして五六日もたてば、豫備歩兵第十六聯隊の立派な新兵である。仲間といふとヒトラアみたいな志願兵と、それから豫備兵で、髭を生やした大人もあれば、十六七の少年もある。それが並んで、點呼をうけると、みんな元氣よく返事をした。その後

「ハンス・ケーラア、おまへの元の商賣は何か？」

と下士官が質問する。

「はつ、肉屋であります。」

「さうか。すると、今度は銃だけ道具がふえたわけだな。」

「さうであります。」

みんなは口を開いて笑つた。こんな工合にして、ひとりひとり聞いてまはつた末つひにヒトラアの番になる。

「アドルフ・ヒトラア、おまへのは何か？」

「はつ、廣告圖案であります。」

「廣告圖案といふと、つまり繪描の部類か？」

「はつ、さうであります。」

「さうか。今度の繪筆は少々重いな。なにしろ、彈がとびだす筆である。おまへ大丈夫か？」

「はつ、自分は大丈夫であります。早く、新しい筆で描かして下さい。」

兵隊たちは（我意を得たり）とばかりにハッハと笑ひこけた。そして、この銃で敵を撃つ練習をしたり、いくら歩いててもへたばらないやうに行軍の演習をやらされた。

ちやうど、この頃、イギリスのロンドンでも、このやうな若い愛國者たちがホース・ゴート練兵場に出來たバラックに押しかけて、そのまはりに蟻のやうにたかりながら、キツチナー軍に参加するため我先きにと名前を登録してゐる。イギリスはもともと、戦争になると志願兵を募集したのだから、それは當りまへだが、フランスのバリでも、それからロシアのペテルスブルグでも、ドイツのベルリンやミュンヘンのやうに、それぞれ若者が祖國のために兵隊を志願したのである。

八月一日、ドイツとこれらの國と戦ひがはじまると、なにしろ、ドイツ軍は「フランス兵を山鶉のやうに潰してしまふだらう。」

と世界の國々に評判されてゐたし、またシュリーフェンといふ偉い作戰家が出て

ヨーロッパ戦にはあらかじめ戦略を立て、おいたのだから、向ふところ敵なしといふ状態である。ドイツの大本營は、つぎつぎに、ドイツ軍の大戦果を發表して、それで落着きはらつたものである。

八月十一日、わがドイツ軍はベルギー領リエージュを占領せり。(西部戦線)

八月十七日、イギリス陸軍フランス領に上陸す。されど、わが軍の大進撃によりベルギー政府は首府ブリュッセルを捨て、アントワープに逃亡せり。(西部戦線)

八月二十日、わがドイツ精銳部隊はつひにブリュッセルに入城せり。(西部戦線)

八月二十九日、ヒンデンブルグ將軍の指揮せるわが第八軍團は、東プロシヤのタネンベルクに於て、サムソフ將軍麾下のロシア第二軍を全滅せり。(東部戦線)

八月三十一日、わが軍はイギリス、フランス聯合軍を攻撃し、フランス領アミアンとヴェルダンを結ぶ一線に進攻し、目下急追中なり。(西部戦線)

九月三日、わが精銳はギープ、シャトオ・チエリを抜き、さらにマルヌ渡河に成

功し、パリまで餘すところ四十キロの地點を猛攻中なり。フランス政府はパリを逃亡し、ポルドオに移れり。(西部戦線)

こんな華々しい勝利の公表があるたびに、リスト聯隊の若者たちはやきもきた。つまり、リスト聯隊長の下にあるヒトラアたちは口々に

「早く、戦争に行かないと、パリが陥落してしまふ。さうなれば戦争は終りだからなあ。僕たちはいつやつてもらへるのだらう。この腕が鳴つてよう。」

と言つて平手打ちのいゝ音を立てゝゐる。

十月半ば、いよいよリスト聯隊に出動命令が下つた。兵隊たちは三ヶ月ぐらゐしか教練をしてゐないが、胸は勇氣でふくらんでゐる。彼らは足音高く行進して、軍用列車へ乗りこんだ。もう行先は分つてゐる。誰が書いたのか知らないが、ヒトラアは、ひとつの貨物車、といつてもそれに兵隊たちが詰めこまれるのであるが、その箱に

「リージュを越えて、パリへ乗りこむ。ドイツ萬歳！」

と白墨で大きく書いてあるのを発見したとき、感激の拳にぐつと心を掴まれた。

タンネンベルクの大勝利

さあ、それから、ヒトラー二等兵は西部戦線に行つて、どんな戦さにぶつかるとらう。

その話をするまへに、せひ、東部戦線におけるドイツ軍のタンネンベルク大勝利について聞いてもらはなくてはならない。なせかといふと、その會戦には、ドイツ軍にひとりの英雄があらはれて、あとあとドイツになくなくてはならぬ人物になつたからである。

一九一四年の世界大戦にあたつて、ドイツ軍が取りあげた作戦、つまりシュリー

フエン計畫といふのは、もとはといへば普佛戦争のときの參謀總長であつた大モルトケのフランスとロシアを同時に打ち敗らうとする作戰から來たものである。それはまづロシアを敗つてから、フランスに當らうといふのであつたが、モルトケのあとに參謀總長となつたヴァルデルゼーは、モスコウまで攻めいつて失敗したナポレオンの戦さを參考にして、夏の陣であつたならロシアを先にし、冬の陣であつたらフランスを先にするといふ作戰を立てた。

ところが、三代目のシュリーフエンは、大モルトケの作戰とは全然反對な作戰を計畫する。そのわけは、普佛戦争で敗けたフランスが、どうしても仇をとらうと戦備をおさおさ怠りなかつたからである。それ故、いつ戦争がはじまつても、主力を西部戦線に送つて、北部フランスとベルギーを抜いて忽ちパリに突入し、フランスに手をあげさせてから、東部戦線に向かはうと考へた。それには、まづフランス軍の前面ではアルサス・ロレエンで守り、ロシア軍が攻めてくる東プロシアでは、マツ

ール湖で食ひ止めておかなくてはならない。

シユリーフエン作戦は、今度の世界大戦でも用ひられた。當時一兵卒にしか過ぎなかつたヒトラアが全ドイツ軍の上に立ち、しかもマヅール湖でソビエツト軍の攻撃を食ひとめるかはりに、一時、ソビエツトと手を握つて（この方がどんなに徳であつたかしない）東部は全然心配なくしておき、あつといふ間に、バリに攻め込み、フランス軍を降参さしてしまつたのだ。しかし、三十年まへの世界大戦のときは、開戦當時の参謀總長、大モルトケの甥にあたる小モルトケがシユリーフエン作戦を使つた。それはいゝが「小」といはれてゐるだけあつて、彼は氣が小さかつたから、東部戦線のはうはそのまゝ用ひたが、西部戦線のはうは、同じバリ攻撃を目指しながら、アルサス・ロレンにわざと攻め込ませる手を使ふことが出来ない。

それはとにかく、西部戦線でドイツ軍がベルギーの首府ブリュッセルを目掛けて攻めいつてゐるとき、東部戦線では、ロシア軍總司令官ジリンスキー將軍のもとに

あつて、レネンカンブ軍がマヅール湖の北から、サムソノフ軍が南から、ドイツの東の守りを破らうとして進んでゐる。しかも、その兵力といふと、歩兵は三倍、騎兵は八倍にもなるてんでお話しにならない大軍である。いくらドイツ軍が強いからといつて、これではひとたまりもなく、それこそ山鶉のやうにひねられてしまふ」にちがひない。だから、ちよつとした一部の敗戦に出あふと、ドイツ軍の總司令官リトヴィツ將軍とヴァルデルゼ參謀長以下はもう悲觀してしまつて

「ヴァイスチュラ河に總退却だ。」

と弱音をふきはじめる。これには高級參謀として司令部にあつたホフマン中佐などが極力反對したが、リトヴィツ將軍はなにしろすつかり周章あはてゐるので、考へることも出来ない。卓上の受話機をつかんで

「すぐ援兵を送つて下さい。それでないと、ヴァイスチュラ河も危ないかもしれません。」

と大どろで叫んだ。そして両手で、頭を抱へながら部屋の中を行つたり來たりして（もうだめだ。もうだめだ）と呟いてゐる。

コブレンツの大本營では、電話の聲を聞いたモルトケ將軍がびつくりしてしまつた。しかし、まづ丹田に力をこめて、深呼吸してみると

（これはどうしても、總司令官と參謀長を更迭する必要がある。それにはと……うん、さうだ、リエージュ要塞を占領して皇帝から表彰されたばかりのルーデンドルフがある。ひとつ、あの男を參謀長にしてやらうと。してと、まだ總司令官の問題が残つてゐるぞ、うーむ。）

こゝまで來て、考へあぐんだモルトケ總參謀長は、八字髭をひねつてゐた手を離して、幕僚を呼び集めた。いくたりか退役將軍の名が候補にあげられたが、ひとり
の幕僚が

「ハノーヴァに住んでゐられるヒンデンプルグ閣下はどうでせうか。」

と言ひ出すと、モルトケ總參謀長は、また

「うーむ」

と唸る。こんどの「うーむ」は困つたときではなくて感心したときのである。

「閣下はいまだ健在でありまして、それに永い軍人としての經歷がおります。その上、何よりも、こんな大事の場合、何事にも動じない閣下の神経の太さが必要だと考へます。

「うーむ。」

三度目のは承知したときのそれである。

それで、カイゼルの御裁可があると、翌朝すぐ電報が打たれた。一刻を争ふ命令がなせ電話で行はれなかつたかといふと、ヒンデンプルグ將軍の家にそれがなかつたからである。しかし、ハノーヴァの町の人々さへあまり知らなかつたほど、つましい生活をしてゐたが、將軍はひたすら國家のお役に立つ日を待つてゐた。だか

ら、命令を受けとつたとき、ちやんと覺悟が出来てゐる。ところが出發するまでには十時間しかない。何くれとなく支度をするのさへ、大變なのに、退役中肥つてしまつたので、上衣やズボンのこゝかしこを擴げるといふのだから、老夫人は目の廻るやうに忙しかつた。しかし、これぐらゐのことが出来なくてはプロシヤ軍人の妻とは言へない。そして老夫人はまさしくその立派な模範であつたから、ヒンデンブルグ將軍をたゞ勝つことのみ考へて出征させることが出来たのである。

八月二十三日の夜、ヒンデンブルグ司令官とルーデンドルフ參謀長がドイツの東の守りに着いたとき、ホフマン中佐はさつそく自分の立てた作戰計畫を進言する。それはどんなものであるかといふと、レネンカンブ北軍にむかつて、騎兵と少數の歩兵を大部隊のやうに見せかけて配置し、主力をもつてサムソノフ南軍にあたり、一舉に包圍してこれを全滅させやうといふ大膽なものだ。

地圖のあちこちを指さしながら、自信たつぷりに説明したホフマン中佐に

「しかし」とルーデンドルフ參謀長は鋭い口調で「もし、サムソノフがレネンカン
プに助けてくれといつたら、レネンカンプはすぐさまわが軍の手薄を打ち破つて背
後に廻ることが出来るだらう。そしたらどうする。」

と言つた。すると、ホフマン中佐はキラリと眼鏡の玉を光らせながら顔をあげて
「私にはそんなことはドイツ軍にのみ行はれることであつて、ロシア軍では出来な
いことであると確信してをります。それにつき……」

ときつぱり申述べたが、それはこんなわけがある。

ホフマン中佐は日露戦争がはじまつたとき、カアル・アントン親王はじめ、ドイ
ツ將校たちが、日本側の觀戰武官になつたうちの一人である。アントン親王は、あ
る陣地で、鬚ぼうぼうのバンカラ旅團長に握手を給ひ、ぶつきらぼうの挨拶にびつ
くりなされたが、それとともに

「かくしてこそ、日本軍は強いのだや。」

と宣べられた。ホフマン中佐は日本が勝つたあと、ドイツに歸つて、ロシア側に従軍した仲間に

「どうしてロシア軍は敗けたのか。」

と聞いた。その答へにはいろいろあるが、ロシアの將校のあひだに喧嘩の流行はつきものであるといふのがある。中でも、レネンカンフ中將とサムソフ少將は敗けた腹いせに、士官學校以來の仲たがひも手傳つて、奉天驛まへで上になり下になりのかみ合ひをやつた。ホフマン中佐は、この話をそのまゝ聞き流してしまはずに凡そそれから十年といふもの絶えず犬と猿の動靜をうかゞつて來たのである。

「參謀長、二人はまだ仲良しにはなつてをりません。それについてはこの情報をごらん下さい。」

こんなわけで、ホフマン中佐の作戰がとりあげられ、しかも戦局は着々として思ひどほりに進んでゆく。ロシアの南軍はだんだんドイツ軍の包圍の中に陥り、サム

ソノフ軍はさかんにレネンキャンプ將軍に助けを求めて、無電を打ちはじめた。かつての犬は、このやうなロシアの危機にあつても、かつての猿と力を併せようとなつてゐた。ところが、二十六日の夕べになつて、ロシアのコサック部隊が馬に乗つて北から南へとまはり、それから、レネンキャンプ軍の一部がドイツ包圍陣の一ヶ所を攻撃しようといふ。この情報を偵察機から受けとつたドイツ軍司令部はルーデンドルフをはじめとして泡を食つた。しかし、このとき、日露戦争のときのわが大山總司令官のやうに、といつて、苦戦の報せを受け取つても、何事もない風で、迷犬になつたチンにサンドウキツチをやつたりしたかどうか分らぬが、とにかく、ヒンデンブルグ總司令官はいさゝかも騒がなかつた。

「まあ、やらうと思つたことをやらうぢやないか。」

そして、レネンキャンプ軍の一部が云々といふのは、あとで昂奮した航空兵の見あやまりと分つたのだから、この一言が、タンネンベルクの大勝利を左右したといつ

ても、言ひ過ぎではないだらう。三日のあひだ、猛烈な戦闘がつづいたあとで、二十萬のサムソフ軍は死んだり、あるひは捕虜になつたりした。全滅軍の司令官その人は自ら白髪を射つて、軍人らしい最後をとげてゐるのが間もなく森の中に発見される。そしてベルリンは救はれた。

これで、ヒンデンブルグ將軍はドイツ中にその名がとどろいた。間もなくドイツ軍の總司令官になり、後にはドイツの大統領とさへなつたのはこの功からである。そして、このヒンデンブルグ大統領から、ドイツの運命をその手に渡されたのが、外ならぬ、このときのドイツの一兵卒、アドルフ・ヒトラアなのである。

強くなるのはわけはない

さあ、それでは、ヒトラア二等兵は西部戦線に行つて、どんな戦さにぶつかるだ



ヒトリアア(左)がヒンデニアルグ元帥(右)からドイツの運命を託される

らう。

その話をするまへに、まだもう少し説明しておかなくてはならぬことがある。小モルトケがシュリトフェン作戦の大膽さが學べなくて、西部戦線では大事をとつた作戦を立てたことは、ちよつと前節で述べてある。「右翼をいつも強化しろ」と一代目が叫んだのに、その右翼にあたるベルギー方面の兵力を割いて、アルサス・ロレエンの方へ持つて來てしまつたので、右翼がフランス海岸に出て、そこからイギリス兵を追ひ拂ひ、たゞちにパリ包圍に向ふといふ作戦をするには兵力が足りなかつた。そのため、ドイツ軍がせつかくパリまで四十キロのところまで攻めこんだのに、聯合軍によつて、ぢりぢりと盛り返へされてゐる。そして、この結果、それから先四年といふものはつきりとした勝負がつかないで、いはゆる陣地戦といふものが續いたのである。

小モルトケ參謀總長はひどく頭を使つた上、作戦が失敗したので、がっかりして

しまひ、ファルケンハイン陸軍大臣がその椅子に腰かける。それは一ヶ月も前からさうなつてゐたが、十月十日になつて、カイゼルから、大本營晚餐會の卓の上で

「ファルケンハイン新參謀總長のために乾杯！」

と正式に任命された。

ちやうど、この頃である。リスト聯隊がミュンヘンの町から汽車に乗つて、ベルギーの西北部イーブル附近の戦場に向つたのは。ヒトラアたちはドイツが西部戦線で、どんなつまづきをやつたか知らないし、いや知つてゐたら尙更だが、たゞどうかして華々しい戦ひがしたいといふことばかり考へてゐた。

やがて夜行軍がはじまる。長い列のあひだにあつて、濕つばい霧を透かして見えるものは前を歩いてゐる仲間の影ばかりだ。それも敵が近くて足音を立てないやうにして行くから、ぼんやりした影繪を眺めてゐるやうである。ところが、だんだん夜が明けて、白い霧の中から十月の太陽がのぼるやいなや、小銃の音がパチパチと

聞えた。

「戦争だ！」

仲間の顔はいつせいにきりつとして、動作も突然眼が覺めたやうに活潑になる。敵の彈丸が近くに落ちては砂煙をあげる。ヒトラアが伏せの姿勢になると仲間もそれにならつて地面の上に腹ばふやうに見える。ヒトラアが立ち上ると、またみんなも立ち上る。大砲は空に唸る。機關銃は耳の中で鳴る。土煙の中を轉んだり立つたりしながら前進してゆくと、あつちの畠でも、こつちの林でも白兵戦だ。どちらが勝つたか、どちらが負けたか分らない。このとき、どこからともなく、ドイツ國歌が傳はつてきて、それがだんだん大きな聲になる。眼近かくなると、まさしく味方だ。しかも口々に

「勝つた！ 勝つた！」

と叫んでゐる。ヒトラアも、ある限りのこゑをあげて眞似をした。これが初陣だ

つた。

それから兵隊たちは

「俺はロンドンで一番乗りをやるぞ。」

「そんなら俺はバリの凱旋門を鐵砲かついで（ほれ、お通り）とくらあ。」

など、言ひあつた。が、前にも言つたとほり、兵力が少いせいとか、またはイギリス兵が案外強いせいとか、戦線はちつとも動かない。深い塹壕の中で彈をうつたり、食事をしたりする。イーブルのあたりは、ドイツ軍とイギリス軍との塹壕のうばひあひといつたぐあひで、兵隊とそれはいつの間にか大へん仲良しになつた。そのうちに、戦友がひとり倒れ、二人倒れてだんだん少くなる。それとともに、ヒトラアの心の中に、死といふ大問題が次第にもちあがつてくる。ある聲はさゝやくやうに（死ぬのはいやだ）と言つた。ところがもうひとつの聲は明るく勇しく（祖國のため死ぬ）と言つた。

ある日、いつもの通り塹壕の中で、戦友たちとハンゴウにスプーンをつゝこんで第一口をやらうとしたときだ。ある聲が

（アドルフ、逃げろ！）

と突然大どろで叫んだ。はつと思つた拍子に、ヒトラアは糧食のはいつたハンゴウを抱えて走り出す。それから少し何でもないことにおかしくなつて、止つたところ^{ちやうど}に胡坐をかきながら食事をしようとすると、空にあたつてばあつと光が指し、ものすごい音がした。泡食つて耳を塞ぎ、しばらくたつて、きよろきよろと見廻したとき、いつたいどんな光景が眼に映つたことだらう。さつきまで、たのしさうに笑ひながらスプーンを持つてゐた仲間がのこらずどこかへ飛んで行つてしまひ、そのかほりに實に大きな土の穴があんぐりと口を開けてゐるのだ。

（なんだ、死とはこんなものか。あつはつはは！）

そんなことで、それからヒトラアは死ぬことなんかちつとも恐いとは思はなくな

つた。

（どうせ一度は死ぬものだ。祖國のために死ねればこれにまさる名譽はないぞ、こ
ら、臆病もの！）

と昨日までの自分を叱つた。

フランス兵もまた、ドイツの大砲が恐しくて縮みあがつてゐたが、モオドウィ豪
膽將軍は、ヒトラアみたいな悟りを、自然にまたないで、弱虫兵を強い兵隊にした
記録を残してゐる。それはかうだ。さんざんドイツ軍の大砲に慄えあがつた兵隊に
その翌日、進めの號令をかけて、砲彈の落ちるところまで行かせる。そこで、止め
の號令をかけて、ゆつくりと廻れ右をやらせる。逃げた者は射殺だよと約束するか
ら逃げられない。ご褒美は何かと云へば、攻撃のとき外の者より二百メートルさき
まで前進が出来るといふのである。兵隊が、いや人間が強くなるのはわけはない。

一九一四年十二月二日、ヒトラアはウイッチエーテの戦闘で、ドイツの表彰文に

よると「英雄的行動」を示したことにより二級鐵十字章をもらつてゐる。それから同年十月には伍長勤務に昇進した。ところで、そのあひだに、戦線にはどんなものがあらはれたらうか。

フランス空中宣傳部

その年の夏のことである。

リスト聯隊の兵士たちがフランドルの塹壕の中で頑張つてゐるときに、奇妙な敵がすつとばかりにふところにとびこんできて、兵隊たちをすつかり周章てさせた。それは、いくら大きいものでも米粒ぐらゐしかない虱の一群である。ところが、そいつがところかまはずあばれると兵士たちはちつとも落着いてゐられない。引掻いてみても、叩いてみても、やつらは平氣の平左で、ますます、ごそごそと食ひ下つ



世界で有名なトット道路（自動車道路）
建設にまづヒトラア總統が土を掘る

てくる。これには流石の勇士たちも閉口した。それで、お天氣のよい日は、閑さへあれば誰も彼も虱退治をはじめる。

ある日、ヒトラアのある第三中隊がそろつてそれをやつてゐると、分隊長がやつて來て

「はゝう。やつとるな。それで少しは減つたか。」

と大きな聲を立てる。

「分隊長殿、戦友は減りますが、虱は毎日殖える一方であります。」

誰かゞこんなことをいつたので、皆は上衣をひつつかんだまゝげらげら笑つた。

ちやうど、このとき、ぶううんといふ音が空の中からひゞいてきて

「それ、敵の飛行機だ！」

とばかり、みんなは笑ふどころか、蜘蛛の子のやうに塹壕のへりにへばりつく。

ひときは大きく、頭の上で、唸つたのち、すぐさま飛行機はぶううんといふ音を立

てどこかへ飛んで行つた。ヒトラアは、そこで頭をあげると、青い空の中を、雪のやうなものが白く光りながら落ちてくるのが眼にはいつた。

それが、拾つてみると、黒、白、赤で色どられたフランスの宣傳ビラである。なにしろ、初めてぐめづらしいものだから兵隊たちは我勝ちに見ようとする。どんなことが書いてあるかといふと

ドイツの勇士たちへ

ドイツの勇士たちよ。諸君は塹壕の中で毎日暮してをられるが、それがどのやうにつらいものであるか、われわれも十分にお察し出来る。これからさき、何年戦争が續くかわれわれには見當がつかないが、それが終るまでは何にせよこのやうに苦しい塹壕生活が蛇のやうにながながと續くのである。

いつそわれわれは戦争は止めようではないか。現にわれわれの方にある諸君の仲間は傷もなほつて、南フランスの氣持のいゝ空氣の中で、うまい果物や野菜を食つたり、手輕に買へるうまい葡萄酒を呑んでゆうゆう自適してゐるが、彼らは言つてゐる。

（フランスの友よ。もし便宜があつたらわれわれドイツの戦友に傳へてくれ。僕は健在だと。そして、かつての塹壕生活に比べると、現在はまさに王侯の暮しであると。その上、何よりも、フランスの村人がみんなわれわれに親切にしてくれるのが身にしみてありがたいと。）

ドイツの勇士たちよ。われわれはお互ひに敵ではないのである。一時の昂奮をしづめてもとどほり仲善しにならうではないか。そして平和なたのしい暮をしようではないか。

フランスの友より

このやうにうまいことばかり並べてある。

「あきれたねえ。よくこんな嘘ばかり言へたものだ。」

「うん、その王侯の暮しといふのは針金の柵の中で空腹を抱へてうろつきまはるのだらう。なにしろ、フランス人はほら吹きだからな。」

「烏の勘左衛門か。カア、カア啼いてばかりゐて、人がゆくと逃げるつてやつだらう。」

「はつはつは！」

みんなが笑つてゐるとき、ヒトラアは誰よりもさきに眞面目な顔になつて

「おい、これを集めて、本部に持つて行かうや。」

とさけんで、ビラをまとめにかゝつた。

一九一四年からはじまつた世界大戦で、はじめて飛行機から宣傳ビラを撒布したのは、フランスで、その年の八月九日、つまり宣戦布告してから五六日しかたつて

ゐないといふとき、アルサス・ロレエンのフランス人に向つて投下してゐる。ドイツの飛行機はそれからほどなく、パリの上空から「降伏せよ」といふ宣傳ビラを撒いた。イギリスは十一月になつて、インド兵に對してドイツが撒いたビラに向つて食つてかゝつた宣傳ビラを投下したのがはじめてである。

それが一九一五年になつて、フランスには空中宣傳部といふのが出来る。一九一六年にはそろそろ偉力を發揮してきたが、大戰最後の年にはいると、ドイツ兵の塹壕はまさにフランス宣傳ビラの洪水といつたくらゐになつて、ドイツ兵のあひだにうまくひつかゝつた者が出てきたのだから、まことに油斷が出来ない。

フランスの空中宣傳部は飛行機ばかりで間に合はないと氣球なんかも使つた。宣傳ビラをそれにしぼりつけると、一本の導火索に火をつけて飛ばす。あらかじめ、火がだんだんと氣球に近づいてゆくのと、氣球がドイツの塹壕の上にさしかゝる時間とを合はしてあるので、氣球が爆發すれば、宣傳ビラはうまい工合にドイツ兵の頭

の上に降りかゝる。なほ、それでも間に合はないと、大砲の弾に宣傳ビラをこめてぶつばなした。

そして、宣傳ビラの文句も、ドイツ兵に降参をすゝめるものばかりではない。ドイツ軍の一致團結をこはさうとして、ヒトラアのあるバイエルン聯隊の中に撒布されるビラの中には

目覺めよバイエルンの兵士！

バイエルンはプロシアの奴隸だといつたら諸君は驚くだらうが、よく考へてみたまへ。今度の戦争で、ドイツはベルギー、セルビヤ、モンテネグロ、それからルーマニアを占領したが、バイエルンはそれでもつてどんな利益があるか？ また今まで、プロシアはこのことでバイエルンに何も約束してはゐないではないか。それなのに、バイエルンの兵士はプロシア兵

士の六倍も戦死者を出してまで勇しく闘つてゐる。さあ、頭を冷靜にして考へよう。何の目的でもつてプロシアの戦争に参加したか？ また何故プロシアのための戦争をしてゐるのか？

こんながある。それも一度や二度ではない。毎日の新聞のやうに讀まされるのだから、いつとはなしにバイエルン出身の兵士のあひだに、プロシアを憎むものが出てくる。ヒトラア一等兵がいくら

「プロシアがなければドイツがなく、ドイツがなければバイエルンだつてないのだ。」

とさげんでみても、その數は傳染病患者みたいにふえる一方である。

その上、ドイツが四面封鎖をうけて、國內に食糧が缺乏してくると、フランスの空中宣傳部は、このときとばかり「ドイツよりの手紙」と名付けて、この事情を書

いたビラをドイツの兵隊たちに空の上から配りはじめる。そんなところへもつてきて、日本には決してないが、そして今のドイツにだつてありはしないが、その頃のドイツの銃後から

「暮しが苦しい。」

と戦線に泣き言を書いてよこすものがたくさんあつたのだから、兵隊たちは「それぢや、フランスの宣傳はほんとうなのか。」

といふことになる。そして、ますます敵の宣傳に乗せられて、戦争にいや氣がさしてきた。だから、ドイツが第一次世界大戦に敗れたのは兵隊がまけたのではなくて、銃後がまけたんだといふものがある。われわれ、銃後の日本國民としてこれは注意しなくてはならない言葉であらう。

それはともかく、一九一五年といふのは、ドイツ軍が連戦連勝の年で、ポーランド、ガリツイヤ、リトアニアからロシア軍を追ひはらひ、セルビヤ全土を占領した。

そこで、一九一六年になると、フアルケンハイン總參謀長は「消耗戰術」といふのを考へ出した。それは、フランスの要塞ヴェルダンに總攻撃をして、フランスの部隊や武器をすつかり使ひきらしてやらう、さうすれば、フランスはすぐさま降参して、それで戦争の片がつくだらうといふのである。

ドイツ軍のヴェルダン總攻撃は二月からはじまつて六月までつづいた。兩方とも持ち出せる限りの大砲を据えつけたが、驚くなかれ、ドイツ軍が二千門、フランス軍が千六百門と數へられてゐる。これが、兩方からいつべんに彈丸をぶつばなすところを想像してみ給へ！ それはこれまでの地球上の戦争でもつとも猛烈なものだつたといはれてゐる。しかし、ドイツ軍はどうしても、ヴェルダンを抜くことが出来なかつたので、七月になると、こんどはフランス海岸寄りのソンム河に進み、英佛聯合軍を攻めることになつた。

ヒトラアのリスト聯隊では、この命令をうけると、ぶつぶつ不平を鳴してゐた兵

隊たちも、勇しく進軍した。ところが、このソンム會戦はヴェルダンのとくと優るとも劣らない烈しい砲撃戰である。敵と味方の死傷者がなんと百萬人を超えたといふのだから、もつてどのくらゐのものだつたかは察しられよう。そして、つひに、ヒトラア伍長勤務もそのうちの一人となつた。フランスの宣傳には負けなかつたが榴彈砲のとばつちに足をやられて、エルミーの傷病兵舎に送られる。それから、さらにベルリンの陸軍病院へ後送される身となつた。

銃後はどうか

屋根の上に、白の地から赤い十字を浮き出させた標識をつけた列車は、たくさん
のヒトラアたちをのせて、早く祖國へつれて行つてやらうと、とつとつと走つてゐる。それでも、ヒトラアたちの氣持は列車よりもずつと早く飛んでゆくので、ベル

ギーの首府ブリュッセルを通る頃から、氣の早い連中は

「ドイツはまだか。」

など、言ひ出した。だから、リエージュを過ぎて、いよいようちき國境だといふころには、手を吊つてゐる兵隊はもちろんのこと、足がまだよくなほらないヒトラアだつて、全部が全部といつてよいくらゐに窓から覗いて、一目も早く祖國が見たいと立ち上る。

「バンザイ、バンザイ！」

ドイツの山と、ドイツの川があらはれたとき、汽車の走る音は、わけもなく兵隊の叫びで消されてしまひ、その聲は野山を越えてどこまでとゞくか分らないくらいだつた。あゝ、なつかしの祖國、おまへは昔とちつともかはらなかつた。ヒトラアは眼に泪を浮べたが、髭を生やしておつかない顔した兵隊で、おいおいとこゑを立てゝ泣き出すものがあつた。しかし

「おい、泣く奴があるか。大の男のくせにみつともないぞ。」

と肩を叩くものもない。みんな生きて歸れるとは思はなかつたのに、突然、ド
イツの景色が、おまへたちは生きてゐるのだぞと知らせたのだから、誰だつて泣か
ずにはゐられなかつたのだ。ヒトラアたちはラインの清流を見たといつては泣き、
ハルツの山を眺めたといつて嬉しがつた。そしてベルリン郊外にあるペーリッツの
傷病兵舎にいれられたとき、白いベッドを眼のまへにして、またおいおいと泪に暮
れる兵隊がゐた。

「どうしたんですか。」

やさしい看護婦が肩に手をやると、泣きながら

「何から何まで、夢のやうなんです。塹壕の泥んこの中に昨日までゐたことを思ふ
と……」

と言つてゐる。いくら看護婦がすゝめても、ぐづぐづしてゐて、白いきれいなべ

ツドの主人公にならうとしない。ヒトラアは同じくベッドのわきでもじもじしながら、この光景を眺めてゐて

（無理もない。俺だつて、こんなにきれいな寢床には、もつたいなくてもぐりこめないでゐるのぢやないか。）

と呟いた。

ところが、赤い赤十字のマークをつけた白衣の生活に慣れてくると、ヒトラアは同じ白服をきてゐる仲間で、鼻がびよんとび出た小男がしきりにへんなことを言ひふらしてゐるのに肚を立てはじめた。どこの部屋にゐる傷病兵だか知らないが、はいつてくると誰彼の見境ひもなく大きなこゑでしゃべり出す。それもいゝが「僕たちは戦死しないですんだ仕合せものさ。」

「なせだい。」

と誰かゝ聞くと

「だつて、プロシアのためには死にたくないからなあ。」

「よせよう。フランスの宣傳ビラみたいなこと言つたつて、そりやあ古いぞ。」

「へん、僕の方がフランスのより本家本元なんだよ。よく商標に御注意あれといふところさ。つまり、僕の持論といふのは、バイエルンはフランスと握手して、プロシアを倒すべし。そして、バイエルン王國を建設すべしと言ふのでね。バイエルンのためを思へばこそだ。」

「大へんな愛國者だなあ。」

ヒトラアはベッドの中で聞いてゐて、こゝにもひとりフランスの宣傳にひゝかつたうかつ者がゐるわいと心の中で笑つたが、それから聞き捨てにならなかつた。

「僕はだからはじめからプロシアのために戦争したくなかつたのさ。」

「でも、君はお見うけすれば手を吊つてゐる。それも名譽の負傷だらう。えゝ。」

「これか」と小男はさらに何氣ない風で「これは、吾輩が自から鐵條網にひっかけて負傷したのさ。」

笑談にせよ、日本の兵隊だつたら、こんな恥づべきことを言ひはしない。ドイツの兵士だつて、今はそんな女々しいことを言ふ者はひとりだつてゐやしない。なにしろ、その當時は、ドイツの兵隊も、それからドイツの軍當局も、敵國の宣傳がどんなものであるかよく氣をつかなかつた。それが、この小男にとんでもないことをぬけぬけとしやべらせ、「さうか、さうか。」とその話をおもしろがつて聞くやうな兵隊をこしらへてしまつたのだ。

ヒトラアは、その男をやつゝけてやらうとしたが、生憎足がまだほんとでないのに氣がついた。そして

（しやべるやつもやつだが、どうしてまた處分しないで放つておくのだらう）
と、結局どうすることも出来ないで白い壁をぢつと眺める。

しかし、大切なドイツの國をぞんざいに扱ふものたちはペーリッツの病院の外にもいつばゐた。漸く歩けるやうになつて、ある日のこと、ヒトラアがベルリンへ出てみると、驚いたことにはどの通りでも市民が長い行列をつくつてゐる。すうつと並んでゐる顔はどれもこれもけはしい目つきで空の方を睨んでゐる。

「こんな何時間も並んでやつとありつくのがジャガイモなんだ。」

「政府はバンをどこにしまひこんだのだらう。」

「戦争さへしなければこんなことにならなかつたでせうにねえ。」

「さうですとも、あたしたちはバンさへもらへばいいのですからね。」

ヒトラアはどこへ行つてみても、市民たちが平氣でこんな不平を口外してゐるのにはなほのこと驚いた。そのくせ、オペラの前やレストランの入口では、戦争はどの國がやつてゐるのだらうといった涼しい顔をした連中が美々しく着飾つて群つてゐるのが眼についた。何かしら、ベルリンそのものが、肩を押しつぶすやうな重

荷になつてきて、ドイツの未來のことを考へれば考へるほどヒトラアの氣持はふさいでくる。

「ベルリンは救ひようがない。しかしミュンヘンは大丈夫だらうなあ。なにしろ僕の心の故郷だもの。」

足の傷がなほつてミュンヘンの原隊にいそいと歸へる。ところが、ミュンヘンはベルリンよりも救ひようがない。パンの配給切符が通りにちらばつてゐて誰も拾ひ手がなかつた。バターやジャムの闇相場は聞いただけで氣が遠くなるといふほどである。そして、原隊の空氣はベーリッツの病院と同じやうに（逃げて歸つてきた）者が威張つてゐる。その上、ヒトラアが肚を立てたのは、ユダヤ人が隊の中へはいつて來て、隊の仕事をかきまはしてゐる。バイエルン戰時××統制會社の重役の名を見るとユダヤ人ばかりだ。

（ははあ、なるほど、物資缺乏と闇相場の張本人がこゝにゐたわい。ドイツの敵、

どうするか覚えてゐろ。」

と彼は拳を握つたものゝ、ミュンヘン市はさがしくて誰もそんなことに耳を傾けようとはしない。それどころか

「プロシアは何もよこさないくせに、バイエルンから何でも取りあげようとする。」
といふ言葉が市民の口々に上つてゐる。

ヒトラアは何べん拳固をつくつたかしのない。しかし、ミュンヘンでもウイーンと同じやうに金のあるユダヤ人がちやんと新聞を牛耳つてゐる。物のないのはベルリンのプロシアが悪いのだと言つておけば、市民の非難はユダヤ人の方へはやつて來ない。おまけにドイツを亡ぼすにはバイエルンとプロシアを喧嘩させるに限る。

こんな老へで、どんどん宣傳するのだから、愛國の心だけしか持ち合せてゐないといつたヒトラアが、いくら逆立ちしたつて叶はない。

「何をなすべきか？」

といくら腕を組んで考へてみても、落ちてゆく思案の果ては

(ドイツがとにかく戦争に勝つよりほかに、ドイツは救へないだらう。よし。)

そこでヒトラーはさつそく第一線にあるなつかしのリスト聯隊へ歸隊さしてもらふやう願書をしたゝめる。

「小生の戦友が戦線にあるといふのに、小生ひとりミュンヘンに止つてはゐられません。」

その中でこんなことを書いたが、それから間もなく、フランドルの塹壕で銃をとることゝなつた。それは一九一七年三月のことである。」

宣傳戦に負けたドイツ

(どうしてもドイツを勝たしてやるぞ。)

といふ固い決心をふところに持つて、ヒトラアが戦線にゐる仲間のところへ歸ると、カルルやヨハンといった兵隊たちは

「やあ、愛國者！　またやつて來たのか。御苦勞だなあ。」

と聲をかけた。しかし、その口調がなんとなくまじめでなくて、ふざけたやうなところがある。

「いや、君たちこそ御苦勞だつたね。僕はわづかの傷で内地へ歸つたりしてすまないよ。君たちこそ眞の愛國者だ。」

「あつはつは、は、まあ、さういふな。愛國者。」

仲間にからかつてゐる気分があるなと思ふと、ヒトラアはぐつと頬にさはつてくる。

「僕はねえ、ドイツに歸つてみて、驚いたんだ。ユダヤ人の奴らがのさばりかへつて、ドイツをめちやめちやにしようとしてゐる。やつらの陰謀にぐうの音も出させ

ないには、ドイツはどうしても勝たなくてはならない。さう考へると、僕みたいな一兵卒だつて、ぐづぐづしてゐるときぢやないからね、急いで戦線にやつて來たのさ。」

「だから、われわれはみんな御苦勞ですなといつてゐるぢやないか。」

「御苦勞？　僕はちつとも苦にしないよ。喜んでこゝに飛んで來たんだもの。」

「ロシアのために、か。」

「いや、ドイツのためだ。」

「それぢや、そのドイツのために、不具になり來たのかい。」

「勿論、僕は不具となつても、またたとへ死んだつていゝ。」

「あつはつは、は、それはよかつた。諸君、こゝに立派な愛國者がゐます。恐らく彼のことではドイツのみか、フランス、イギリスも感心するでせう。」

かつとなつたヒトラアは、かう言つて笑つたヨハンの腕をとつて

「笑ふとは何ごとだ！」

とつめかける。そのとき

「食事給與、食事給與！」

と大きな声がひびいてくる。兵隊たちはヒトラアとヨハンの喧嘩をそつちのけにして走り出す。やがてのことに、また戻つてくると、手に手にパンの片を持つてゐて

「おい、また二度焼きパンに肉なしときてらあ。」

と、ぶつぶついひながら食ひはじめる。

ヒトラアはこれを見て、あはれみの心を浮べたが、また

（ドイツの宣傳部はなにをしてゐるのだらう。イギリスやフランスの宣傳がドイツの兵隊たちに祖國を忘れさせようとしてゐる危険に、どうして氣がつかないのだらう。）

と肚を立てた。

塹壕生活が三年もつゞくと、さすがのドイツ兵士も戦争に倦きてくる。そこへつけこんで、イギリスの空中宣傳は「何のために不具になるのだ」と言つて、またフランスのそれは「バイエルンよ、フランスと協力してスイスのやうな獨立國をつくらないか」と言つて、ともに、大砲の彈のかはりの思想戰の攻撃をつゞけてゐる。それなのにドイツの當局は「敵だつて三分の理くつはある」などといふことを兵隊にきかせてゐるのだから、ドイツの兵士たちがだんだん戦争がいやになつて行くのは全く無理はない。

（僕に宣傳をやらしたら、こんなへまはやらないのだがなあ……しかし、なんといつても、僕は無名の一兵卒だ。こつこつ働くより外に手はない。）

こんなことで、敵の宣傳のうまさに口惜しがりながらも、ヒトラアはまめに働いた。上官の靴を磨いたり、それから食事の用意まで何ひとつ手ぬかりのないやうに

氣を配つた。

しかし、このあひだも、敵の飛行機はあひかはらず宣傳ビラを投げこんでゆく。そしてあるとき、こんなのがあつた。それは（百萬のアメリカ兵がフランスに上陸する）といふ題があつて

「フアルケンハイン參謀總長がヴェルダン攻撃をやりそこなひ、それから、ルーミアが聯合軍に参加した時期をあてそこなつたので、ドイツ軍はヒンデンブルグ元帥とルーデンドルフ將軍が代つて指揮をしてゐる。なるほど、兩將軍はタンネンベルクで思はぬ勝利をものにしたが、政治のことは皆自分らぬから、一九一七年一月無制限Uボート戦などを宣言したのである。それによつて彼らはイギリスを早く参らせようと目論んだものゝ、かえつてアメリカの商船を沈めて、今やアメリカの肚立てた兵隊が、百萬もフランスに行くことを何らとゞめることは出来ぬのである。」

云々」

と書いてある。これでもつて、ヒトラアたちはアメリカが参戦したのを知つた。

「いやあ、アメリカ市民軍がでしやばつてきたなあ。ひとつやつらに泡を吹かしてやらうかい。」

「うん、さうだとも。しかし、百萬とくると相當だなあ。」

兵士たちが、こんなことを言ひ合つてゐるのを聞きながら、ヒトラアは敵の宣傳ぶりがたくみに味方の兵隊の心をつかまへてゆくのを口惜しがつた。しかし、ドイツの塹壕新聞だつて黙つてゐるわけではない。ヒトラアが戦線に歸つてからも

「ロシアのロマノフ王朝倒る」

「ロシア軍總崩れ」

「ドイツ、オーストリ軍カポレットに於てイタリ軍に大勝」

といふ工合に次から次と捷報をかゝげたので兵隊たちも大喜びである。アメリカの参戦などなんでもないと大いに勇氣が出て來た。

また、ヒンデンブルグ元帥を上にしたゞくドイツの作戰本部もさうで、殊に、一九一七年十二月、ドイツとオーストリと、ロシアの間に休戦が成立したときは、いよいよこれから東部戦線にある兵隊を西部のはうにまはして、一氣にフランスを潰してしまはうと、彈丸や兵隊を満載した列車を西部國境へ向けてどんどん走らせてゐる。

ところがこのときドイツの國內に大へんなことがもちあがつた。それは、百萬といふ労働者がもう働くのはいやだといつて軍需工場に大ストライキを起したのである。前にも話したがドイツの赤色團體は、ビスマルクのときからさかになつてきたが、世界大戰にあたつてはとにかくドイツのために戦はうと一時は改心したかに見えた。それで、ドイツの政府はうつかり彼らに氣を許したのがいけなかつた。そこへもつてきて、ロシア軍を内から破る目的で、作戰本部のルーデンドルフ將軍がロシア帝政から逃亡してスイスにあつた赤の首領、レーニン一派を放してやる。レ

ーニンたちはドイツを通つて、ロシアのベトログラード(今のレニングラード)に着くと、さつそく赤の革命運動をさかんにして、それでロシアは内から敗れ去つた。が、そこまでは、ドイツの作戦がうまくいつたものゝ、ロシアで赤が威張りだしたとなると、さあ、ドイツの赤色團體がちつとしてはゐられない。それまでに、ユダヤ人の金持たちは買占や悪宣傳でもつて、ドイツ國民を非國民にしてゐたのだし、さあよしとばかりに、労働者を煽動するユダヤ人に金をやつて、あばれさせたのだからたまらない。

幸ひなことに大ストライキは一週間で片づけられたが、そのあとが大事である。イギリスやフランスの空中宣傳は、このときとばかり、それを種にして、さかんにドイツの兵隊たちに向ひ

「ドイツの國民はもう戦争したがない。それなのに君たちは何故銃を取つてゐるのか。」

といったやうなことを書いたビラをばらまいた。塹壕の中では、どうしたらいいだらうと本気で考へる兵隊がたくさんになる。ヒトラアがいくら聲を大きくして、「ジューのいたづらだ」と叫んだところでもはや致し方がないくらゐだつた。

しかし、それでも、一度總攻撃の命令が下ると、勇氣をとりもどした兵士たちはわあつといふ歡聲をあげながら散兵壕からおどりだした。三月二十一日にはじまつて、六月には、ドイツ軍の先鋒はバリから八十キロのところまで進んでゐる。

さあ、フランスでは大さはぎである。いつたんボルドオに逃げだした政府はこのときまたバリに戻つてゐた。今度も逃げ出さうかといふことになつたが「虎」といふ渾名をもらつた勇しいクレマンソ首相は、このとき大きな聲で國民に警告して「バリを死守せよ。」と叫ぶ。

「それでバリが破れたら、ロアール河の線(フランス中部)に據つて戦ふ。もしロア

ール河が支へられなかつたらば、よし、ビレネの峻嶒（スペイン國境）に據つても闘ふ。われわれは最後の勝利を得るまでは斷乎としてたゞかふものである。」

といつて、國民を激勵したので、フランスの兵隊とともに死物狂ひでバリの前線を守つた。それで、ドイツ軍はそれからどうしてもバリに近づくことは出来ない。

そののみか、七月、八月にかけてだんだん退却をはじめ、その八月八日には、この戦争ではじめてあらはれた戦車がつひに威力を發揮して、ルーデンドルフ將軍が

「このアミアン會戦の日こそ實にドイツ軍にとつて暗黒の日ではあつた。」

と、ため息をついたほどの大敗北となつた。

これから先、十一月に至るまで、まづもつてイギリスやフランスの宣傳にしてやられたドイツ兵が、今度はほんとうに銃を捨て、ぞくぞくと敵軍に下り、その胸に飾つた多くの輝やかしい鐵十字章に泥をつけたのである。ヒトラアは、この總攻撃のとき、モンテイデイエ橋の功ではじめて一級鐵十字章をもらつたが、その後、

いつたいどんな災難がふりかゝつて來たか？　それは次節で話さう。

ドイツのために立上る

リスト聯隊の若者たちはちりちりと退却しながらも勇しくたゞかふことを忘れなかつた。しかし、八月にはいると、聯隊といつても名ばかりで、わづか數箇中隊にへつてしまひ、生き残つた兵士はそれこそ泥人形のやうに泥だらけになりながら、フランドルのイーブルのはうへよろめきつゝ退却した。イギリス兵は勢にのつて猛烈に撃つてくる。生き残つた連中とともに、ヒトラアはイーブルの南にあるウエルウイクといふ丘の散兵壕によつて一步もしりぞくものかとがんばつてゐる。このイーブルといふところは、四年間、イギリス兵とのあひだに取つたり、取られたりしたもののだが、はじめ、イギリス軍の一大隊に機關銃がたつた二挺しかなくて、ドイ

ツ一大隊につき十六挺の機關銃にやられてゐたのに、四年もたつと、イギリス軍は一大隊に八十挺も配るやうになつてゐる。そんなわけで、ダツ、ダツ、ダツとイギリス兵の攻撃は息もつけないくらゐである。進むことは勿論出来ないが、しかし、ドイツの兵隊は斷じて退却しないのである。

それだもんだから、十月十三日の夜になると、イギリス軍は毒ガス弾をうつてきた。ヒトラアたちの頭の上に、それはカンカンといふ音を立て、落ちてくる。

(へんな音だなあ。何だらう。)

ヒトラアはしつかり銃を握つてゐながら考へた。そのうち、吠える、叫ぶ、響く鳴るといつたやかましい戦場の物音の中に、あつちでも、ゴホン、ゴホン、こつちでもゴホン、ゴホンと戦友たちがはげしく咳をするこゑが聞えてくる。

(おや?)

と思つたとき

「やられたッ！ 毒ガスだ！」

「マスクをかけろッ！」

と叫び交す聲がまつくらの中におこる。それとともにヒトラアの鼻のあたりに、むつとするやうな悪臭がおしよせた。急いで、ヒトラアはマスクをかぶつたが、そのときはもうおそい。自分では大丈夫だと思つて銃をつかんでみると、夜明けごろになつて眼が痛くなつて來た。

あひかはらず、イギリスのヴィッカーズ機銃はダツ、ダツと火を吐いてゐる。ヒトラアは痛さをこらへながら銃にしがみついてみたが、なにしろ眼が開けてゐられないのだからしかたがない。痛い眼を押へて、塹壕の底にしがんでみると、しばらくして

「おい、どうしたんだ。」

とヨハンのこゑがする。

「眼をやられたんだ。」

「なんだ、眼だつて？」とヨハンはヒトラアの手をその上からとつてみたが、血が流れてはゐない。

「毒ガスか？」

「うん、しかし、もうぢきなほるだらう。」

「よせよ、笑談ぢやないぞ。早く手當しなければだめだ。」

憎い銃聲が止むと、さつそくヨハンはヒトラアの手を自分の首にかけさして後方へ連れてゆく。そのあひだにも、痛みはだんだんひどくなつて、まるで火攻めにあつたやうに、ぢつとしてはゐられない。そして、十時といふともう明るい日射がいつぱいあたつてゐる頃、ヒトラアの眼は何も見ることが出来なくなつた。

「苦しい。苦しい。」

無我夢中で、そんなことをわめきつゞけてゐるうちに、ヒトラアは赤十字列車に

のせられてドイツに歸り、ボンメルンのバーゼワルク陸軍病院のひとつのベッドの中へねかされる。そこでは髭の生えた軍醫が

「アドルフ・ヒトラア上等兵十月十四日未明ホスゲンに眼を冒さる。」
と書いてあるカルテを眺めたのち

「どれ、痛いかな？」

と患者にたづねた。しかし、彼はうなづてゐるだけである。やうやく、ヒトラアが意識をとり戻したのは十月二十一日の朝のことだ

「こゝはどこですか？」

と、看護婦に聞くことが出来たものゝ、どんな顔をしてゐるかはちつとも分らない。

「僕の眼は見えるやうになるでせうか。」

「えゝ、大した心配はいらないつて、軍醫どのがおつしやつてましたわ。」

「さうですか。ぢや、また僕は働けますね。」

「えゝ、働けますとも。盲になつた方だつて何かやつぱり御仕事は出来るのですから。」

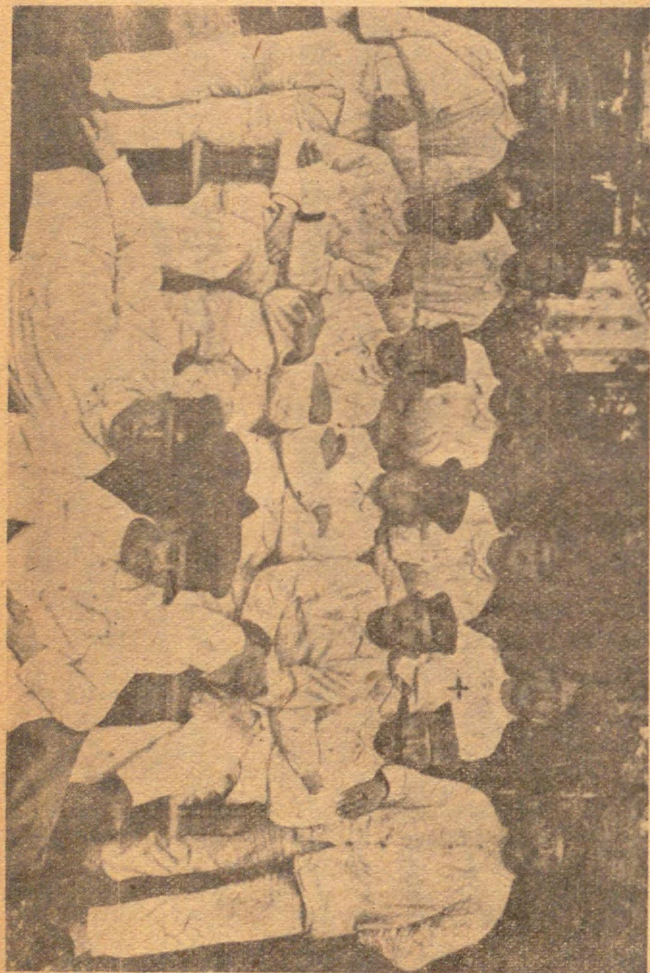
こんなことで、ヒトラアは、たとへもう繪は描けなくなつても、何かで働いて行けるだらうと安心したが、それならばどんなことをしようかと思案してゐるうちに一週間はわけもなくたつてしまふ。そのあひだに、しづかな病院のそとではたゞならぬことが起りさうになつてゐるらしく

「スバルタクス團がレーニンの指揮であばれ廻りだしたさうだ。」

「何だ、また一月のストライキか。」

「いや、こんどのは水兵も参加するといふ話だよ。」

「ふん。するていと、社會民主黨のシャイデマンとエーペルトが入閣したといふのが領けるなあ。」



ペリッツの衛戍病院の白衣の勇士（＋印はトラフ）

「とにかくひと騒動もちあがるね。」

とベッドの會話はそんなことでもちきりで、したがつて否應なくヒトラーの耳にはいる。その度に

（そんなことはない。新聞が讀めないものだから勝手なことをしやべつてゐるのだらう。）

と氣にもとめなかつたが、十一月にはいつて、ヒトラーの病んだ眼も、ぼんやりと白と黒が分るやうになつたころ、五六臺のトラックがそれぞれ手に赤い旗を持つてゐる水兵をいっぱい乗せて病院にやつて來た。水兵たちは入口のところで口を開けて立つてゐる門番を尻眼にかけて、鼠のやうにすばやく各室をかけまはり

「革命がやつて來た。カイゼルの政府はなくなつた。今日から、勞働者の天下である。」

など、叫んでゐる。傷病兵たちは、突然のことで何か分らず、びつくりしてゐる

と、赤旗を持つた水兵たちは、また鼠のやうになくなつた。ベッドの上では

「そいつはいつたいほんとかね。」

と半信半疑で心配しはじめた。ヒトラアは手探りで起き上ると

「おい、みんなそんなに心配することはないよ。たかゞ不良水兵のいたづらぢやないか。二三週間もたてば、わが陸軍の守備隊にみんな捕つてしまふ。」

と落着かせて、さらに

「ドイツにはミュンヘン市民のやうに忠君愛國の人が多から、大丈夫さ。」

「さうとも、さうとも。」

バイエルン出身のものたちはそれをよく知つてゐるので、みんな強く頷いた。そして、ヒトラアはまたしづかに横になつたが、事件は(いたづら)どころではない。

その起りといふのは、十月三十一日のこと、ドイツのキール軍港にある艦隊を、シエーア提督が命令一下、出動させようとすると、水兵たちはいつせいに言ふこと

をきかないで、軍艦には赤旗をかゝげ

「戦争をやめろ。カイゼルは退位せよ。」

とわいわいさはぎながら上陸した。そしてキール町では水兵と労働者とが腕を組んで何かの歌を高唱しながら練り歩く。ベルリンでは、レーニンの指圖で動くスバルタクス團の團長リープクネヒトといった連中が、それぞれ騒動をひろげるやうに密談してゐる。それだものだから、十一月五日にはドイツの北のまもりであるあらゆる港にひろがり、その中の一部がヒトラアのあるバーゼルク病院に押しよせたわけである。それから、さらにラインのいろいろな町や、マグデブルグ、ライプツヒにも擴まり、七日には、ミュンヘン市そのものが赤の政府にとつて代へられた。

ひんぴんとして傳つてくるそれらのニュースは、しづかな病院の中をかけすり廻つて、みんなを起こしたり坐らせたりする。ヒトラアにとつて、その最後のミュン

ヘンの革命はあまり出しぬけで信じようとしても信じられないくらゐだつた。それはまだいゝとして、つひに信すべからざるものを信じさせられる最大のものが訪れた。

十一月十日のことである。品のいゝ牧師が病院にやつて来て、なにか、さしせまつた重大な話があると言ふのである。白衣の勇士たちが講堂に集ると、牧師はさびのある聲を慄はせながら

「みなさん、私はこれから、大さう悲しむべきことをおしらせしなくてはなりません。」

と言ひ、しばらく黙つてゐたのち

「ホーヘンツォレルン家は昨日を以つて皇位を失ひました。つまりカイゼルは退位あそばされ、ドイツは共和國となつたのです。」

といつてはまた言葉をとめ、さらに慄えざるになつて

「神よ、この大變動にあつても、ドイツの國民を見捨てることなく守り給へ。」

と十字を切つた。聞いてゐる兵隊たちは、ごくりと固唾をのみ、しいんとしづまりかえつてゐたが、牧師がやほら勇氣をふるひ起して、ホーヘンツォレルン王家がいかにドイツのために盡したか、それも今は空に歸せられたと話をするに及んで、すゝり泣くこゑが方々に傳つた。さらに牧師が

「こゝに五年間の戦争が終つて、私たちは休戦いたしました。これから先、いかなうな苦難があらうとも、必ずや、神はドイツの國民をお守り下さるであらうこと……」

と話をしてゐるとき、おいおいと泣き出すものが出来てきた。そのうち、一人の白服がふらふらと立ち上つて、今にも何かに突き當りさうな恰好をしながら廊下の方へ消えて行く。それは栗色の髪をして、今は同じ色の髭を生やした三十歳のヒトラアだつた。彼は手探ぐりでベッドに辿りつくつと、夜具の中へもぐりこんで泣き出

したのだ。

（ドイツは負けた。信じまいとしても、ドイツは負けたんだ。そして、赤の國になるなんて、どうして信じられやう。僕たちは五年間、何のために雨とふる彈丸の中で暮して來たのか。祖國のために笑つて死んだ二百萬の戰友は今何と言ふだらう。

そのうちには十七歳で散つた若武者さへあるんだ。いとし子を祖國に捧げた母親の胸のうちは何といつて嘆ぐだらう。戰へばまだ勝てたのに！ あゝ、敗北の汚名を平氣で祖國に塗りつけた奴ら！ マルキシスト！ それからジューよ。國を賣り渡した惡賢いものよ。今に見ろ、お前たちのいつはりの口から泥を吐かしてやるぞ！）

ヒトラアは、こんな工合に、九天の高さからいつぺんに九地に落つこつた祖國のことを悲しんでみると、芝居の幕がぱつとあがつたやうに明るいとこが見えた。

それは外でもない。祖國がいかに大切で、我が身がいかに輕いかといふことがはつきりしたのだ。だから、もうほとんどよくなつた眼で、自分の白い美しい手を眺め

ながら、ある日

「この手ははじめ暮しのために繪を描いた。それから祖國のために銃を取つた。これから何をするんだ。と聞かれゝば……」

と、ぎゅつとその手を丸めて拳固をつくりながら

「ドイツの光榮をふいにした悪魔どもをやつゝけて、ドイツを再建するんだ。」

こぶしは力をいれられたためにぐんぐんと赤くなつてくる。ヒトラアが、ドイツ國のために一身を投げ出さうと決心したのは實にこのときであつた。

結　　び　　の　　話

第一次世界大戰でドイツはなぜ敗れたのだらう？ 作戦の失敗からだらうか、それとも、イギリスが發明した戦車のためだらうか。なるほど、そんなことも敗戦の

理由にあげられるかもしれない。しかしもつと大きい原因は何だらう？ フランスの空中宣傳にしてやられたのだらうか、赤の策略にひつかゝつたのだらうか。なるほど、それは眼に見えて効き目がおつたことは確かだけれども、ドイツの國民に「最後の一人となるまでたゝかふ。」

といった精神がもちこたへられなかつたことが一番大きい原因だらう。

實際に戦線にあつてたゝかふのは一國の人口の一〇%といふのが大體の通り相場になつてゐる。しかし、國が勝つか、負けるかといふことは一國の人口の一〇〇%にひびきわたるものである。ドイツの例は國民の九〇%が、前線にある一〇%よりさきにまゐつてしまつて、つひにドイツ全體が手をあげた、いい例であらう。

そして、ドイツは、その結果、どういふむごい境遇におかれたことか！ 聯合國側は、一九一九年一月十三日のヴェルサイユ媾和會議で、ドイツやオーストリアの領土を削りとり、植民地は全部沒收し、兵隊をごく僅かしかつくつてはいかんといふ

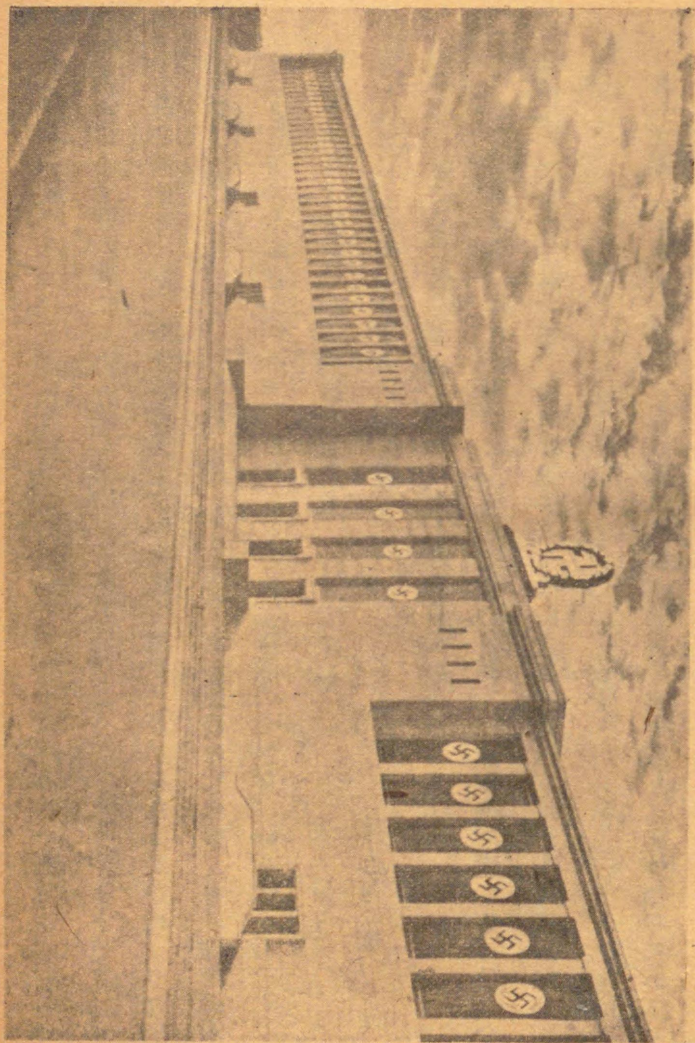
し、その上、天にもとゞくやうな賠償金を出せと言ひ、ドイツはそれでもいやとは言へなかつたのだ。

そして、また、國民はこのためにどんな羽目になつたかといふと、ペン先一本を買ふのに百圓札を一枚出して、それでお釣りが來なくなつた。戦争まへに、百圓貯金してゐたものは、それを引出してみると、ペン先ひとつしか買へないのである。これが有名なドイツのインフレーションといふので、もう少しのところで頑張りが足らずに負けた國民が、それでもつて四苦八苦しなけりばならなかつたのではないか。

ヒトラーがバーゼルクの陸軍病院からもとの丈夫な身體になつて世間に出ると國內はこんなさまである。今や、彼は祖國のためといふ大義に眼ざめてゐるのだから、持ち前の

「精神一到、何事か成らざらん」

ニユー・ルンペン・ベルクの黨大會々場（ヒトラー總統とシュレー
メル博士の共同設計）



といふ意氣ごみがむらむらと起つて、こゝに、たつた六人しかゐなかつた極小國粹黨のドイツ勞働黨にはいる。これがナチスの前身で、間もなく、ヒトラーはこの極小黨の黨首となり、極大黨であつた社會民主黨や共產黨をたゞかひにつぐたゞかひでつひに打ち敗つた。この間、凡そ十五年、そのあひだにはいくど政敵の彈が身近にとんで來たことか。ナチスがドイツの政權を握つてから、いくばくもなく、ヒンデンブルグ大統領がこの世を去ると、ヒトラーは

「これから、いよいよドイツの再建だ！」

と自ら總統の責任を引きうける。ちよつと言葉をかへて言ふと

「うん。これはすばらしい建築だらうぢやないか！ 一軒の家を建てる。ひとつの國を打ち立てる。僕の二十代の夢想はこんなに大きく實現されやうとは思はなかつた。」

四十五歳のヒトラーはかうしていはゞ古今無類の建築家とはなつたのである。そ

して、母屋であるドイツ國が立派になつと、ヴェルサイユ條約を反古紙のやうに造作もなく破いてしまひ、それから、ヨーロッパ全土に、孫のはいる家の敷地を元氣よく探してゐる。

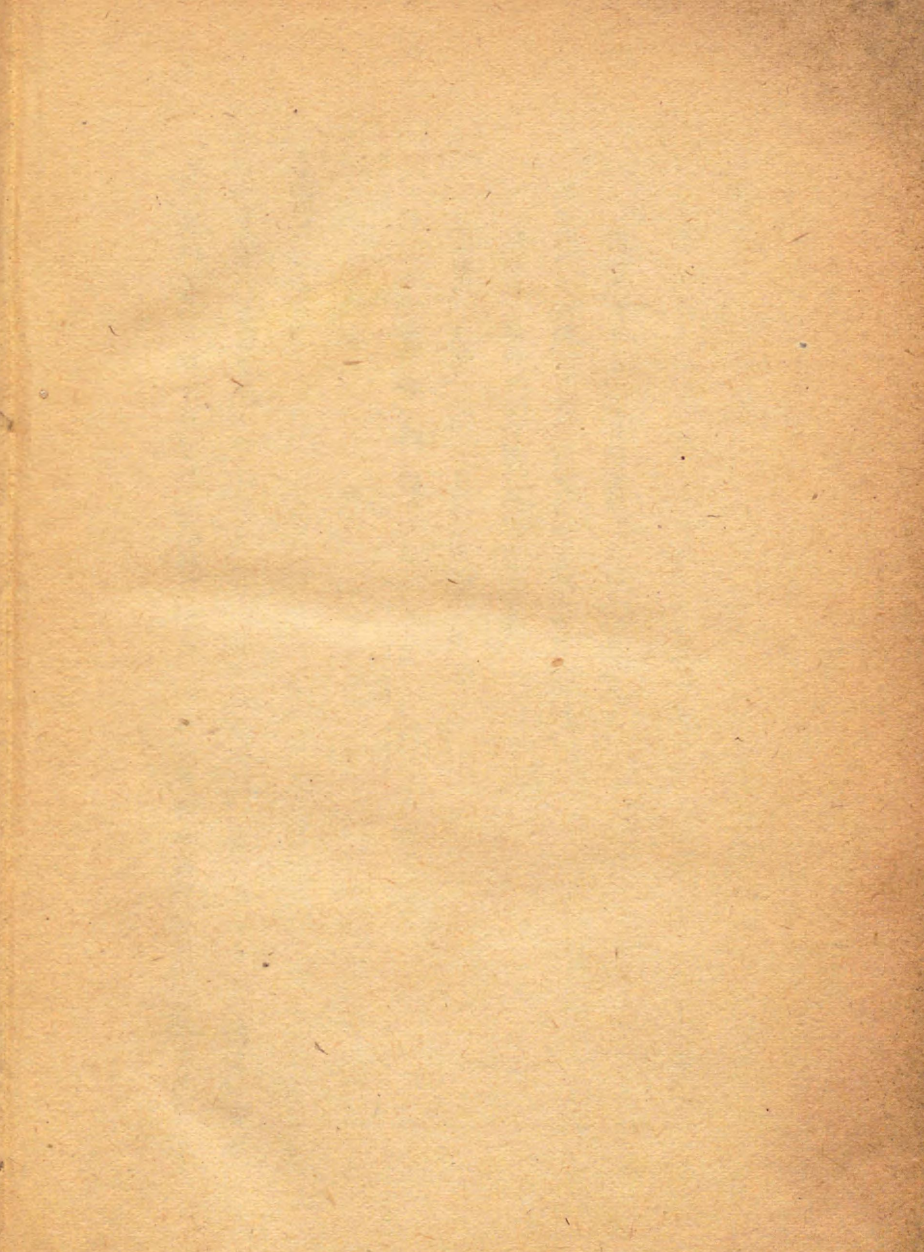
著者略歴

明治四十二年一月十九日東京市に生る。

昭和七年三月東京帝國大學佛文科卒業。

昭和十五年十月圖書出版科學主義工業社へ入社。

昭和十六年十一月外務省囑託となり現在に及ぶ。



少年時代のヒト

著者 權作 所有

出版協承認 い20263

5,000部印刷



昭和十八年五月五日 印刷
昭和十八年五月二十日 發行

定價 壹圓八拾錢

著者

谷 丹 三

發行者

東京市本郷區東片町九二
土 屋 弘

印刷者

東京市神田區鎌倉町一
川 瀨 王 子

印刷所

東京市神田區鎌倉町一
第二川瀨印刷所
(東東四〇七四)

發行所

東京市本郷區東片町九二番地
東 亞 書 院

振替東京一六八二五八番
會員番號一二〇一二八番

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

新刊 新刊 新刊 新刊 新刊 新刊 新刊

長編 童話 心の太陽へ

矢野海彦著
大石哲路裝幀及挿畫

定價壹圓五拾錢
送料二十錢
A 5判二三六頁

茗溪會推薦

偉人 北里博士

中貞夫著
大石哲路裝幀

定價壹圓貳拾錢
送料十五錢
B 6判二四〇頁

童話集 石の鐘

鐵甚平著
大石哲路裝幀及挿畫

定價壹圓貳拾錢
送料十五錢
B 6判二〇二頁

少年戰車兵物語

佐藤武著
福田新生裝幀

定價壹圓五拾錢
送料十五錢
B 6判三四八頁

科學探險

姫野博士の行方

甲賀三郎著
福田新生裝幀及挿畫

定價壹圓貳拾錢
送料十五錢
B 6判二五四頁

密林の仔たち

萩谷百合譯
安泰裝幀及挿畫

定價壹圓六拾錢
送料十五錢
B 6判二八〇頁

ほまれの記章

渡邊哲夫著
坪内節太郎裝幀及挿畫

定價壹圓五拾錢
送料十五錢
B 6判二四八頁

東亞書院

振替 口座 東京
一八二五番

東京市本郷區
二九片町